２０２３年３月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１６日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、前回の番組審議会での答申を受け「２０２３年度東北地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０２３年度東北地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。

続いて、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長　南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
佐々木裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
武田　靖子（株式会社ジョイン 専務取締役）
永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
松沢　卓生（株式会社松沢漆工房　代表取締役）
宮川　宏　（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜放送番組一般について＞

○　２月１７日(金)の東北ココから「震災を詠む ～三十一文字に刻むそれぞれの“あの日”～」を見た。ロバート・キャンベルさんの存在感が大きかった。短歌の番組ということもあり、ＢＧＭを控えめにして、歌のリズムを優先させたことはよかった。女子高生の２人が大人とは違う視点で話していたのが、印象的だった。震災から何日目と数えながら短歌を詠んでおり、時の過ぎゆくさまがよく表れていて、興味深かった。

○　２月１７日(土)の発見！あおもり深世界「志功が愛した青森」を見た。板画家の棟方志功の貴重な映像や実際に面識のある人のリアルな思い出話を取り上げていて、本人の明るいお茶目な人柄が伝わってきた。普段は見ることができない作品など、未公

開のものを掘り起こして発信しており見応えがあった。青森を誇らしく思うような、ポジティブな気持ちにさせる内容だった。

○　３月３日(金)の「あなたの“伴走曲”は何ですか？」(総合 後 7:30～8:42)を、出演したアーティストも気になり見た。序盤から演出のスケールが紅白歌合戦なみに大きく、しっかりした作りの音楽番組だと感じた。震災でのエピソードやコロナ禍で大変だったことなど、一人一人のエピソードを知った上で聴く曲は、心に刺さった。前半は楽しい感じの曲でまとめていて、後半につれてことばの力を感じる曲を持ってきている構成がよかった。また、いぎなり東北産というアイドルが歌う「3000ｄａｙｓ」という曲は、震災を経験した思いがあふれる歌で、涙が出た。伝え続けるという使命を感じて活動していることがよく分かった。東北ゆかりのアーティストの曲が多く、よかった。

○　３月３日(金)の「あなたの“伴走曲”は何ですか？」を見た。３月という時期の放送で、震災と結びつけて見た方も多いと思うが、そうした方々には、少し違和感が残る内容だったのではないか。シンガーソングライターの日食なつこさんが映像で見られるのは貴重だった。

○　３月１０日(金)の東北ココから「３.１１言の葉トラック～あの日、何をしていましたか？～」を見た。陸前高田での場面にはぐっと引き込まれ、介護士の青年が「３.１１は生きなきゃと思う日であり、こう生きたいと伝える人間になりたい」と語っていたことが印象的だった。エンディングでは「明日は３月１１日、みなさんは何をしていましたか？」というナレーションとともに、ペンと紙を映していた場面があったが、これはあなたもことばに表し、あの日を思い出して、生きている意味を考えてみませんかというさりげない誘いだと感じ、ほんの１分ほどのエンディングに企画の趣旨が凝縮されていて、すばらしかった。

○　３月１０日の東北ココからを見た。ナレーションを担当した Kis-My-Ft2 の藤ヶ谷太輔さんの語りが心地よく感じた。トラックが東北以外も訪れていたが、東北各県やもっとほかの多くの地域を回ってほしいと思った。取材に答えていた人たちの属性は、当時の肩書きや年齢などにしたほうが、時の流れを強く実感できるのではないかと思った。震災の記憶がない子どもについては、記憶をつなぎつつも、子どもたちが震災を背負うことが単なる美しいこととならないよう、取り上げ方には気を遣っていると感じた。

○　３月１０日の東北ココからを見た。東京から始まり陸前高田で終わる旅だったが、

どのことばも胸に刺さった。住んでいたところに関係なく、震災は、大なり小なりそれぞれの人生を変えていると感じた。エピソードはホームページでも見られるそうだが、テレビでもう少し映してほしかった。宮城の３０代の男性の「自分が生きている今日の一日は、誰かが生きたかった一日」ということばは、誰かのために生きていかなければならないという、とても印象的なもので、震災の記憶がない若者にも響くことばだと思った。まだまだ記憶も心の傷も癒えていない現実を感じ、復興とは目に見えるものだけではないということを再確認した。

○　３月１１日(土)のＮＨＫスペシャル「海辺にあった、町の病院～震災１２年　石巻市雄勝町～」を見た。ナレーションがほとんどなく、その静けさが印象的だった。津波が来たときに、自分の命を最優先にして逃げることが大事だというのは分かっているが、患者や親しい人がいると見捨てることができないという現実も、やり切れないと感じた。遺族の方々の考えもさまざまで、ありのまま紹介するという形に徹していたのもよかった。震災から１２年がたち、関係者の思いが少し落ち着いたところでしか取材できなかったのだろうと思った。命や犠牲など、とても重い内容だったが、病院の窓から見えた雄勝の海などの映像はとても美しかった。こうした番組こそ、ＮＨＫプラスなどで、広く見てもらいたい。

○　３月１１日(土)のＮＨＫスペシャルを見た。インタビューと字幕が中心の構成になっており、命に関する重いテーマが胸に迫った。遺族たちが心の内を打ち明けていたのが印象的で、亡くなった職員の奥さんは、夫が職務を全うしたことを誇りに思う一方で、本当は逃げてほしかったと複雑な思いを口にしていて、残された方々の思いは、いまも揺れ続けていることを感じた。また、助かった職員の手記が紹介されていたが、その人が番組に登場しなかったという事実が、テーマの重さや、いまだにそれぞれの人に深い傷を残したままだということを浮き彫りにしている気がした。番組を見た私たち一人一人が自分の命についてどう考えるのか、静かに、かつ強く問いかけられているようで、とても印象に残った。

○　３月１１日(土)のＮＨＫスペシャルを見た。残された遺族が、かなり正直な胸の内を話していたのがとても印象的だった。非番や訪問看護に出ていて生き残った職員の方たちも、自責の念にかられどうして自分だけが生き残ってしまったのかと、つらい思いでいる様子もよく伝わってきた。震災を風化させてはならないということばをよく聞くが、時間がたったからこそ言える本音もあると思う。この教訓を未来につなげるには、今回紹介されたようなリアルなことばこそが大切で、粘り強く時間をかけて行った取材には大きな意義があると感じた。重く苦しい内容ではあったが、ところどころにきれいな海、青い空、カモメなどの雄勝のすてきな風景があり、救われたと思

う場面もあった。

○　３月１１日(土)のＮＨＫスペシャルを見た。地域に親しまれた病院があったことが証言からよく分かって、ストレートに言うよりも、インタビューで町の方に語ってもらう形で描いていたのがよかった。

（ＮＨＫ側）

雄勝病院について、若いディレクターが取材する中で感じていたことは、メディアに対する不信感、ある種の諦めのような気持ちに近いものだった。具体的には、メディア側の話して当たり前という姿勢や、放送やテーマありきで現地にやって来て、型にはまるよう求められることに対し、地元では残念に思っている人が多かった。そういったことを一切やめて、焦らず少しずつ話を聞き、物事を理解し、できるだけ深く伝えたいという思いを相手にも感じてもらう中で少しずつ距離が縮まったことが、今回の番組につながった。若いディレクターたちが迷いながら、複雑なことを複雑なまま伝えたいと、ナレーションなしの演出にした。

○　３月１１日(土)のＮＨＫスペシャル　選「最期の笑顔～納棺師が描いた東日本大震災～」(総合 前 0:25～1:14)を見た。実際に復元してもらったご遺体と家族が会ったときに、ああ、桂子だ、桂子だと、とても泣いて、こんなにきれいであれば子どもにも会わせられると感謝していたのが印象的だった。日本ではまだなじみが薄いということだったが、心のケア、人への寄り添い方というのは本当にさまざまで、こういう技術、仕事を知ることができてよかった。今回のような良質な番組の再放送はうれしいと感じた。

○　３月８日(水)のクローズアップ現代「南北４００ｋｍにわたる防潮堤の町　▽芥川賞・佐藤厚志さんと行く」を見た。「荒地の家族」の著者の佐藤さんと一緒に岩手県の宮古・田老地区を回り、それぞれの震災への関わり方が興味深く描かれていた。

○　３月１０日(金)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「東日本大震災　踏みとどまった外国人たち」を見た。震災から１か月の間に約５３万人の外国人が日本を離れ、原発事故がどうなるかも不透明という状況の中で、日本に残った、あるいは日本に来たのは一体なぜなのか、彼らをそういう行動に駆り立てたのは何だったのかを考えさせられた。震災の風化が進む中で、こうしたことも伝えていかなければならない

と感じ、着眼点のよい番組だと思った。

○　３月１１日(土)のＮＨＫ映像ファイル　あの人に会いたい「田畑ヨシ(津波の語り部)」を見た。昭和の三陸津波と東日本大震災の２つの津波を経験された方で、震災後にも「つなみふたたび」という紙芝居を新しく作り、それを子どもや若い人に伝えていこうという強い使命感が伝わってきた。こういった、若い時に教えられた恐ろしさというのは、年月がたっても記憶に残りやすいのではないかと感じた。

○　３月１１日(土)のＤｅａｒにっぽん「１２年目の告白～岩手・陸前高田　漂流ポスト～」をやり切れなさを感じながら見た。遺族が、震災で亡くなられた方へ手紙を書いて投函するポストの存在は知っていたが、管理人の深い葛藤を初めて知った。手紙が減ってきているということで、時間の経過や、遺族の心の変化も感じた。管理人の家族の事情などもあり存続が難しい部分も描かれていたが、別の団体が管理するなど、工夫できないのかと思った。最終的にはポストをやめないという結末だったが、今後も継続的に取材してほしい。

○　３月１１日(土)のＤｅａｒにっぽんを見た。冒頭の映画のような映像が印象深かった。管理人の方が、被災して大切な人を亡くされた思いがつづられた手紙、１２年分の約 1,000 通を読んでいると知り、重い役を自ら背負っていることに驚いた。思いを吐き出す場や手段はとても大事で、書く側の気持ちを思ってこうした活動をしていると感じ、手紙を書いて出す人も管理人さん自身も、それぞれが大切な存在で、そうした存在に支えられて、人びとは生きているのだと改めて感じた。また、この番組を震災で大切な人を亡くした方が見たときに、どう感じたのかも知りたいと思った。

○　３月１１日(土)「みやぎから、－佐藤健・神木隆之介 新しい旅のカタチ－」(総合 後3:10～3:54)を見た。俳優の佐藤さんと神木さんが、肩ひじを張らずに、同世代の宮城在住の方々と向き合って話をする姿が印象的だった。「誰かと関わり力を合わせることで、想像できないほどのパワーを生むんだ」ということばが胸に響き、視聴者にも自分にも何かできることがあるかもしれないと感じさせるものだった。番組では、書籍『みやぎから、』の紹介はしていなかったが、著者印税や仙台謎解きウォークの利益が寄附されるとネットで知り、もし番組で紹介していれば、イベントに参加しようとか、書籍を買ってみようというワンモアアクションにつながったのではないかと思った。震災当日に、あなたも関われることがあるというメッセージを優しく真っすぐに届けていた、すてきな番組だった。

○　３月１１日(土)のこころフォトスペシャル「あなたを忘れない　１２年目の手紙」

(総合　後 3:55～4:44)を見た。俳優の鈴木京香さんの朗読が心に響いた。印象的だったのは、大好きな旦那さんを亡くされた女性の、写真のあなたは変わらない、いつもすてきな笑顔なのに私だけが年を取っていくわという手紙で、一緒にいられるということはとても貴重なことなのだと感じた。震災から１２年、毎年震災関連の番組を視聴しているが、見ている自分たちの側も、受け止め方や考え方の変化が起こっているのを感じる。今後も取材を続けていってほしいと改めて思った。

○　２月２５日(土)のＥＴＶ特集「ルポ 死亡退院～精神医療・闇の実態～」を見た。ちょうど東京都の精神科 滝山病院で看護師が患者への暴行容疑で逮捕された一週間後ぐらいに放送があり、問題の本質は何なのか、病院だけの問題なのかなど、暗部をえぐり取った番組で、改めて大きな闇のようなものを感じた。精神科のこうした問題は、いままで何度も何度も同じようなことが繰り返されていて、単純ではない複層的な問題だということもよく分かった。

○　３月１１日(土)総合「はまなかあいづＴＯＤＡＹ」(総合 後 6:05～7:00 福島県域)を見た。廃炉に向けた作業は少しずつだが着実に進んでおり、行くたびに風景が変わっていると感じる。多くの人にとっては、情報がアップデートされず、かつての記憶で時が止まっていることも多い福島第一原子力発電所だが、「６年ぶりの原発入構」という企画は、福島第一原発について情報のアップデートを可視化するためにも有意義な手法だと感じた。こうした観点から、県内のみでなく県外や国外にも情報を発信し続けてほしい。

○　３月１１日(土)のＥＴＶ特集「震災から１２年　5400 人の“被災地からの声”を掘る」を見た。番組が１２年かけて集めた、延べ 5,400 人の声の積み重ねは、被災者がそのとき何を感じて、何を望んで、何を訴えたいのかというのが時間の経過とともに変化していく様がよく分かった。こうした被災者の声の記録は、今後の防災にも役立つ非常に貴重な資料だとも思った。「創造的復興というのを被災者は果たして求めていたのか。それはやっぱり中央の物差しで見た被災地のつくり替えではないだろうか」という指摘は鋭いと感じ、創造的復興と被災者が望むもののギャップを端的に表していた。震災の風化が進むと言われる中、こういう形で被災地から粘り強く問い続けていくべきで、今後も「被災地からの声」が果たすべき役割は大きいと思う。

○　３月１１日(土)のＥＴＶ特集を見た。多くの時間と労力をかけ、１２年間で 5,400 人の声を集め、その一人一人と向き合ってきたからこそのドキュメンタリーだった。高校生だったり、遺族だったり、その時々のありのままの声を伝え続けてきたからこそ、アーカイブとなって、時間の変化も伝わる丁寧な番組になっていると感じた。津

田喜章キャスターの、「一緒にいるという感覚です」ということばに、思わず目頭が熱くなった。今後、ＮＨＫプラスで「被災地からの声」を配信していくことで、貴重な声の記録を全国へ届けられるようになり、ありがたい。

○　３月１１日(土)の篠山輝信×東北旅「バスで！列車で！篠山輝信×震災１２年の東北旅」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 前8:00～8:59)を見た。大船渡の防災ゲームでは、津波があと３０分で押し寄せるときの行動などをゲームで体験することで、若い人も考える機会が増えると感じた。また、石巻のおばあさんが「こういう境遇に遭った人じゃないと分からないでしょうね」といったことばはとても重く感じた。建物や道路は復興しても、目に見えない部分はまだまだだと感じた。篠山さんが長期的に被災地に足を運び続けているからこそ、住民の皆さんも本音を語っているのが伝わってきた。震災に関する報道が少なくなっていく中でも、現状を毎年伝えている番組はありがたいと感じた。こうした番組をもっと全国で放送して、広く見てほしい。

○　３月１１日(土)の篠山輝信×東北旅を一緒にじっくり回っている気分になりながら見た。震災関連というと、重さや苦しさ、葛藤とか苦悩を感じることもあるが、篠山さんのキャラクターがよく、話すテンポやフットワーク、表情の豊かさなどが、番組の穏やかなイメージを作っていた。石巻の災害公営住宅では、地域でコミュニケーションが苦手な高齢者を取材していて、「この境遇や気持ちは分からないだろう」ということばを受け止めたときの、複雑な表情と、ことばに詰まっている様子はリアルで、心情がより伝わってきた。建物だけではなく、人のつながりや、心の居場所があってこその復興だと感じた。今後も継続してほしい。

○　３月１２日(日)のこころの時代～宗教・人生～「原発にあらがい続けて～早川篤雄『福島からの伝言』～」を見た。原発建設時から長期にわたり、反原発運動の中心として活動するとともに、地域のよりどころであった早川さんの人柄が伝わってきた。落ち着いた構成で、震災前後の写真や映像をふんだんに使い、視聴者を飽きさせない工夫がなされていた。何度も再放送し、早川さんの「伝言」を全国の多くの視聴者に届けてほしいと感じた。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２３年２月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１６日(木)、ＮＨＫ仙台放送局（ウェブ開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「２０２３年度東北地方向け地域放送番組編集計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告、視聴者意向報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長　南條 和恵　（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
武田 靖子　（株式会社ジョイン 専務取締役）
前川 直哉　（福島大学教育推進機構高等教育企画室 准教授）
松沢　卓生（株式会社浄法寺漆産業　代表取締役）
宮川　宏　（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　基本計画の中に「民主主義の発展に寄与します」ということばがあるが、現在、本当に正しい情報は何かが、とても分かりづらくなっていると思う。最近では、生成系ＡＩがどんどん出てきている。何が正しいのか、どこまでが本物なのかが分からず、社会的にも不安を感じる場面がある。日本は民主主義国家で、かつ資本主義国家でもあるので、そういったものが揺らぐことがないような形での報道をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

新しいメディア空間ができてきて、膨大な量の情報があふれ、何を判断の根拠にしてよいかが難しい時代になってきている。信頼性の高さだけではなく、目立つ言説のほうが速く拡散し、瞬間的には影響力を持ち得る時代だからこそ、きちんと地に足をつけて検証可能な形で、丁寧な取材、情報発信を引き続き行っていきたい。スピードも意識しつつ、その時点でどこまでが分かったことで、何が分からなかったのか、そういったことも含めて客観的に判断できるような形で正しい情報を出していくことは我々の使命だと思っている。

○　「地元密着と地域連携を強化」とあるが、東北各局では、さまざまな番組を制作していて、地元のよさや歴史を伝える良質なものが多い。全国でも放送してほしいと思うが、どういう内容であれば全国で放送するのか。発信することで、東北のよさを理解してもらい、インバウンドも含めて東北に来てもらうことは、地元の願いでもある。

（ＮＨＫ側）

平日の午後１時、２時台は、地域の情報を全国に伝えていく枠として設定している。２時台には新たに、地域の課題解決を紹介する枠を作ろうと取り組んでいる。派手さなどよりも、その土地ごとの「らしさ」や、人のぬくもり、素直な思いなど、ありのままを丁寧に紹介していくことが大事だと思う。全国放送のためにスタイルをそろえると番組ごとの特徴がなくなる場合もある。多様性をできるだけそのまま紹介するような形で放送したい。国際放送では、英語のナレーションをつけて地域の情報を発信している。当たり前だと思っていたことを丁寧に伝えていく中でのおもしろさがあり、全国放送へ展開することも試していきたい。引き続き意見をいただけたらと思う。

○　若い人のスポーツ離れを懸念している。努力の大切さや、長い時間こつこつやれば成果が出るということを若い人にも知ってもらいたい。もう少し、スポーツの番組があればよいと思った。

（ＮＨＫ側）

引き続き、ＮＨＫならではのスポーツの取り上げ方を探って

いきたい。オリンピックやワールドカップなどの放送権料が高騰する中で、地域のスポーツを丁寧に放送していくことが、ＮＨＫの放送・サービスのあり方として大事だと思う。ローカル放送では、決勝戦だけではなく、そこまでのプロセスも含めた人の顔が見える番組を制作してもらいたいし、そういった番組を全国にも紹介していきたい。また、「ブレイキン」という新しい種目がパリ五輪に向けて話題になっていて、若い方たちに人気が出てきている。こうしたものも一生懸命応援していきたい。

○　地域の情報をほかの地域にどのように届けていくのかが大切で、午後１時台の列島ニュースが支持されたのは、これまでの東京中心の番組作りに視聴者がある種のノーを突きつけたのだと感じている。こういった意識を番組作りにどう生かしていくかが鍵になる。「ＮＨＫプラス」では、全国に向けて、南関東エリアの番組は放送と常時同時に配信され、ほかの地域の番組は後から配信されるが、知らず知らずのうちに東京中心の考え方になってしまっている部分もあると思う。しっかり振り返りながら、方向性を考えていってほしい。

（ＮＨＫ側）

今後、まだ工夫していく必要があると思っている。

○　家族で楽しめる番組とあるが、子どもの日常では、ゲームや動画配信サイトの利用など一人で画面に向かっている時間が非常に長い。会話が生まれるきっかけになるような番組をぜひ作ってほしい。

（ＮＨＫ側）

番組を家族で見てもらうことが、昔ほど簡単ではないと実感している。家族がいつもリビングにいて多世代が一緒にブラウン管を眺める時代ではなく、共働きも多く帰宅時間もばらばらで、同じ部屋にいても全員が違う画面を見ていることが当たり前になってきている。例えば、番組の中で自分と同じような気持ちや価値観を誰かが代弁するなどして、これは自分の番組でもあると思える部分を作っていくなど、共通の話題を提供し、話のきっかけとなる番組を制作していけないか考えている。

＜「２０２３年度　東北地方向け地域放送番組編集計画(案)」について－諮問－＞

○　基本方針に「人口減少など地域の課題を見つめて解決につながる対策をさまざまな角度から提示」とあるが、子育て世代や若い女性がなぜ東北や田舎から出ていくのかをリアルに追って伝える番組を検討してほしい。自治体が財政面でさまざまな支援策を講じても、若者や女性が離れていくのはなぜなのか、しっかりとした取材でぜひ東北から解決策を提示してもらいたい。

○　価値観が変わってきている中で、若い世代がどう考えているのか、どういう理想的な社会を描いているのかを伝えてほしい。特に現在の経営者層は、若者の声を拾うことができていない。そういった上の世代に届けるためにも、若い世代の声や実態を知ってもらえる番組・企画に取り組んでもらいたい。

○　盛岡がニューヨーク・タイムズでことし行くべき場所の一つとして取り上げられた話題で盛り上がっている。祭りなどではない日常的な姿が紹介されたことも大きく、地域の気づかなかった魅力を発掘する大切さを感じた。ＮＨＫの記者やディレクターは、他の放送局とは異なり転勤してくる人が多いと思う。ほかの土地からきて見えてくる地元の人が気づかなかった魅力を地域に伝えてほしい。

○　東北各県が抱える課題は、東北全体の問題であることも多いので、その地域だけに発信するのではなく、各放送局のネットワークをいかして東北全体を意識した番組作りに力を入れてほしい。また、震災の風化が進んでいて、東北の被災地に伝えるのは当然だが、もっと被災地以外にも発信しないと、全国の人から忘れられてしまうのではないかという危惧がある。どの地域も被災地になり得るので、その辺りも含めて発信力を強化してほしい。

（ＮＨＫ側）

いただいた意見を現場にいかしていきたい。地域の課題を若い世代はもちろん、すべての世代の方々に伝えていきたい。また、さらなる全国発信に力を入れてほしいという意向も改めて受け止めた。東北全体のＮＨＫの発信力も強化していきたい。

○　諮問された「２０２３年度東北地方向け地域放送番組編集計画(案)」については、委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とし、答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜放送番組一般について＞

○　１月２０日(金) 東北ココから「女性のひきこもり～見過ごされてきた声～」を見た。こうした問題は地域の課題として耳にすることも多く、番組化は広く発信する大きな一歩だと感じた。主婦はコミュニティに属してなく寄る辺がないという話や、外出に付き添ってくれる人がいることで世界が広がっていくといったことが印象的だった。こうした地域のつなぎ役がいることの重要性や、シェアハウスの紹介など解決策につながり得る可能性を示していたことがよかった。問題提起だけではなくて、生きづらさから抜け出している事例をもっとシェアしてほしい。

○　１月２０日(金)の東北ココからを見た。よく聴いている「みんなでひきこもりラジオ」の栗原望アナウンサーが出演しており印象的だった。落ち着いたトークが魅力的で、本当に寄り添っている感じがして、声のトーンはとても大事だと思った。専門家の説明で、「女性のひきこもりには東北特有の事情がある」としたうえで、「我慢して耐えて乗り越えていく精神構造がある」とか、「東北では男は外、女性は中という古風な考え方がある」などの話があり、少しステレオタイプだという印象も受けた。研究者だからこそ、それらをデータで説明してほしかった。震災の影響のほうがはるかに大きいのではないかとも感じた。

○　１月２７日(金)の東北ココから「えふえむ旅　ＮＨＫ×コミュニティーＦＭ　地域の底力を発掘！」を見た。タレント・俳優の小田井涼平さんは人柄もよく、仙台に住んでいたこともあり説得力があった。番組ではさまざまなすごい人が出てきたが、軽く触れるだけの人もいてもっと見たいと思った。メディアに出ていないが、世のため人のために頑張っている人は多くいると感じた。小田井さんの「東北の人は、もともとすごい。そういうところを外にひけらかさない」というコメントがよかった。

○　１月２７日(金)の東北ココからを見た。紹介人数が多く、少し詰め込んだ感じはあったがテンポよく見られた。小田井涼平さんの魅力が企画とマッチしていると思った。

仙台二高の柔道の指導者の話があったが、各学校のこうした有名な人を紹介する企画があれば、ＯＢも懐かしく見るし、地域の人にとって地元の学校への理解が深まるきっかけになるのではと思った。また、ＯＮＥ　ＴＯＨＯＫＵでの、会社の垣根を越えた若者のつながりはすばらしいと感じた。若者発の地域活性化や社会問題への取り組みを紹介することで、ほかの地域の若者も力づけられると思った。

○　１月２７日(金)の東北ココからで、周りの人を笑顔にする取り組みをしている方が出ていて、見ていてすがすがしい気持ちになった。中でも、伝説の柔道家の三船十段の親戚である三船先生が、宮城県屈指の進学校である仙台二高で指導しているという話は、とても興味が湧く内容だった。三船十段の編み出した必殺技の説明がおもしろかったが、投げる途中のポーズまでだったので、技を再現してほしかった。また、小田井さんの三船先生へのインタビューではマスクを外したほうが、表情がよく分かったのではないかと思った。小田井さんと一緒に地元のコミュニティーＦＭ局のパーソナリティーの方が行動していたが、役割分担が少し分かりにくかった。

○　２月３日(金)の東北ココから「限界集落住んでみた　岩手・岩泉編」を見た。閉校になった大川小学校が地域の人の心のよりどころになっていると感じ、販売会の様子も共助としてすばらしいと思った。ただ、ディレクターが中学生に「大川は好き？」と質問していたのは少し気になった。「好きです」以外の答えはしにくいだろうと感じ、好きだから住み続けているというシンプルな状況ではないこともあると思う。もう少し踏み込んだ質問で地域の関係性を描く工夫があってもよかった。この番組では人柄や雰囲気が伝わり毎回新鮮な気持ちになるが、自分とは関わりのない場所として捉えてしまうこともある。集落が周辺の地域とどのようなつながりがあるのかももっと知りたいと思った。

○　２月３日(金)の東北ココからを見た。人の温もりや助け合いで成り立つ社会など、失われつつある日本の原風景といったノスタルジックな部分が余韻として残った。「なくなったけどなくなっていない」というコメントが印象的で、都会ではさまざまなものが失われていくが、ご近所さんとか、界わいといった、昔あった懐かしいもののよさを改めて思い起こした。限界集落は、地方都市の将来の姿でもあるが、豊かに生きるとは何か、ということへの示唆を感じ取れ、「限界って何だ」という問いは、「豊かさとは何か」という問いとつながると感じた。

○　２月３日(金)の東北ココからを楽しみに見た。閉校した大川小学校では定刻になるとチャイムがなぜか鳴っていたり、向かいの商店も閉店しているのに在庫を細々と売っていたり、役目を終えても生き続けているという共通した寂しさが印象的だった。

まきで暖を取るための煙が上がるのを見てそれぞれが生活している様子を感じることには、なるほどと思った。ゲストの井上咲楽さんが「とてもきれいなものを見た」と言っていたとおり、美しい景色や大川の人たちの素朴な生活、たたずまいに引き込まれた。今後放送する拡大版も期待している。

○　２月１０日(金)の東北ココから「語り部クロス～語り継いでいくために～」を見た。語り部の活動をしている若い人の中には、就職などをきっかけにやめる人もいることを初めて知った。小学校中学年以下の子どもは震災のことを直接知らないので、誰かが伝えなければいけない。語り部がいることで記憶を風化させずに引き継いでいけるのはありがたいと感じた。語り部の永沼悠斗さんのしっかりした口調が印象的で、聞きやすく、さすがだと感じた。番組をきっかけに、伝えることに興味を持つ方が増えたらよいと感じた。

○　２月１０日(金)の東北ココからを見た。語り部をしている若い人たちが少なくなり、孤独感を感じるという課題を共有する中で、何のために語り部をやっているかという本質が見えてきた。語り部の話を聞いた人たちはどう思ったのかも知りたいと思ったし、実際に語り部の話しているシーンも見たかった。「過去を伝えるだけじゃなくて、これは何のためにやっているか。未来をひらくため」というメッセージはよく分かった。

○　２月１０日(金)の東北ココからを見た。２９歳の女性の語り部が「永沼さんと会ったことで私は一人じゃないと思った」と言っていたのが印象的で、若い世代にとって、ほかの語り部と交流することがとても大事なのだと感じた。福島県富岡町の宗像涼さんは、昨年９月１１日放送の明日をまもるナビ「東日本大震災～若者たちが いま語る１１年～」にも出演しており、福島局で継続取材を重ねて寄り添い、悩みを聞き出して番組へ発展したのかなと思った。ＮＨＫがアンケートをしてこの番組ができたということだが、語り部の活動を続けていく上で課題を共有して解決するような仕組みがあったらよいのではないかと感じた。

○　２月１２日(日)のＢリーグ２０２２―２０２３「秋田ノーザンハピネッツ」対「仙台８９ＥＲＳ」(総合　午後 1:50～4:30)を見た。現在のチームの立ち位置や試合の状況の解説が分かりやすく、現地で試合を見るのとは異なる角度から楽しめた。ゲストの純烈が初めて生観戦した興奮を伝えていて、会場に足を運ぶきっかけになると感じた。今後も、視聴者がスポーツに興味を持てる工夫を凝らした中継や番組に期待したい。また、東北温泉地応援プロジェクトとのコラボ企画も、選手が「踊ってみた」をしたり、お勧めの温泉を紹介するコーナーがあったりしてよかった。東北の魅力を全

国に発信するために東北各地をどんどん訪れてほしい。

○　２月１４日(火)のいいいじゅー！！「岩手・奥州市」を見た。横浜から移住して南部鉄器で音響機器を作っている若者を取り上げていて、明るくポジティブにチャレンジする様子が印象的だった。電子部品の組立てや回路の様子をイラストで分かりやすく表現していた。機器はプロのギタリストからも評価されていて、海外市場にもチャレンジしていく姿はとても頼もしく、刺激をもらった。南部鉄器のような地場産業と結びつく移住の事例はとても参考になった。

○　ドラマ１０「大奥」を楽しんでみている。ひとりひとりの人物がしっかりと描かれ、生きざまやセリフを含めて魅力的だ。大河ドラマとはまた異なる、女性・若者を意識した作品だと感じ、初めて時代劇を見るという子育て世代の視聴者も多いと聞く。大奥をきっかけに「ＮＨＫプラス」に興味を持つ人もいて、利用することで、ほかの番組も知ってもらえ、ＮＨＫとの距離が縮まる可能性を感じた。一方で、利用方法も含めた「ＮＨＫプラス」についての情報が届け切れていないと感じることも多いため、しっかり伝えていってほしい。

○　２月４日(土)テレビ７０年記念ドラマ「大河ドラマが生まれた日」(総合 後 7:30～8:45)を青春群像劇として楽しく見た。悪人が一人も出ないというのもよかった。おでん屋の場面が印象的で、おいしさの秘密を聞くと、店主のイッセー尾形さんが「実は、孫に食わせて、孫がおいしいと言っているものを出しているだけなんだよ」と答えるシーンは、テレビも、身近な人に喜んでもらうことが結果的には不特定多数の人に届くという創作現場の原点のメッセージだと感じ、ＮＨＫの決意表明とも受け取った。

○　２月３日(金)のねほりんぱほりん「元Ｋ－ＰＯＰアイドル練習生」を見た。カメラワークや、モグラとブタのぬいぐるみのびっくりしたときの目の動かし方、体の動かし方の表現力の豊かさに驚き、細部へのこだわりを感じた。動画配信サイトなどでもありそうなテーマだったが、練習生だけではなく、経営者サイドの声も取り上げていて、フラットな情報の伝え方がよかった。ただ、内容は知っている情報が多く、少し物足りなさを感じた。

○　２月１１日(土)テレビ放送７０年「おかあさんといっしょ」から見るこども番組(Ｅテレ 後 8:00～8:59)を見た。社会構造とともに変わっていく子ども番組についてよく分かった。構成がノスタルジックな部分とアカデミックな部分の双方が混在し、少し消化不良気味な部分もあった。

○　２月初めの首相秘書官の性的マイノリティーへの差別発言に関する報道のあり方について。各社で表現が分かれ、「差別発言」と書いたところも多かったが、ＮＨＫは残念ながら「差別的な発言」とワンクッション置いた表現をしており、「差別発言」と言い切れない弱さを感じた。その弱さは、あの発言でつらく苦しい思いをした多くの性的マイノリティー当事者を深く傷つけているということをぜひ自覚してほしい。来年度の編集の基本方針に、「共生社会の実現を後押しする」ということばがあるが、対立や争いを恐れ、断定を避け、偽りの中立を図るのは共生ではない。マイノリティーを排除しようとする差別について、しっかりと差別だと指摘することが真の共生社会につながると思う。誰のためのＮＨＫかが問われている場面だと思うので、ぜひ議論のきっかけにしてほしい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２３年１月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ仙台放送局（ウェブ開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、放送番組一般について活発に 意見の交換を行った。

その後、放送番組モニター報告、視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出 席 委 員）

委 員 長　　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長　　南條 和恵　（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
武田 靖子　（株式会社ジョイン 専務取締役）
前川 直哉　（福島大学教育推進機構高等教育企画室 准教授）
松沢　卓生（株式会社浄法寺漆産業　代表取締役）
宮川　宏　（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜放送番組一般について＞

○　１２月１６日(金)の東北ココから「幽のこえを聴く　～みちのくの怪談作家たち～」を見た。怪談は、地域の歴史、文化、風土を反映していて、語り継ぐことは地域文化の継承、保存としての意味があると思った。東日本大震災のときに、さまざまな怪談話、不思議話があったことには、震災時は極限状態だったので、感覚が研ぎ澄まされていて、普段見えないものが見え、感じ取ることができたのだろうと腑に落ちた。内面に押しとどめていたものを語ることでけじめをつけたというエピソードは、震災がいまだに終わっていないというメッセージでもあると思った。

○　１２月１６日(金)の東北ココからを見た。青森県弘前市の鬼神社からスタートするとても引き込まれる演出だった。東北の怪談、不思議な話を怪談作家の方たちが地道に拾い集めることは、とても重要な事実の記録になり得ると思った。ねぷた絵師の方

の語りでは、津軽弁でなければ表現できない雰囲気があり、大事な要因の一つに方言があると感じた。山形の地域で語り継がれているシンという不思議な存在についても、番組内では片仮名でシンというふうに表現していて、じわじわと不思議な怖さが感じられておもしろかった。東北の死生観にも関わる興味深い話だった。こういう番組を今後もぜひ作ってほしい。

○　１２月１６日(金)の東北ココからを見た。冒頭の弘前市の鬼神社で鬼ごっこをする子どもたちの映像が印象的で、夕暮れが迫る中、鬼が出てきそうな雰囲気と土俗的な土地の土の匂いのようなものが伝わってくる見事な導入だった。ねぷた絵師の方の鬼の掛け軸をめぐる話も、語り口そのものが怪談となっていて、読むのと聞くのとでは印象が全く違うと感じた。怪談が民話と同様に、口承文芸として伝わってきことが改めて理解できた。怪談の奥深さが伝わってきて、ゲストの白鳥久美子さんが言ったように、優しい気持ちで寄り添えるものだと見方を変えた人も多かったのではないか。目に見えない世界をいかに伝えるかという点では、鬼神社のシーンやイラスト、朗読、音楽などで、工夫を凝らしていたと感じた。

（ＮＨＫ側）

「幽のこえを聴く」の冒頭のシーンは、夕方に鬼神社でイメージ映像を撮っていたら、たまたまそこに子どもたちが現れて鬼ごっこを始めるという奇跡のような瞬間があって、カメラマンも露出を調整するのが間に合わずに、色合い的にも不思議な感じになった。子どもたちが、鬼がいると信じている様子がとてもよく、オープニングに採用したシーンなので、印象に残っていたことはうれしい。制作に当たったディレクターは、震災の後、亡くなった人との関わりや思いをずっと取材してきて、背後に東北の文化が根強くあることや、こうした話を怪談作家の人たちがあちこちでヒアリングして回っているという事実を知って、何か企画ができるのではというのが番組の始まりだった。

○　１２月２４日(土)のやまコレ「ばばちゃんたちの宝のそば」(総合 前 10:30～10:57 東北ブロック)を見た。山形県鶴岡市の山あいの宝谷地区でおばあちゃんたちがそば屋をやっている様子は、とてもかわいく感じた。何年もずっと一緒にいるからこその距離感が番組を通じて伝わってきて、あうんの呼吸で働く様子に幸せを感じた。新そばの時期には多くのお客さんが並び、そば屋やおばあちゃんたちが地域にとって宝の存

在であると感じた。一人一人の地域住民の生き方、人生に触れることは、地元に住む人の郷土愛にもつながると思った。

○　１２月２４日(土)やまコレを見た。ばばちゃんたちの楽しそうな雰囲気が伝わってきて、見ていて穏やかな気持ちになり心地よかった。手書き風のテロップが随所に使われていて雰囲気に合っていた。そば屋の存在がばばちゃんたちにとって大事で、生きる活力になる場所、自分がそれを必要としているからやっているという動機がしっかりと描かれていて共感できた。一方で、ディレクターの「ここに来ると笑っていますか」などの質問に、誘導しているという印象も受け、少し違和感が残った。

○　１２月２４日(土)印度カリー子の“みち”との遭遇「＃７　里芋×スパイス」「＃８さけ×スパイス」(総合 前 11:30～11:50 東北ブロック)の２本を見た。里芋を地面にたたきつけてばらばらにする、ぶっかきという作業に挑戦する場面で、農家さんが、「皆さん、旦那さんの顔を思い浮かべながらぶっかきをやって、すっきりされています」と話していて、少し引っかかりを感じた。比喩として聞き流せばよいのか、少し悩んでしまった。２本目の養殖のサケでは、収穫から印度カリー子さんと一緒に体験して、料理をするという流れがとてもよかった。現場を体験すること自体が未知との遭遇になっていて、料理番組としてだけでなく、別の側面からも東北の魅力を引き出していると感じた。

○　１２月３１日(土)限界集落住んでみた　山形編「たっぷり４５分版」(総合 前 11:07～11:52 東北ブロック)を見た。追加されたシーンがどれもすばらしくて、膨大な映像を編集で切り詰める作業の大変さを感じた。ディレクターの市原力さんの目を通して感情移入もしながら土地を知ることができ、何度見ても新たな発見があった。住民の方とのやり取りを見て、限界集落に住むことがネガティブなものではなく、そこに住む人は明るく感性豊かで、厳しい自然の中に生きることを誠実に受け止めている。冗談も言いながらよく働いて、他人に喜んでもらうことをよしとしている姿に、幸せとは何なのかと改めて考えさせられる、示唆に富む内容だった。

○　１月１日(日)東北ココから「あなたの町の映像アルバム～青森・宮城編～」(総合 後 3:14～3:41 東北ブロック)の再放送を見た。懐かしい映像に、自分の子ども時代を思い出して引き込まれた。「映像の世紀　バタフライエフェクト」は、練られたストーリーに応じて映像をつなぎ合わせる演出主導の作りだが、この番組は、映像にゆかりのある人が過去の映像を見ながら出演者主導で番組が進められるという対照的な企画になっていて、映像をどう料理するかで全く印象の違う番組となり興味深かった。どちらも訴求力があり、改めて映像の力を感じた。

○　１月１３日(金)のみちたん～ああ！すばらしきセカイ～「ブラボー！で４５回目」(総合 後 7:30～7:57 東北ブロック)を見て、未知の世界の楽しさがあふれる番組だと思った。ホームページで東北のディープな情報を募集していると知り、自分も送りたくなった。宮城県涌谷町については、１４日(土)の「大好き♡ 東北 定禅寺しゃべり亭」でも声優の安野希世乃さんが出身地として熱く紹介していて、より深く知ることができた。クリエイティビティ全開なたこ焼き店の店主など、未知との遭遇でインスピレーションを受けるという部分は、まさにタイトルの通りだと感じた。番組も８年目を迎えじわじわとファンになっている。今後も大いに期待したい。

○　１月１３日(金)のみちたん～ああ！すばらしきセカイ～を見た。涌谷町で雲海が見えると知らず驚いた。発生しやすい条件も紹介していたが、今後見られる人が増え、観光的な価値も上がっていくとよいと思った。山形県河北町の動物園の話も、おもしろく、共感を持って見た。この動物園に行ってみたいと思った。

○　１２月２９日(木)のＮＨＫスペシャル　未解決事件　Ｆｉｌｅ．０９　松本清張と帝銀事件　第１部　松本清張と「小説　帝銀事件」(総合 後 9:00～10:29)と１２月３０日(金)の未解決事件　Ｆｉｌｅ．０９　松本清張と帝銀事件　第２部　７４年目の“真相”(総合 後 9:00～9:59)を見た。このシリーズは毎回見応えがあり、今回も期待を裏切らない内容だった。逮捕された平沢貞通さんは冤罪で、当時日本を治めていたＧＨＱの強い意向が働いたのではないかと、残された貴重な映像やアメリカの公文書、インタビューなどを基に展開しており説得力があった。ドラマでは、大沢たかおさんが松本清張を演じていて迫真の演技が実によかった。帝銀事件はまだ再審請求が続いていて、真相は闇の中にあり、放置して日本がここまで歩んできたということは一体なぜなのかと改めて考えなければいけないと思わされた。

○　１２月２９日(木)のＮＨＫスペシャル　未解決事件　Ｆｉｌｅ．０９　松本清張と帝銀事件を見た。時間もお金もかけた質の高いノンフィクションで、よくこのような映像が手に入ったと感心した。警察でも検察でもない立ち位置からどんどん真実を探っていくが、暴くことも実名を挙げることもできない。こうした制約の中で、もしかしたら真犯人かもしれないという憲兵Ａの亡くなった日付を出すなど、まさにドキュメンタリーの迫力であり興味深かった。年末年始にさまざまな番組があったが、真剣に見たのは再放送が多かった。以前に見て心に残り、安心できる番組を再度見たいと思った。ＮＨＫの真骨頂はこういった部分にあるのではないかと感じた。

○　１２月２９日(木)のＮＨＫスペシャル選「未解決事件Ｆｉｌｅ．０３　尼崎殺人死

体遺棄事件」(総合 前1:46～3:15)を見た。徹底した取材によって、当時分からなかった部分が少し理解できた。作家の高村薫さんの、私たちの社会が残酷な犯罪を内包しながら回っている認識をまず我々が持つことだということばが印象的だった。立場が弱くなっている国民が大勢いて、それが犯罪につながっていて救い出せていない事件が多くあるということを問題提起するには十分な番組だと感じた。よりよい社会を目指すために、起こった犯罪を徹底検証する番組を今後も期待したい。

○　１月１４日(土)のＮＨＫスペシャル「住宅地に潜む“盛土リスク”阪神・淡路大震災　残された課題」を見た。高度経済成長期に全国で国土の開発が行われていた際に谷間を埋め、山の中腹を盛土で平地にして住宅地が造成された歴史を紹介し、盛土は自然の土地に比べ地震などで崩れやすいことを分かりやすく解説していた。どこが盛土の地域か分かっていない土地もあり、自分の家が建っている場所が盛土かどうか調べるにも、その調査には多額の費用がかかることなど、さまざまな点を丁寧に取材し、ＣＧなどを使って視覚的に工夫して描いていた。阪神・淡路大震災から２８年目にふさわしい力作だった。

○　１２月２２日(木)のＳＯＮＧＳスペシャル「安全地帯＆玉置浩二～ふるさとのメロディー～」（総合 後10:00～10:59）を見た。活動の変遷も交えて紹介しており、リアルタイムでは安全地帯の曲を聴いていない人にも見やすいと感じた。東京フィルハーモニー交響楽団とのコラボもすばらしく、歌の力を感じた。また、宮城県石巻市で玉置浩二さんが「田園」という曲をギター１本の生歌で歌っていたのも印象的で、被災地に来ていることも知ることができてよかった。アーティストをよく知らない人に興味を持ってもらうことは大変だと思うが、今回の番組で世代的に接点の少なかった玉置浩二さんの魅力を知れて、コンサートにも行ってみたいと思った。アーティストを深く知ることができる、すばらしい番組だった。

○　１２月３０日(金)の映像の世紀　バタフライエフェクト「ロックが壊した冷戦の壁」(総合 後10:00～11:13)を見た。エレキギターからロックが生まれて、それがベルリンの壁の崩壊、社会主義国の革命につながったという、歴史に一つの解釈を与える、秀逸なストーリー展開だった。長尺だったが、事象の点と点のつながりではなく、面的なうねりから時代の潮流へと腹落ちする展開で引きつけており、見応えがあった。

○　１２月３１日(土)の第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦（総合 後7:20～8:55、9:00～11:45）を見た。オープニングが天童よしみさんの演歌だったのには好感が持てた。司会者も一緒に踊ったり歌ったりする姿に、テーマの「ＬＯＶＥ＆ＰＥＡＣＥ－みんなでシェア！－」が伝わってきた。昔の紅白は演歌と若者向けのポップスが半々ぐらいの印象

だったが、演歌も少なくなっていると感じた。韓国系のアーティストやアイドルなど、中高年の世代にとって、なじみがないであろう出演者も多く、若者に寄せ過ぎだという意見もあると思った。毎年見ていて感じるが、全体の演出がすばらしく、長時間の番組であるが楽しく見ることができた。

○　１２月３１日(土)「ゆく年くる年」(総合 後 11:45～0:15)を見た。多くの中継地点がある中で、時間管理を含めた進行がすばらしく、アナウンサーのことばも的確で、番組の随所にプロフェッショナルを感じた。各地域でのクレーンを使っての撮影などでは、綿密に計算されたカメラワークで無駄がなく、特に北海道からの中継は臨場感があふれていた。家に居ながら、各地の年越しの様子をリアルタイムで見ることができ、楽しめた。

○　１月１日(日)の「あたらしいテレビ２０２３」(総合 後 11:05～0:04)を見た。番組の中でテレビ離れを気にしているのは華々しいテレビ時代を知っている世代の人で、若い世代は、テレビでも配信でも、いいものはいいし、おもしろいものはおもしろいと言っていて共感した。配信や動画を見る人が増えて、テレビを見ない人や、おもしろくないという人が出てくるのは当然だ。だからこそ、今をより正確に伝えることができるテレビの存在はまだまだ大きい。逆にテレビだからこそできるドキュメンタリー、綿密な取材による番組を制作してほしい。特にＮＨＫには、多くの人に見せるというよりも、見たい人に真実を届ける番組を多く放送してもらいたいと感じた。

○　１月９日(月)のインタビュー　ここから　「声優山寺宏一」(総合 前 7:30～7:53)を見た。地元の宮城県塩釜市や東北学院大学を訪ね、リラックスして話していたのが印象的で、親近感を覚えた。山寺さんが大学の落語研究会の部室を訪れて、懐かしさに心から浸っている様子がよかった。声優としての出発点が落語研究会だったことは興味深かった。震災で被災した塩釜市へも頻繁に訪問して、アニメのキャラクターの声で子どもたちを元気づけるなどさまざまな活動をしている中で、自分に何ができるのかと常に自問自答している様子は、山寺さんの真面目な性格を映し出していると感じた。

○　１月１０日(火)のクローズアップ現代「沢木耕太郎　自由を広げ、生きる」を楽しみに見た。最新作の「天路の旅人」を、これがノンフィクションとしての最後の作品になってもいいと言い切っていたのが印象的だった。沢木さんは、多くを語るのではなく、端的にさらっと話をしていて、とても興味深く聞くことができた。本で取り上げた西川一三さんの旅については、別の番組も見てみたいと思った。

○　１月１２日(木)のニュースウオッチ９を見た。食品ロスと貧困を同時に減らせる“公共冷蔵庫”という新しい取り組みのニュースが印象的だった。いびつな形の野菜や、箱が潰れただけで流通できない食品など、これまでは廃棄していたものを、貧困に苦しむ方に届けようとするもので、東北でも同様の動きが進んでいるのであれば見てみたいし、多くの人に知ってもらいたいと思った。

○　１月１６日(月)のクローズアップ現代「なぜ相次ぐ“不適切保育”　子どもの居場所どう守る」を見た。保育現場の過酷な労働環境を知ってもらうきっかけにはなるが、夢がある仕事を暗い印象で伝えてしまっているのではないかという意見もある。管轄行政が未然に防ぐためのチェック体制はなかったのか、そもそも人が足りないのはなぜなのかなどの問題提起を行い、考えるきっかけを社会に発信していくことはとても意義の大きいことだと思う。

○　１月１６日(月)の映像の世紀　バタフライエフェクト「危機の中の勇気」を見た。2001 年に山手線の新大久保駅のホームで転落した人を助けようとして亡くなった韓国人留学生のイ・スヒョンさんの話から始まり、アメリカ同時多発テロ事件や東日本大震災などで勇気を出して行動した人たちを紹介していて感動的だった。同時多発テロ事件では、ビルの高層から降りてくる間に１２人の方に声をかけ命を救ったが、自身は命をなくした人を紹介していて印象的だった。しかし、犠牲になって伝えられていくことが勇気なのかという部分には、少し考えさせられた。

○　夜ドラ「ワタシってサバサバしてるから」をつい気になって見てしまう。「主人公を好きになるまであと何日」というカウントダウンに、本当かなと首をかしげながらも、時にクスッと笑えたり、こんなふうに捉えると楽なのかもしれないと思ったりして元気が出て、つい続きが見たくなる。夜ドラというドラマ枠は、さまざまな角度から挑戦を続けている。１５分という時間もちょうど良く、若い世代でも話題になっている。今後も期待している。

○　１月３日(火)の「ＴＡＲＯＭＡＮ 岡本太郎式特撮活劇」(Ｅテレ 前 11:10～12:00)全１０話の放送があり、うれしく見た。岡本太郎の世界観が、あれほど特撮にぴったりなのは、やはり岡本太郎のことばや作品が、あらゆるジャンルを超越しているからなのかなと思った。

○　１月１８日(水)のネコメンタリー　猫も、杓子（しゃくし）も。「福澤徹三とくう」(Ｅテレ後 10:00～10:25)を見て、しみじみとした良さを味わった。癒やしだけではな

く、作家の物事を捉える視点や表現のしかたなどの学びもあると感じた。作家と美しい映像で日常を描くという組合せはＥテレの枠だからこそで、こうした世界観を今後も楽しみにしている。

○　１月１７日(火)の視点・論点「阪神・淡路大震災から２８年」を見た。災害が多発する時代に入る一つの境目として阪神・淡路大震災があることや、神戸市長田区に代表されるにぎわいの復興の難しさなど、２８年たった現在も阪神・淡路大震災を全国区の番組で考える意義をコンパクトに分かりやすく説明していた。１０分だけではもったいないと感じる内容で、長い時間の番組で見てみたいと思った。

全体として１月１７日当日の阪神・淡路大震災の関連番組が少なく感じた。３月１１日も同じで、いわゆる“３月ジャーナリズム”はあまりよくないし、多様な機会に防災を取り上げることは大切だが、時代は若者を中心に動画配信のほうに視聴が移っており、好きなタイミングで好きなものを見られる時代になっている。だからこそ、テレビの特徴・強みは日付であるという考え方もできると思う。日付にこだわった報道、コンテンツを配信していくテレビの特徴は、１月１７日当日も大切にするべきではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

震災報道を特定の時期に偏ったものにしたくないということで、通年で東日本大震災関連の番組を作っているが、全国放送で震災関係を放送するのは、３月に集中せざるを得ない部分がある。この３月も仙台局は１０本近い番組を作る。こういった現状に対するじくじたる思いもありつつ、テレビの強みは日付だということばには新しい気づきをもらった。そのことも大切にしながらやっていきたい。

○　１２月３０日(金)のＢＳ１スペシャル「ＳＡＮＤ　ＩＳ　ＴＨＥ　ＮＥＷ　ＧＯＬＤ　～世界を巻き込む砂の争奪戦～」（ＢＳ１　後 7:00～7:50、8:00～8:49）を見た。砂はありふれた物という感覚だったが、あらゆる分野に砂が使われていて世界中で争奪戦になっていると知り驚いた。長期にわたり取材しており見応えがあった。食料安全保障でも同じ課題があるが、中国の資源戦略に翻弄されている日本の危機感が伝わった。継続的な報道を期待したい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２２年１２月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ仙台放送局（ウェブ開催）において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、「純烈の東北であったまろう旅」についてを含め、放送番組一般について活発に 意見の交換を行った。

その後、放送番組モニター報告、視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長　南條 和恵　（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
武田 靖子　（株式会社ジョイン 専務取締役）
前川 直哉　（福島大学教育推進機構高等教育企画室 准教授）
松沢　卓生（株式会社浄法寺漆産業　代表取締役）
宮川　宏　（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜「純烈の東北であったまろう旅」（総合　１２月２日(金)放送）について＞

（ＮＨＫ側）

この番組は、今年の秋に東北６県のＮＨＫでスタートした東北温泉地応援プロジェクトの一環として制作した。プロジェクトは、番組制作者だけではなくイベント担当、営業担当などが参加し、コロナ禍や自然災害もある中で観光業の人たちを応援し、東北を旅したいという人が増えるための一助になりたいと取り組んでいる。プロジェクトのテーマソングを歌っているスーパー銭湯アイドルの純烈に東北の温泉地を旅してもらい、現状を伝えるとともに、現地の魅力を再発見して足を運びたくなる楽しい紀行番組を目指した。今年３月に最大震度６強の地震が宮城県と福島県を襲ったこともあり、今回の舞台は被害の

大きかった宮城・秋保と福島・松川浦を選んだ。東北の豊かな自然、食材を楽しみ、温泉地や観光業に携わる方が大切にしているものや地元の方々が大好きなものを、明るいトーンで発信できればと考えた。今後、東北各地を巡るシリーズ展開を考えている。

○　気分が明るくなり、次の旅の候補地にしようかと思わせてくれる番組だった。脱サラして宮城県の秋保でワイナリーを始めた方など、地域で暮らし頑張る方々を丁寧に紹介していて、より興味が湧いた。福島県の松川浦でも、若い方々の、自分たちも楽しみながら訪れた人に喜んでもらおうという前向きな姿が印象的で、純烈が実際に体験して楽しむ様子にも心が躍った。観光化された温泉地だけでなく、例えば、秋田県ではコロナ禍の休業から地域住民が支え合いながら営業を再開したが、その矢先、エリアが大雨の浸水被害に遭った湯の越温泉など、地域の日常を体験できる旅も注目されているので、こうした場所も紹介していってほしい。東北の魅力を全国に発信していくプロジェクトとして期待している。また、番組で訪ねた温泉地が、地図上で一覧になってホームページに載っているなど、整理されていると参考になると思った。

○　東北の温泉地は、コロナや震災のダメージも大きいので、一体感を持って温泉地応援プロジェクトを進めるのはよいと感じた。紹介していたワイナリーでは、商品が形になるまでの思いや苦労、食との向き合い方を知ることができて応援したくなった。松川浦の被災や風評被害、コロナ禍から立ち上がるのは大変だったと思うが、ガイド体験コンテンツを楽しみながら企画していることが伝わり、家族で行きたいと思った。地元の人の思いに触れ、頑張りを知ることで元気がもらえる番組だった。起用した純烈のキャラクターが存分に生かされていて、小田井涼平さんのおやじギャグや、「最高」「幸せ」といった心からのコメントがとてもよく響いていた。ＹＯＵさんのナレーションはチャーミングで、声のトーンやテンポが全体をさらに温かい雰囲気に仕上げているような感じがして見事だった。

○　東北に 500 以上も温泉地があると知り驚いた。全体的にゆったりとした雰囲気で、穏やかな気持ちで見ることができた。ナレーションのＹＯＵさんの声が聞きやすく、時々突っ込む部分もよかった。海も山もある東北の温泉地の多様さを感じられた。被災を乗り越えてきたということも大切な話だが、今後はもっと別の切り口だったり、有名どころではない地元の温泉についても紹介したりしてほしい。青森でも休業してしまう温泉が増えている印象があるが、そういったものに歯止めがかかるような、実際に温泉地に行ってみよう、利用したいと思わせてくれる番組だった。

○　温泉の魅力を十分に伝え、被災した松川浦を温泉地という形で取り上げていたことはとてもよかった。少し気になったのは、芋煮会で女の子と電話番号を交換するという雑談で盛り上がる場面があったが、女性を恋愛や性愛の対象としてのみ扱うことで、公的社会を独占しようと男性同士のつながりを強める、いわゆるホモソーシャルの構造がかいま見える場面だったと感じた。番組の流れに関係なかったため、なぜこの部分が放送されたのか疑問に思った。視聴者がもやもやを感じないよう女性への差別的な、あるいは異性愛中心主義的な会話となってしまわないよう、編集で工夫することが作り手には求められると感じた。

（ＮＨＫ側）

　雑談や冗談を言っている雰囲気を生かしながら番組を作りたいという思いもあったが、異性愛の表現に関しては試写の時に気になった点ではあったので、より注意深くなるべきだったと改めて思った。見た人がどう受け止めるか、細かな部分にも気を配らなくてはならないと強く感じた。温泉を描く方法はまだ沢山あると考えている。今回はグルメと風景、地震の被災を切り口にしたが、身近な小さな温泉や雪の中でも営業しているところなど、まだまだ魅力があり、さまざまな東北の顔を描いていく一つの場として大切にしていきたいと思った。地図などについては、デジタルをはじめ、放送以外のチャンネルも使って発信していきたい。

○　湯船につかりキャンペーンソングを歌うミニ番組を何度も見ているので温泉の場面が少ないと感じたが、代わりに、コロナ禍や自然災害から立ち直ろうとする方々の熱意や奮闘ぶりを知ることができてよかった。青森には集落の人たちが管理する温泉があったり、秋田の玉川温泉にはがんの方が湯治に行ったりするなど、東北には生活に身近で関わりが深い温泉が多いので、そういった恵まれた題材を生かしてほしい。また、秋保については、理想的な地産地消の形に向かいつつあり、温泉地としてこれからも発展していく可能性を感じた。今後も、ありきたりなグルメなどだけではなく、地域で暮らし、営みを続けている方々を取り上げてほしい。ＮＨＫらしさ、このプロジェクトらしさを生かした今後の番組に期待している。

○　イルカさん作曲の「とうほくであったまろう」の歌が覚えやすく耳になじむ感じで刷り込まれていて、プロジェクトのシンボルになっている。ダンスの振りつけもあまり難しくなく、立った状態と座った状態の２種類があり、配慮がなされていると感じ

た。秋保と松川浦のそれぞれの魅力が伝わり、食材もワイン、牛肉、ナメタガレイや浜焼きなどすべておいしそうで、行ってみたいと感じた。地域によっては、今年の地震の被害は東日本大震災よりも大きく、そのことは、意外と東北でも知らない方が多いと思うので、純烈のメンバーの方が触れていたのはよかった。サンドウィッチマンの「サンドのお風呂いただきます」とコンセプトが少し似ている部分もあると感じ、純烈ならではの独自性や東北との関わりがもっと出てくるとよいと思った。

○　秋保と松川浦を交互に紹介していくスタイルだったが、唐突に場所が入れ替わって、どちらのことを紹介しているのか分からなくなるところもあった。また、生産者の人が話しているのにナレーションが入ってしまう場面もあったが、もっと生産者の方の思いや話を聞きたかった。松川浦で「とうほくであったまろう」を披露していて、耳に残るメロディーだと感じたが、歌詞が各地の方言だった部分は意味が分からず、伝わりづらい部分もあった。純烈の歌っているときの視線がお客さんとは違う方向を見ていると感じる時もあり、少し気になった。今後も、純烈とともに東北６県の魅力を広めていってほしい。

○　スーパー銭湯アイドルの純烈はこの東北温泉地応援プロジェクトに最適な人選だと感じた。ＹＯＵさんのナレーションも合っていて、見ていて自然と笑顔になるよい番組だった。東北ならではのおいしい食材について伝えていたこともよく、今後も米、野菜、風評被害に遭っている魚のおいしさなどをさらにアピールしてもらいたい。思わず口ずさんで、踊りたくなってしまうテーマソングも魅力にあふれていた。このプロジェクトで純烈に東北各地の魅力を全国に伝えてほしい。また、東北の人にも意外と知られていない穴場や離島も紹介してもらえるとうれしい。全国旅行支援事業も盛り上がっているので、この機に東北に多くの人が来てもらえるようになればよいと思った。

○　今年の地震は、秋保と福島の新地も含めた松川浦あたりの被害が大きく、だからこそこの２か所を取り上げたのではないかと思った。番組全体が明るく柔らかいトーンに仕立て上げられていたのは、純烈とナレーションのＹＯＵさんのおかげで、とても温泉の雰囲気に合っていたと思う。純烈が歌っていたときの視線は、歌詞のカンペを見ているのかなと思ったが、こうした舞台裏も含めて楽しく見た。

○　仙台の山間の温泉地と、福島県の海辺の温泉地で違った魅力があり、お客様の楽しませ方もそれぞれだと感じた。近くに住んでいながら初耳の話もあり、こうした情報発信が足を運ばせるきっかけになると思った。テンポよく温泉地の魅力や文化、美しい景色、食や酒を伝えつつ、東日本大震災や福島県沖の地震、風評被害の影響なども

描き、苦悩する観光地を応援したい意図がよく分かった。純烈が温泉地を心底楽しんでいる姿は地元の人間としてうれしく、ライブ企画は温泉地にとってありがたいエールになったと思う。地元の人たちの温泉地の復興にかける熱意もよく伝わってきた。東北だけではなく全国への発信も期待したい。テーマソングも端的に各地の魅力を表していて、こうしたコンテンツの活かし方を地域の人間と考えていくことが、次につながっていくと思う。

（ＮＨＫ側）

今後の旅では、人との関わりの部分をもっと大切にしていきたい。おいしいものを食べる時も、作った人の話を聞きながら食べるとよりおいしく感じるし、この人が育ってきた風景なのだと思うとより景色はすてきに見える。純烈がプライベートでも大事にしている一人一人との会話や付き合いを、番組でも丁寧に描いていきたい。メンバーはカメラが回っていない時も被害の話や食べ物の話を聞いたり、松川浦のライブの日は前乗りして電動自転車を借りて海沿いを回ったりするなど、番組に映らないところでも現地や地元の人びとと真摯に向き合っていた。これからも、地域のさまざまな人たちとつながることを旅のテーマとして、番組を通じ、地域の方と深いつながりを育てていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２５日(金)の東北ココから「豊かな食の裏側で～危機に弱い日本の食卓～」と２７日(日)のＮＨＫスペシャル 混迷の世紀「第４回 世界フードショック ～揺らぐ『食』の秩序～」を見た。「東北ココから」ではゲストの福島大学・小山良太教授が、消費者と生産者が価格を維持する仕組みが東北でも実現可能と言っていたが、具体的なことが知りたかった。「ＮＨＫスペシャル」は、食料安全保障という観点から日本の厳しい状況を描き、“飽食”などと言っている場合ではなく、命を守るために食料を確保しなければいけないというショッキングな内容で見応えがあった。命のための経済を選択し、農業をもっと魅力のある産業として育てないと農業自体を失ってしまうという指摘が印象的で、もっと食について考えなければいけないと強く感じた。

○　１１月２５日(金)の東北ココからを見た。エネルギーや食料を輸入に頼っている日本の厳しい現状を、東北の畜産業、農業の姿を通じて描き見応えがあった。農地を集

約化するなどして安定した利益をあげていると思っていた大型の農業法人でも事態は深刻で、今後への不安を感じた。生産現場、卸業者、小売業者、それぞれの事情でなかなか価格を消費者へ転嫁できない現状がよく分かった。店舗での収録はユニークでよかったが、周囲の音が混じっていて、少し気になった。１１月２７日(日)のＮＨＫスペシャルでも食料安全保障というスケールアップした視点で世界的なフードショックの深刻さを知れた。東北という小さなエリアの現実と、グローバルな争い、地政学的な観点がワンセットで見られてよかった。

○　１１月２５日(金)の東北ココからと１１月２７日(日)のＮＨＫスペシャルを見た。ウクライナ問題からのエネルギー不足で１次産業も大きな被害を受けていることがよく伝わった。畜産が大変な現状を、電気、肥料、人件費に分けたグラフで説明していたのが見やすかった。利益の見せ方も具体的で分かりやすく、利益がすぐ無くなってしまう産業的な構造も理解できた。食料自給率が高いにも関わらず農業自体が壊れかかっているのは、東北だけではなく日本の問題だということを、もう少し強調して伝えてもらうと、より危機感が伝わったのではないかと思った。

○　１２月２日(金)の東北ココから「限界集落住んでみた　山形編」を見た。市原ディレクターは、人づきあいが苦手ということで頼りない感じがあり、はらはらしながら見た。神社や排水口の掃除をする作戦が奇跡を呼び、出会いや物事が動いていく様子が興味深かった。神社でお参りをするおばあちゃんのたたずまいに感動して突然涙するディレクターには驚いたが、地域で大事にされている神社の存在とおばあちゃんの家族を思い祈る背中には感じるものがあり、共感できた場面だった。ドローンで撮影した集落を住民のみなさんが見て、きらきらした表情で、よいところだなと拍手喝さいする場面は印象的だった。

○　１２月２日の東北ココからを見た。「限界集落住んでみた」は毎回楽しみに見ているが、シリーズで一番感動した。荒木さんのお祈りする姿はとてもすてきだと感じたし、町内会長さんの集落への愛情があふれ本気でこの集落のことを考えて行動している姿に心を打たれた。ディレクターの市原さんの心の変化が印象的で、作りこまれていない住民の方々との関係性がリアルに感じられた。登山中に「年齢って何なんだ」と、つい言ってしまうなど、市原さんが感じた気持ちを素直に話すのがリアルでよかった。

○　１２月２日(金)の東北ココからを見た。昔は１３軒の宿坊があったということで、当時の、集落に人が多かった時代の動画や写真が残っていたら、おもしろい対比になると感じ、見てみたいと思った。ラスト近くのＢＧＭで笹川美和さんの「笑」という

不思議な節回しの歌が、番組に合っていてよい選曲だと感じた。

○　１２月９日(金)の東北ココから「ともに働き、ともに暮らす～地域支える外国人～」を見た。技能実習生がいないと現在の日本は働き手が足りず、獲得にも競争がある状況がよく分かり、ついに外国の方と共生する時代が来たと感じた。雇う側の日本人が外国人労働者を理解し、彼らにとって大切な文化を受け入れることが共生には不可欠だ。石巻でイスラム教徒のモスクをつくった取り組みはすばらしく、全国放送し、多くの人に見てほしいと思った。モスクやイスラム教徒は、よく知らなければ怖いイメージをもたれることもあるが、外国人やその文化を正しく理解するためにも、知識を広めていくことが大事だと感じた。

○　１２月９日(金)の東北ココからを見た。インドネシアの西ジャワ州とＮＰＯ法人石巻漁業実習協議会で協定を結ぶことで借金を抱えずに実習生が来日できたり、日本語教育もＮＰＯ法人が担っているなど、構造的な問題を上手にクリアしていると感じた。ＮＰＯ法人の専従の女性職員３人が、通院や銀行などのサポートをする姿も印象的だった。外国人技能実習生というと、人権侵害や労働搾取などが問題となっているが、こうした取り組みは先進的で参考になると感じた。外国人技能実習生などの制度を見直す有識者会議が始まったというニュースもあり、よいタイミングでの放送だったと感じた。

○　１２月９日(金)きんよる秋田「生駒ちゃんが突撃！バースデーアーカイブス　スペシャル」を見た。秋田出身で俳優の生駒里奈さんが投稿者のもとをサプライズで訪れる企画で、喜びあり、涙ありで、秋田放送局開局９０周年のラストにふさわしい心温まる番組だった。過去の写真や映像を見ながら振り返る部分が印象的で、当時の町の様子などが分かり興味深かった。今後も地域の映像をアーカイブスに残し、さまざまな企画で活用し視聴者に伝えてほしい。

○　１２月９日(金)のいわチャン「希望郷の廃棄物　誰が処理するのか」を見た。現在、旧岩手県立軽米病院の医療系の廃棄物問題で軽米町と岩手県の行政同士の裁判があり、それがきっかけになってかつての大規模な不法投棄事件に目を向けたのではと思った。当時の映像や写真も使われており、過去の取材が今回の番組につながっていると感じた。ナレーションに人気声優の桑島法子さんを起用したことも、事件を知らない若い人たちに見てもらうという意味でよかった。この事件は、首都圏の問題が地方に押し付けられる構図で、原発の問題などと似ている部分もある。岩手だけではなく東北でも広く知ってほしいと思った。

○　１２月１４日(水)のロコだけが知っている「サンドも知らない東北ＳＰ！ディープな情報を徹底リサーチ」を見た。冒頭で横手の銀線細工の紹介があり、さまざまな知らないものを見ることができるのではないかという期待を高めるスタートだった。「みちたん」とのコラボもおもしろく、番組を通してディープな情報が多くてひきつけられた。引き続きこうした情報を届けてほしい。東北の魅力が伝わるよい番組だった。

○　１２月１４日(水)の夜ドラ「作りたい女と食べたい女」を見た。初回から通して楽しませてもらったが、女性同士の恋愛を真正面から取り上げていて、社会的にも意義が大きいと感じた。主人公の感情を、カメラ割りや音楽などで工夫して表現し、細部も含め漫画である原作を大切にして実写化しており、すばらしい作品だと思った。性的マイノリティーの中でも、不可視化されやすく、見えてきづらいのがレズビアン、女性同性愛者だと言われている。こうした意味でも、この作品の続編や、女性同士の恋愛をテーマとするドラマを今後も多く作ってほしい。

○　１１月２４日(木)のクラシックＴＶ 選 「ＹｏｕＴｕｂｅと音楽～ピアノ蔵出しスペシャル!～」を見た。クラシックの番組はふだんあまり見ないが、好きなユーチューバーがクラシックを語ったり演奏したりしていたので、興味が湧いた。ストリートピアノ系のユーチューバーなど番組に人気のある方が集い、学んできたルーツとなる部分も知れ、クラシックのよさを改めて感じた。５人のユーチューバーが出ていたが３０分では短く、もっと一人一人の演奏と話をゆっくり聴きたかった。

○　１２月６日(火)のハートネットＴＶ「私たちはケアリーバー～施設や里親のもとを離れて～」を見て、日本で毎年 4,000 人のケアリーバーという児童養護施設や里親などのもとを離れた人たちがいるといった事実を知り驚いた。頼れる存在が周りに少ない中でどうつながりを見いだしていくのか、支援活動をする山本昌子さんの挑戦の尊さを感じた。また、当事者の家族への複雑な思いや葛藤がとてもよく伝わってきた。今後も継続して伝え続けてほしい。

○　１１月３０日（水）の時論公論「激化するＬＮＧ争奪戦　崩壊した天然ガスの安定供給」を見た。危機の背景と見通し、無資源国日本への影響、国際社会の危機などについて、わずか１０分だが分かりやすく解説されていた。資源ひっ迫の長期化による争奪戦と途上国の買い負けや政情不安リスクを指摘し、南北問題が深刻な課題として浮かび上がっていたのは印象的だった。安く市場から燃料を買える時代は終わり、エネルギー安全保障と国際協力の必要性を訴えていたことは適切だと思った。

○　１２月９日（金）の東北ココからを見た。外国人労働者と共生する石巻市の実態を丁寧に描き課題がよく分かった。印象的だったのは、危機感を持ったＮＰＯ法人石巻漁業実習協議会が人を呼び込み引き留める独自の仕組みを作ったこと。これからは国頼みではなく、地域や企業が自らの才覚で人を惹きつけていかねばならない。番組は、現地と深くつながること、労働者ではなく仲間としてみること、自分の物差しで考えないことなど、実例をもとにさまざまな示唆を投げかけていた。どう共に生きるのかを丁寧にデザインすることは東北全体の共通の課題だと感じ、今後も継続的な取材を期待したい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２２年１１月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１７日(木)、ＮＨＫ仙台放送局（ウェブ開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、東北ココから「復興データマップ～被災地の“いま”と“これから”～」を含め、放送番組一般について活発に 意見の交換を行った。

その後、放送番組モニター報告、視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出 席 委 員）

委 員 長　　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長　　南條 和恵　（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
武田 靖子　（株式会社ジョイン 専務取締役）
前川 直哉　（福島大学教育推進機構高等教育企画室 准教授）
松沢　卓生（株式会社浄法寺漆産業　代表取締役）
宮川　宏　（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜東北ココから「復興データマップ～被災地の“いま”と“これから”～」
（総合 １０月２１日(金)放送）について＞

（ＮＨＫ側）

５年に一度発表される国勢調査のデータを使い被災地の現在の姿を見つめられないかと企画した。住まいを転々とする時期が終わり、ほとんどの人々が定住先を決めたと言われているが、実際はどうなのか、戻ってきた人たちの年齢構成はどうなっているのかなどを、可視化し検証を進めた。国勢調査のデータについては膨大な量が順次公開されている段階なので、さらに

データ分析を進め、全国放送を目指して取材を深めていきたいと考えている。

○　冒頭の雄勝地区の小中学校の運動会が印象的で、子どもの数が８分の１に減っているということや、水産業を含む産業人口の著しい減少は深刻に感じた。仕出し屋さんの、愛着があるが地元から離れないと生きていけないというジレンマがとても重く、被災地でよくある課題だと感じた。また、山元町が子育て支援を強化して人口増に成功した例では、同じ市町村内の人口の変化よりも、隣の町や県外など他地域への流出が大きな課題で、行政区分、市町村レベルで単純に比較せず、広域的に見て、奪い合いになっていないかを考える必要があると感じた。一方で、女川町の起業家を育てる取り組みについて、起業場所が女川でなくてもよいとのことで、地元に残ってほしいと考える自治体が多い中でこういった仕組みは画期的ですばらしいと思った。また、専門家の課題先進地をヒントにするという話は、対策に着手したばかりの段階ではまだヒントにならないと感じ、もう少し専門的な視点での話が聞きたかった。

○　新井隆太アナウンサーの声や説明がとても聞きやすく、ゲストの東北学院大学・柳井教授の話も理解しやすかった。冒頭で、ネガティブな面だけではなく、よい部分も紹介するとコメントがあり、番組を見進めたい気持ちになった。ポジティブな事例として、山元町が子育て世代をターゲットに絞り人口増加に転じたと紹介があったが、仙台に近くて通勤圏内というメリットも大きく、施策を講じたからうまくいったとシンプルに捉えるのは難しいと思った。柳井教授の人口減少ノットイコール地域の衰退というのは重要な視点だが、人口減少地域でのポジティブな事例が紹介されなかったため、もっと知りたかった。さらに、データの活用では、国勢調査だけではなく、民間企業が持つデジタル上のデータを活用できると、よりきめ細やかに検証することができ、違った仮説や課題が出てくるのではと感じた。

○　子どもが８分の１になるというのはどういうことかを運動会の映像で直感的に感じてもらうなど、味気ない数値データを分かりやすく見せる工夫があった。ただ、ポジティブな事例として山元町、女川町が紹介されたあたりより、番組がデータの話からずれていった印象を受け、もう少し数値や量的データにこだわってもよかったと感じた。また、今回の大きなテーマの少子化・人口減少を考えるときに、女性の都市集中というジェンダーの問題が大きな課題となる視点もあるのではないか。国勢調査は人口だけではなく、性比や年齢比も分かるため、それらを活用することでもっと掘り下げられると思った。

○　震災前と震災後でどのように人の流れが変わったのか知ることができた。雄勝町の

例で住む人が減ると商売を続けることが難しくなるというのは想像できたが、石巻の中心市街地が震災前から人口が減少傾向にあったというのは意外だった。駅が近く便利だと思っていても、新市街地に新しい建物が建ち、利便性が向上すると、そちらに人が集中する一方で、中心市街地には徒歩圏内でしか移動できないお年寄りが多く残されてしまうと感じた。山元町と女川町の事例は、やり方次第で人は移住してくれるという、参考になるケースだと思った。若い人に定住してもらうと、子どもも増え、地域も活性化していくことにつながるが、人口減少している地域にとって、今後どのように人を増やしていくかという問題はなかなか解決できるものではないと感じた。

（ＮＨＫ側）

　データは無機質で、冷たい印象があるが、その先にひとりひとりの暮らしやなりわいがあることや地域の息づかいを表現したいと、漁師の方や運動会などを取り上げた。山元町も女川町も恐らく複合的な要因で人口の増加に結びついていると思うので、引き続きさまざまな視点から検証していきたい。提示のあったジェンダーの視点などでも、今後詳しいデータが公開されたら、重層的に見ていく。また、国勢調査だけではなく、データをマッピングしていく方法などにも視野を広げて取材を深めていきたい。

○　復興や開発計画について、立ち直るとか、街づくりというのは、本当に一筋縄ではいかない難しいことなのだということや、計画通りに進んだとしても、思い通りの結果が出るかどうかは分からないということを改めて認識した。運動会の映像からは、子どもがいなくなり未来が途絶えてしまうことに強く危機感を抱いた。また、産業の衰退から生活者がいなくなり、飲食店が成り立たない連鎖も深刻だと思った。地域に残った人の暮らしの豊かさを守らなければ、というコメントでは、豊かさとは何なのか考えさせられた。持続可能な地域づくりは、移住者の取り合いという状況も見え隠れすると感じているので、魅力的なビジョンや政策を意思を持って続けるということについて、具体的な事例をもっと知りたかった。

○　震災による人口減少が急速に加速した地域と、人口増を記録した地域との対比は、政策の方向性のヒントを投げかけるという意味でも大変効果的だったのではないかと思う。各地域では背景が違うので単純比較することはできないが、その違いを掘り下げていくことで次の課題が見えてきて、データを活用した検証は有効だと感じた。方向性を決めたら迅速に動くことと、連携する市民の担い手を作りながら活動を広げていくことが達成の鍵になると思った。また、人口の多い少ないではなくて、いかに

活気があって住みやすいかということが重要で、地域の適正人口を見定めてまちづくりをするという提言は適切だと感じたし、人口減少イコール地域の衰退ではないというコメントも腑に落ちた。今後も、データを分析し次の番組につなげてほしい。

○　被災地は日本の抱える課題を先取りしていると言われる。オープンデータを分析し課題を提供する手法は、ほかの被災地や、過疎化が進む地域にも広げることが可能で有意義だと感じた。例えば、雄勝では高台に移転する合意形成に時間がかかり、石巻の中心部では、土地の権利の集約の合意を得るのに時間がかかった。こうしたことは、今後、地震などの被害が想定される地域、自治体にとっては参考になり、教訓をヒントにすることができる。また、人口減少イコール地域衰退ではないという提示には、これからは身の丈に合った地域づくりが必要だと感じた。

○　国勢調査の結果が地図に落とし込まれて、年代、職業別の変遷を可視化し、地域の特徴を推察できる復興データマップは状況の把握に役立つと感じた。一方で人口の量的な部分だけではなく、ひとりひとりのストーリーとして質的に描くことも重要だと考えており、番組では、そういった観点も意識されていたと感じた。人口減少・少子高齢化ワースト１の秋田でも人口は大切な指標だが、過度に重要視せず、地域らしくあるために質や価値を守ることや、暮らしのあり方、外との交流についてなどの視点も大事にしている。復興支援はもとより、地域課題をどう未来につなげていくかのヒントとして、人口減と地方衰退をイコールで捉えない適正人口などの見方が描かれておりよかった。また、女川の移住を必須条件としない創業支援は、無理に移住・定住を促すのではなくて、異質なものの流入を大事にし、そこから湧き上がる機運の醸成として人流を生み出す取り組みになっており印象的だった。今後も復興のリアルな状況や、そこから学べることを伝え続けてほしい。

○　データを数値化し、マップにしたり、話題ごとに色分けしたりする工夫があり見やすかった。雄勝地区の運動会の映像はとても寂しく、長く感じたので、代わりに移住を決意した小学生の子を持つ親のインタビューがあれば、より問題点が浮き彫りになるのではと思った。また、石巻地区の事例を行政がどう捉えているのかや、女川で起業して数年たった人たちの現状などについても知りたかった。人口が増えている山元町では、子育てにスポットを当て、女性をターゲットにすることで周囲の人間も巻き込むことができていると感じたが、補助金や、企業誘致の有無についてはどうなっているのか、こうした現状を、行政がどう検証し次に動こうとしているのかも描いてほしかった。

○　世界人口が８０億人を超えた中で、番組の人口増と人口減をどう捉えればよいのか

考えながら見た。人口減と地域不活性が必ずしもイコールではないという考え方には、少し疑問を持った。番組で紹介された雄勝の例では宿泊・飲食サービスに従事する人が３５人から２人、運輸・郵便においては６１人から９人と、産業がほとんど崩壊している中で、ここから何かをしようと思ったときにどれだけのエネルギーが必要なのかということを考えると、気が遠くなってしまい、思いだけでは難しいのではないかと感じた。また、女川町で若い方々が増えていることは、行政だけでなく民間の力も巻き込んだことがよかったのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

人口減少イコール地域の衰退ではないという視点は大事だと思っていて、守っていくべき暮らしの豊かさとは心の豊かさだとも感じ、それをどう可視化していくのか可能性を探っていきたい。今後、被災地の状況を描いていく際には、その先にある地域のことも考え、再生のヒントを探ることを忘れないようにしたい。今回分析した地域も、復興期間１０年が延長されて、５年間で１兆円超が投じられていくことになっており、その事業費の用途にもつながると思う。また、災害列島ということで事前復興の必要性が叫ばれる中で、そこにどう生かしていくのか、この先の日本につながるヒントという部分を意識して、今後も取材とデータ分析を深めていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２８日(金)のいわチャン「県民会議ＳＰ　＃ＢｅｙｏｎｄＧｅｎｄｅｒいわて」(総合 後 7:30～8:15)を見た。タレントの金子貴俊さんの進行がとてもスムーズで、県民の方々とのやりとりも和気あいあいとしており、とてもよい人選だと思った。アンケートでは、ジェンダーギャップを感じているかとの問いに対し、３６％の女性があまり感じていないと答えており、想像していた数字より低かったので驚いた。また、この結果が岩手ならではのものなのか、地域性があるのか気になった。ＳＮＳと連動し投稿された意見をすぐに紹介できる仕組みが効果的で、違いを認めることが大事であるとか、興味も関心もない世代が一番怖いなどの意見が印象的だった。全体を通して見応えがあり続編も期待している。

○　１０月２８日(金)の東北スゴすぎ！超絶景ハンター「マグロ　謎の大集結を追え！」(総合 後 7:30～8:15)をワクワクしながら見た。若手のディレクターが出演しており、

撮影の仕方や苦労など、制作の舞台裏が見ることができて新鮮だった。ディレクターの笑顔がすてきで、見ている側も笑顔になり、クロマグロの撮影にぜひリベンジしてもらいたいと思った。山形局と秋田局の合同制作で、局をまたいだ企画というのはおもしろいと感じ、青森だと、日本海側は秋田、太平洋側は岩手と文化圏が近いこともあるので、同じような取り組みができたらよいと感じた。縄文遺跡などもぜひ取り上げてほしい。

○　１０月２８日(金)の東北スゴすぎ！超絶景ハンターを見た。冒頭で流れたクロマグロの過去の映像が実に圧巻で引き込まれた。産卵行動を撮影せよというミッションの難易度が高く、達成できない中でも最後まで楽しく見ることができたのは、若手ディレクターが取材を通して成長していく姿を丁寧に見せることに成功したからだと思った。特に魚好きな秋田局の藤崎さんのキャラクターが非常にユニークで、ポジティブな姿勢に共感を抱け、もう１人の山形局のディレクターとの掛け合いも見ていて心地よかった。自然番組の貴重な映像は、地道な努力と自然に対して真摯に向き合った末に生まれるということがよく分かった。

○　１０月２８日(金)の東北スゴすぎ！超絶景ハンターを小学生の子どもと一緒に見た。若手ディレクターがミッションに挑戦する姿は応援したくなるし、さかなクンが魚の生態系を教えており、こういった内容だと、見ている人が東北の海に関心を抱くとともに、学ぶきっかけになると感じた。小学生くらいの年齢であれば、この番組自体が楽しみながら関心を持つ教材にもなり得るので、こういった番組がもっと広く届くきっかけや方法があればよいと思った。

○　１１月４日(金)のみちたん～ああ！すばらしきセカイ～「もう秋かぁ４４回目」(総合 後 7:30～7:57)を家族で話しながら楽しく見た。何とも不思議な緩い感じで、でも、とことん探求するとおもしろい知られざる情報に行き着く旅だった。福島県平田村のハバネロは、“かわいいから”作ったという話が興味深かった。村長自身が日本一の辛い村を目指して商品開発しているということも含め、町の皆さんが失敗を楽しみつつ、盛り上がっている様子がかいま見えてよかった。また、謎過ぎる公園では、開発した佐藤さんの人生において最上位は縁と感謝だということが伝わってきて、こうした人間性まで感じさせてしまう番組のギャップがすごいと感じた。多様な人の生き方や、流行などの一方的な情報に流されず、ハバネロに可能性を感じたり、おもしろがったりすることはとても大事だと思う。わくわくセンサーが高いことが、地方で幸せに生きるためにも大切で、探求を楽しいと思えると、人は幸せになれるのではないかと感じた。

○　１１月５日(土)の大好き♡ 東北　定禅寺しゃべり亭～塩沼亮潤さん～を見た。公開生放送は難しい部分もあると思うが、引きつけられる作りになっていた。映像のバリエーションも豊富で、住職の塩沼さんのさまざまな面を知ることができてよかった。

○　１１月１１日(金)の東北ココから「こんなとき何聴く？宮城スペシャル」を見た。仙台局２年目の若いディレクターがインタビューをしていて、少し素人っぽくも感じ、引き込まれた。勝負するときに聴く曲は何ですかと、ヒーローになりたいときに聴く曲は何ですかのテーマが似ていたので、違うものも聞いてみたいと思った。ゲストの狩野英孝さん推薦の曲を聴いていると、苦労している部分もあるのかなと人柄を少し感じられた。しずるのＫＡＺＭＡさんは初めて見たが、おもしろく番組を盛り上げてくれていてよかった。ＮＨＫにはさまざまな番組があるが、こうしてリラックスして気楽に見られる番組も必要だと思った。

○　１１月１１日(金) ＣＹＣＬＥ　ＡＲＯＵＮＤ　ＪＡＰＡＮ「Ｉｎ　福島」(総合 後7:30～7:57)を見た。福島の美しい風景と行く先々で出会う人たちの物語を上手につないでいて見やすい番組だった。次の場所に行く際の場面転換で、オーストラリア出身のザック・レイノルズさんが、自転車で福島の離島や海沿いをさっそうと走っていたのもとてもよかった。中でも、湯野上温泉の駅を守る３人の女性たちの話が心にしみて、互いへの強い信頼関係に心の豊かさを感じた。こうした旅番組で、現在の福島や、復興の様子を世界へ発信することはすばらしいし、日本全国でも広く見てほしいと思った。

○　１１月１１日(金)の発見！あおもり深世界 「出張！ナノコエ～あなたの小さな疑問に答えます～　＃０６」(総合 後7:30～8:13)を見た。冒頭、大きな耳のオブジェが弘南鉄道から出てきた演出がおもしろかった。田舎館村にある弥生時代の遺跡については、県内でも知らない人が多いのではないかと思った。また、三沢市の米軍の方による「地球市民」という表現が印象的で、地元の方と米軍の方とが共に支え合う様子が見えてとてもよかった。町によって雰囲気が違い興味深い一方で、番組のテーマに一貫性がなく、何を伝えたいのか少し分かりにくかった。新企画の工業高校未来プロジェクトでは工業高校存続の危機に向き合う放送部の生徒たちを取材していたが、本来は大人が向き合うべき課題だと違和感もあった。

○　１０月２３日(日)の ＮＨＫスペシャル 新・幕末史　グローバル・ヒストリー「第２集　戊辰戦争　狙われた日本」を見たが、知らなかった事実も含めて目からうろこだった。日本には戊辰戦争の資料がほとんど残っておらず、諸外国の機密資料をつなぎ合わせることでその全体像を明らかにし、日本の内戦、いわゆる東北諸藩と新政府

との戦いに乗じた列強の覇権争いという舞台裏を解き明かした力作だった。現代でも米中の対立など、各国が国益を追求し合う微妙なパワーバランスで国際社会が成り立っており、歴史を学ぶことの大切さを改めて感じた温故知新の企画だった。

○　１１月１３日(日)のＮＨＫスペシャル 超・進化論（２）「愛（いと）しき昆虫たち～最強の適応力～」は、堺雅人さん、西田敏行さんたちのコミカルなトークで子どもから大人まで楽しめた。さなぎの内部の詳細なＣＴスキャンや、ふだん見ることができないアリの生態系など、すばらしい映像の数々だった。シロアリは日本では厄介者とされているが、自然を回復させる力を生態系に与えているなど、人間の生活が豊かなのは昆虫の力も大きいのではと感じた。日本で飼育される昆虫は、東南アジアや南米から輸入されていて、虫の乱獲につながるという意見もある。一方、一大輸出国のインドネシアなどでは、日本が虫を買わなくなるとなりわいがなくなり、森を切り開き、木を売り金に換えてしまう動きもでてくるという。日本人が虫を買うことで、森や現地の人の収入を守ることができている現実もあるので、こうしたことも取り上げてほしい。

○　１０月２６日(水)の歴史探偵「東京“遷都”大作戦」を見た。１０月２３日のＮＨＫスペシャル　新・幕末史　グローバル・ヒストリー「第２集　戊辰戦争　狙われた日本」と放送日が近く、一連で番組を見ていくと、歴史の流れを、つながりをもって理解することができた。新政府が日本を欧州型の先進国家にしようと、改革を一気に進めるために天皇を京都から東京へ移そうとした話を、当時の残された品や記録を丹念に拾い上げ、視覚的に分かりやすく伝えていた。奇跡と言われる明治維新を実現した日本人の知恵を感じた。東北の放送局でも、奥羽越列藩同盟など、戊辰戦争の中で埋もれてしまった地域の歴史を取り上げてほしい。

○　１１月３日(木) 事件の涙「“原発の看板”を背負い続けて～福島第一原発事故から１１年～」(総合 後 6:05～6:35)を久しぶりに見た。福島の双葉町の標語を考えた方の物語を興味深く見た。見応えがある番組なのでシリーズ化してほしいと思った。

○　１０月１６日(日)の１００カメの作り方(総合 後 5:55～6:00)を見て、100 台のカメラを仕掛け、収録された約 1,800 時間の映像を１か月かけ、手分けして確認するなど、想像を越える大変な作業の裏側に驚いた。１１月１日(火)の１００カメ「メタバース」も興味深い題材で、仮想空間を知るべく、リアルの状態とＶＲの映像の中身を交互に見せるという演出は新しい番組体験だった。メタバースの世界が生きがいだという人に加え、そこで出会って結婚する人や、起業する人が出てきているということで、まだ見ぬ世界が広がっていると感じた。１１月８日(火)の１００カメ「青森ねぶた祭」

は、ねぶたの迫力、ねぶた師という仕事、祭りへの熱い思いが伝わってくる構成で、理解や親近感が深まり、久しぶりにねぶたを見に行ってみたい気持ちになった。

○　１１月８日(火)の１００カメ「青森ねぶた祭」は、制作段階からねぶた祭の様子を多くのカメラで追っていて、この番組ならではの観点でねぶたを楽しむことができた。小屋に設置した定点カメラの映像が非常におもしろく、将来ねぶた師になりたいという少年が毎日わくわくしている様子や、町内の皆さんの祭りに対する高揚感など、青森の人にとってのねぶたへの熱い思いが伝わってきた。祭り当日の、ねぶたが観客席ぎりぎりまで迫り、電柱や障害物を巧みに避けて運行する様子は迫力があり、動かす側の視点からの紹介は珍しく見応えがあった。

○　１１月１０日(木)のＳＯＮＧＳ「藤井フミヤ」を見た。出演者を厳選している番組で、中には全盛期を過ぎたと感じる方もいるが、いい味が出ており藤井フミヤさんも６０歳とは思えず、引きつけられた。過去を振り返る時間もよく、司会の大泉洋さんが軽快なノリで切り込んでいくテンポも心地よかった。今後もさまざまな歌手を紹介してほしい。

○　ドキュメント７２時間のスタッフが送る新型ドキュメンタリーという触れ込みに釣られ、１１月１１日(金)のドキュメント７２時間 同時ドキュメント「群馬・ブラジル大統領選挙」を見た。日本で暮らすブラジル人の中では、ボルソナル氏への支持が圧倒的だったが、理由として、異国で模範的な行動を求められ、保守的な考え方が多いからという説明があった。ただ、当事者の日系ブラジル人のことばからは、なぜボルソナル氏なのかというのが伝わってこず、消化不良だった。ドキュメント７２時間は、定点観測という従来のドキュメンタリーになかった切り口が斬新で、そこに集う人たちのさまざまな人生模様が視聴者を引きつけているが、今回の番組は普通のドキュメンタリーの範疇を越えていない感じがあり、目新しさはあまり感じなかった。

○　１１月１５日(火)のクローズアップ現代「スクープ取材・旧統一教会“知られざる被害”の告白」を見た。元信者の２世の方の苦労をずっと番組で追いかけ、旧統一教会で養子縁組が行われていることをスクープしたよい番組だった。地道な取材と元信者との信頼関係が実を結んだ報道だと思った。

○　１０月２１日(金) のバリバラ「わたしの　あふれ」を見て、すばらしい番組だと改めて思った。ゲストのベッキーさんが語りながら泣き出したり、ありのままでいいよと言い合ったりする様子に、多様性を考える機会となるのはもちろんだが、温かい愛にあふれた番組だと感じた。

○　１１月４日(金)のねほりんぱほりん「ある手配師」を見た。今回、手配師の仕事というのを初めて知った。かなりディープな話だったが、聞き手の山里亮太さんとＹＯＵさん、ゲストの方の全員がパペットになっていたので、見やすく聞きやすかった。聞き手２人のトークが軽妙で、危険な話もおもしろい方向に向かい飽きずに聞けた。不正パスポートを作る偽造屋さんがどんな場所にあるのかなど本当に根掘り葉掘り教えてくれたことに驚き、また見たいと思った。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２２年１０月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２０日(木)、ＮＨＫ仙台放送局（ウェブ開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、東北ココから「１２年目の再出発　避難指示解除　双葉町は今」を含め、放送番組一般について活発に 意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告、視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出 席 委 員）

委 員 長　　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長　　南條 和恵　（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
武田 靖子　（株式会社ジョイン 専務取締役）
永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
前川 直哉　（福島大学教育推進機構高等教育企画室 准教授）
松沢　卓生（株式会社浄法寺漆産業　代表取締役）
宮川　宏　（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜東北ココから「１２年目の再出発　避難指示解除　双葉町は今」
(総合　１０月１４日(金)放送)について＞

（ＮＨＫ側）

人口の９５％が住む地域が帰還困難区域に指定され全町避難が唯一続いていた福島県双葉町で、８月３０日、１１年半ぶりに避難指示が解除された。帰還が始まり、今後に向けてスタートを切るタイミングで番組を作りたいと、プロジェクトがスタートした。ほかの地区と比べると、避難指示が長引くほど帰還する方が少なくなる現実が見えてきた。５年で解除した地域の帰還者は３０～４０％だったが、解除までそれ以上の期間を

要した地域では１桁台しか帰還していない自治体もある。双葉町は、7,000 人の元住民を取材した時点では約３０人、復興庁のアンケートでも元住民の６割が戻らないと決めているという厳しい現実がある。住民が解除をどう受け止めているのか。こうした状況でできることを探したいと取材を始めた。まだ、解除されて間もないため、成果を上げている具体的なファクターや数字はないが、はじめの一歩を紹介したいという思いで番組を制作した。

○　住民の方々が避難解除をどれだけ待ちわびていたかを改めて感じた。隣県でも、双葉町という存在は遠く感じてしまうので、率直な気持ちを知ることができてよかった。震災の影響が現在進行形としてある中、帰還の困難さについて、現状を知らせていくことは大事だと思う。また、想像以上に町に戻らない人も多く、双葉町の人が番組をどう見たのか気になった。企業にアイディアのある人たちが集まっていることも紹介されていたが、そういった人たちが、新たな挑戦にどのように取り組んでいるのかなど、もう少し詳しく知りたかった。

○　１１年半の歳月が人や町に与える影響の大きさと、空白期間から再スタートする難しさを痛感した。避難先で家を買った方の語り口が淡々としていて、時の経過や諦めたものの大きさを感じた。避難先を生活拠点にしても双葉とのつながりを持ちたい方が３分の２もいたのは印象的だったが、次世代への継承やどうつないでいくかは、難しい問題だと感じた。一方、先が見えない状況の中で、懸命に前を向こうとしている人たちのたくましさも伝わってきた。震災関連の番組は、被災地以外の方々にも見てもらいたい。報道機関として、現状と課題を継続して伝えていくことが大切だ。

○　双葉町の戻るに戻れない人びとの現実がしっかり描かれていた。１１年半経っても戻りたい人、戻れない人それぞれの思いが伝わってきて、涙が出た。住む人がいなければ、町は寂れていく。企業誘致の取り組みだけでなく、戻りたいと思った人の仕事をサポートすることも大切だと感じた。１１年半経っても原発の風評被害はいまだに根深いという事実は、非常に残念だ。ただ、町に戻れなくても、つながっていたいという人が６割を超えていることに希望を感じた。町長の何とかしたいという思いが強く伝わり、前向きな姿は周りの人の励みになると思う。この先の双葉町がどう変わっていくかは、ほかの地域の人にとっても希望や勇気になる。これからも、ぜひ取材を続けてほしい。

○　避難指示が解除され、ようやく復興へのスタートの地点に立てたと広く伝えること

は大切だ。双葉町の自宅に戻った松浦さんのエピソードで、「故郷での生活を選んだ」とナレーションされていたが、あの事故がなければ、する必要のなかった選択、抱える必要のなかった葛藤、争う必要のなかった対立が福島にはまだ多くある。松浦さんが自宅を見て、「何でこうなったんだべな」と言ったことばには重みを感じた。なぜこうした選択を強いられているのかを問うことも忘れてはいけない。東北の人は福島や双葉を忘れてはいないが、原発の電力を使っている首都圏の人はどうだろうか。ぜひ継続して報じ、全国でも見てもらいたい。

○　帰還した人が３０人という中で、その選択をした方々の前向きな姿や、双葉町に戻らず避難先での暮らしを選んだ人びとの現実がよく描かれていた。ナレーションの「帰る人も帰らない人も、それぞれに双葉町を思いながら生きています」ということばが印象的だった。また、双葉町から離れた土地でふるさとのために何ができるのかという視点で活動を取り上げていたのがよかった。それぞれの場所から応援して町に関わり続ける、町外町民、関係人口といったものを大切にしていくことが重要だと感じた。今後も、福島の復興に向けた歩みを丁寧に取材し、福島発、東北発で全国にむけて発信してほしい。

（ＮＨＫ側）

抜本的な解決策や特筆する進展がない中で、町の人が番組を見てどう感じるのかを意識しながら制作にあたった。よい部分ばかりを取り上げずにバランスをとる難しさを痛感した。町の外からのつながりや、新たな挑戦をする人のパワーが町を変えていくと思うので、今後も継続して取材していきたいし、解決策を放送することで希望も具体化していくと思う。また、なぜこんな選択を強いられたのかという視点は大切だと感じており、目の前の動きだけにとらわれず、根源にある思いも大切に番組制作を続けていきたい。

○　福島は岩手や宮城と比べてまちづくりが遅れており、前例のない状況からどう復興していくかという重いテーマだった。戻れない人も双葉町への思いはとても強く、町外に住む人の意見をどう取り入れていくかや、町長のリーダーシップと役場の柔軟な政策づくりなどが復興の鍵になると思った。企業などへの国や県の支援や補助について、あまり紹介されていなかったのが気になった。また、ダルマ市を復活させようと一生懸命活動している福田さんの姿には頭が下がる思いで、希望が感じられた。世界でも例のない状況での復興の歩みを継続取材して、全国の多くの人に届けてほしい。

○　町とのつながりを持ち続けたいという回答が６割もあるというデータをうまく使っていて、ふるさとを思いつつも事情があり戻れない人の思いが伝わってきた。現在の帰還住民は３０名だが、町長が先頭に立ってコンパクトなまちづくりや、企業誘致に積極的に取り組んでいる姿には感銘を受けた。それぞれの立場から双葉町の今を描いていて、町の現状を紹介した番組であるとともに、人間のドキュメンタリーでもあったと感じた。取り残されている双葉町の震災復興の歩みを伝えることは震災の記憶の風化を防ぐことにもつながる。これからも事実をしっかり伝え、継続して広く発信してほしい。

○　復興というキーワードよりも、新たな町へという　　ことが重要だったと感じた。改めて双葉町が歩んできた１１年半を知る中で物理的な課題と同時に、アイデンティティについての精神的な課題があることは大切な気づきだと思った。つながりを持ちたいと考える人が多い中で、人との関わりしろをどう作っていこうとしているのか、その模索を興味深く見た。復興という点だけでなく、町をどう未来に残すのか、どう一歩踏み出すのかは、日本のさまざまな地域が持つ課題を解決する方法にも感じられ、多くの人の学びにつながる内容になっていた。

○　原発被災からの復興の難しさや、松浦さんの「何でこうなったんだべ」という心の叫びが印象に残った。住民が３０人と聞いて驚いたが、誘致できた企業が１３社で、300 人が働いているという元気が出る話題もあり、よかった。町長の、負けていられない、何とかやり遂げたいという真剣なまなざしに意志の強さを感じた。今回はスタジオではなく、新しくなった駅の前で解説を行っていて、きれいになった駅の様子に未来を感じる演出で、司会のアナウンサーの声も聞き取りやすくてよかった。継続取材をして全国の人にももっと知ってほしいと思った。

○　今を切り取った双葉町の、はじめの一歩の記録だと感じ、取材を続けていく中で双葉町の変遷を記録できるのではないかと思った。誘致した１３社で働いている 300 人はどこから来ているのか、帰りたくないという６０％の人たちはなぜそう思うのかなどについては、もう少し知りたかった。また、双葉町と関係の無い人たちがこの番組を見たときにどのような感想を持つのか、興味をもった。

（ＮＨＫ側）

双葉町に関係のない方々が番組をどう受け止めるかは、首都圏はもちろん、福島県内でも例えば会津の方がどう思うかなどを念頭において制作した。他の地域にとっても町づくりのヒントになる部分はあると思う。町をどう残していくのかというこ

とは過疎の問題にもつながり、ゼロから未来を創るという逆転の発想も色々な地域で起きている事象なので、そういった部分に興味を持ってもらいつつ、被災地の現状を伝えていく役割も果たしていきたい。町への思いの強さやアイデンティティについては、今後顕在化してくる問題が多くあると思う。どういう形であれ、今後も私たちは取材を続けていきたいと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　９月１６日(金)の東北ココから「『個』を伸ばす組織とは　～全国優勝　仙台育英の育成術～」を見た。撮りためた映像を散りばめつつ、仙台育英の育成の秘密に迫る仙台局にしか作れない番組だった。須江監督の育成術は企業人の育成にも応用できる完成度が高いもので、人づくりに関するさまざまな示唆を受けることができた。スタジオゲストの為末大さんと生島淳さんも絶妙なキャスティングだった。個を伸ばし組織を活性化させるプラットフォームは指導者によってこそ生き、今年の育英の強さは、監督の人間力によるところも大きいと感じた。凝縮された３０分で、丹念な取材と構成もすばらしかった。

○　９月１６日(金)の東北ココからを見た。大所帯ならではの工夫が随所にみられたが、フォーマットをつくり、選手のやる気を引き出す方法は勉強になった。育成術は最終的には監督の人柄だということもよく伝わってきて、同じ指導者の立場である自分にとっても刺激になった。

○　９月１６日(金)の東北ココからを見た。仙台育英の快挙を、選手の育成で見る切り口がユニークで、野球以外の組織マネジメントや人材育成にもつながる話が含まれていて見応えがあった。監督の「優しさは創造力」ということばが自然とチームのスローガンのようなものになっていて、リーダーの語ることばの力の重要さもよく分かった。

○　９月３０日(金)の東北ココから「東北から始めよう　ここまできた再生可能エネルギー」を見た。再生可能エネルギーの導入拡大は、政策面や地域活性化の面でも大切で、東北各地の実態や先行事例について、丹念な取材で全体像がよく分かった。博士と年配の男女のキャラクターのやり取りで分かりやすく伝えていくという工夫があり、平易なことばで実証研究や専門家の説明を引用しており理解しやすかった。大切だが難しい電気の需要と供給のバランスの確保についても、てんびんを使った動画でうまく表現していた。必要性やメリットだけではなく課題もしっかりと分かり、バラ

ンスがとれていた。

○　９月３０日(金)の東北ココからを見た。東北で、こんなに再生可能エネルギーの取り組みが進められていることに驚き、浪江町の水素エネルギーの地産地消には可能性を感じた。内容は大変分かりやすかったが、描く主体として国や首都圏などの地域以外の姿が見えなかったのは少し気になった。水素を使った再生可能エネルギーについて、災害時にどんな心配事があるのか、どう克服するのかなども知りたいと感じた。

○　１０月７日(金)の東北ココから「あなたの町の映像アルバム　岩手・宮城編」を見た。過去の映像を前のめりになって見ている地元の方の姿がとてもほほ笑ましかった。映像を見ながらその当時の様子を思い出したり、気持ちを素直に語っていたのが印象的だった。つらい映像も、楽しい映像も、すべて残しておくことが必要だと感じた。貴重な映像ばかりで、地元の人が喜んでいる姿が、この映像の価値を示しているのではないかと思った。

○　１０月８日(土)の 大好き♡ 東北　定禅寺しゃべり亭「～純烈～」を見た。ＮＨＫ東北温泉地応援プロジェクトのテーマソングを歌っている純烈がゲストで、メンバーそれぞれのユニークなプロフィールを知ることができ、楽しく見られた。スーパー銭湯アイドルとしても、温泉との親和性が高く、東北とのつながりも紹介されていてよかった。また、テーマソング「とうほくであったまろう」で山形を紹介する中で、洋ナシということばがあるが、山形の人からは、「ラ・フランス」の響きの方が一般的だという反応もあった。

○　１０月２日(日)のＮＨＫスペシャル「安倍元首相銃撃事件と旧統一教会　～深層と波紋を追う～」を見た。非常に綿密かつ手堅い取材で見応えのある番組だった。独自取材も豊富で、ＮＨＫのジャーナリズムの力を感じた。政治家の関与が教団へのお墨付きとして機能し、被害を拡大したところに焦点を当てておりよかった。この番組だけではなくニュースも含めて、安倍元首相、細田衆議院議長についてなどさまざまな角度から引き続き政治と宗教の関係について報じてほしい。番組でも触れていたが、宗教とジェンダー、人権の問題、そして政治の関わりというのは、日本独自の話ではなく世界各国で見られる問題である。そういった角度からも引き続き政治と宗教の関係性について報道してもらいたい。

○　１０月２日(日)のＮＨＫスペシャルを見た。旧統一教会と地方の議会、政界とのつながりがかなり深刻なものになっているとうかがい知れ、非常に時間と労力をかけた力作だった。ゲストのコメントも的を射ており分かりやすかった。一方で、安倍元首

相と教団との関係、清和会、細田衆議院議長との関係に全く触れていないのには物足りなさを感じた。難しい取材であることは分かるが、そういった部分にも食い込んでほしかった。

○　１０月７日(金)のＮＨＫスペシャル「ＲＥＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ　銃弾のスラム再生の記録」(再)(総合 前2:40～3:29)を見た。初めてスラム街の内部のことや、貧困の差の激しさを知り驚いた。スラム街の人びとがギャングにならずに真っ当な仕事で生きられる世の中を作ろうと動く牧師を取り上げていたが、この人選はすばらしいと感じた。この牧師が１年かけてスマホのカメラを回していたことで、３日に一度は人が殺されているという現実がリアルに伝わってきて、心が苦しくなるとともに、日本は本当に恵まれた国だと再認識した。

○　１０月１０日(月)のエマージェンシーコール　～緊急通報指令室～「東京」(総合 後9:30～10:00)を見た。119 番緊急通報に対応する東京消防庁の指令室のドキュメンタリーで、独特な緊張感に引き込まれた。全国最多となる１日あたり約 2,400 件の通報があり、コロナや熱中症などで通報が途切れない指令室の様子がリアルに伝わってきた。消防士の仕事の精神的にハードな部分をかいま見て、職員の仕事に対する誇りを感じた。当事者からの電話の音声を、ボイスチェンジャーで変えるのではなく、セリフの吹き替えで表現していたのがリアルで新鮮だった。民放とは違う、抑制が利きながらも緊張感とドラマ性のあるノンフィクションだった。コロナ禍で消防に限らず保健所や医療機関も過酷な状況かと思うが、こうした現場への理解を深めてほしいという番組の制作意図を感じた。次回にも期待したい。

○　１０月１７日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「ジェノサイド　虐殺と黙殺」を見て、人間とは何と愚かな存在なのかと思った。惨劇の連鎖は現在も続いているが、歴史の負の教訓に学び、今後に生かしていかなければいけない、そう実感させられる番組だった。この番組は今年度の菊池寛賞にも選ばれたが、これまでになかった切り口と質の高さが高く評価されたと感じていて、番組のファンとしてはうれしく思った。

○　１０月１８日(火)のクローズアップ現代「“老いるマンション”　老朽化と高齢化にどう備えるか 解決策は」を見た。マンションがテーマではあったが、高齢化社会のさまざまな問題をしっかりと描いていた。「解決策は」とタイトルにあるように、具体的な対応策を分かりやすくまとめ、解説付チェックリストをＱＲコードで提示するなど、アクションにつなげるためのきっかけづくりをしていて、すばらしかった。小さな一歩でも、大きな一歩になると感じた。

○　１０月１９日(水)のにっぽん百低山「田代岳・秋田」を見た。入り口から山頂までの間に、キノコや植物を見つけたり、涼しい森の空気感が伝わったりして、本当に登っている気分になり、行ってみたいとわくわくする番組だった。案内役の吉田類さんと初心者の鳥居みゆきさんのかけ合いが楽しく、よいコンビネーションで、ベテランガイドが気をつけるポイントを教えていたのもよかった。ふだん山に行かない人にも山の楽しさを伝えつつ、山好きも楽しめる良質な番組だった。

○　１０月１７日(月)のきょうの料理「津軽の料理は手から手へ　おらほのりんごレシピ　煮りんご」を見た。津軽あかつきの会の紹介だったが、ありのままの会の魅力が存分に描かれていてよかった。きれいなお膳のイメージだけではなく、厨房でのメンバーどうしの味つけをめぐったバトルも紹介され、会の雰囲気をよく伝えていた。伝承料理という活動としても紹介されており、全国で同様の活動をしている方へのエールになると感じた。

○　１０月からスタートした「理想的本箱　君だけのブックガイド」を毎週見ている。視聴者の声などを基に「母親が嫌いになった時に読む本」など挑戦的なテーマが選ばれているが、豊かな語り口でそっと本を差し出すような構成は好印象で、新たな本の見方を示す番組だと感じた。見ていると引き込まれてつい本のタイトルを忘れがちなので、最後に再度紹介してもらえるとありがたい。自分では選ばない本に出会えて、読んでみたいと素直に感じ、実際に購入したものもある。番組の認知がすすめば、ターゲット層の気持ちをつかむ番組になるのではないか。今後も楽しみにしている。

○　９月２６日(月)のスポーツ×ヒューマン「父とともに歩む道　柔道　古賀颯人・玄暉」を見た。古賀稔彦さんの遺された息子２人の物語だったが、娘さんも柔道の選手なので、２人だけの話だったのには少し違和感があった。息子さんが、亡くなった父親のことを語っているのを見て、改めてすごさを感じた。生前よく、古賀さんは強い人ではなく優しい人になりなさい、と指導をしていたと紹介があったが、柔道にはやわらかい側面もあることや、教育的な部分が大きいという魅力をもっと知ってもらいたいと思った。「スポーツ×ヒューマン」は、タイトルのつけ方がとても魅力的で、ほかの回も見てみたいと思った。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２２年９月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１５日(木)、ＮＨＫ仙台放送局（ウェブ開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、２０２１年１２月２６日（日）に放送したＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議では、まず、２０２２年度後半期の国内放送番組の編成について説明し、２０２３年度の番組改定と合わせて意見交換を行った。

続いて、明日をまもるナビ「東日本大震災～若者たちが いま語る１１年～」を含め、放送番組一般について活発に 意見の交換を行った。最後に、放送番組モニター 報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	佐藤勘三郎	（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長	南條　和恵	（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員	丑田　香澄	（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
	佐々木　裕司	（東北電力株式会社　常務執行役員）
	佐藤　多恵	（シンガーソングライター）
	永井　温子	（株式会社 Ridun　代表取締役）
	松沢　卓生	（株式会社浄法寺漆産業　代表取締役）
	宮川　宏	（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜「２０２２年度後半期の国内放送番組の編成」および
「２０２３年度の番組改定」について＞

○　スマートフォンに最適化した縦型動画トライアルを実施すると聞き、新しくておもしろいと思った。また「ゲームゲノム」という、ゲームを文化として捉える番組は、これまでになかった発想で期待している。また、「カズレーザーｖｓ.ＮＨＫ高校講座」にも注目している。タレントのイモトアヤコさんが出演していた「テレビで中国語」も敷居が低く楽しみながら学べた。学び直しのニーズがあるなか、新しい学びの場となりえるのではないか。番組制作費の単価の見直しについては、どう下げるかという観点のみだとＮＨＫらしい番組が見られなくなるのではという危惧があったが、単価

を上げるケースもあると聞き安心した。今後もよい番組を作っていってほしい。

○　前半期に多くの改定があったが、番組の評価方法や、打ち切りと継続を判断する基準はどういったものがあるのか。良質な番組の視聴率が必ずしも高いとは限らないので、視聴率だけで判断することなく今後も良質な番組を制作してほしい。

（ＮＨＫ側）

視聴率だけではなく基準は多岐にわたり、それらを勘案して総合的に判断している。ＮＨＫに求められているのは、しっかりとした取材に基づいた情報性の高い番組やコンテンツだと感じており、これからも強化していく。頂いた意見は今後に生かしていきたい。

＜明日をまもるナビ「東日本大震災～若者たちが いま語る１１年～」
(総合　９月１１日(日)放送)について＞

（ＮＨＫ側）

今回の「明日をまもるナビ」は、仙台局で東日本大震災以降継続している番組「被災地からの声」を発展させたものである。「被災地からの声」は、発災９日後から始まり、生の声を早く届けようと、最少人数で現場に足を運び、出会った人に思いの丈を語ってもらったり、一番言いたいことを書いてもらったりという、シンプルなやり方で続けてきた。開始時から担当している津田喜章アナウンサーは石巻出身で自らも実家を流された経験がある。被災した全市町村を約２０回以上回り、話を聞いた人は 5000 人以上で、庶民の復興アーカイブの役割も果たしている。今回は、かつて出演した５人に集まってもらい、過去の映像を見て、自分たちの１１年を振り返ってもらった。彼らがほぼ成人年齢を迎えたことで、被災の程度の違いや大人に気を遣ってこれまで言えなかった体験や思い、また同世代どうしだから語れる本音が聞けるのではないかと企画した。さらに、取材を通して自らの報道姿勢を顧みる機会ともした。

○　当時の子どもたちの目線から振り返る構成がよかった。かつての子どもたちが赤裸々に語ることで、突然環境が変わることのすさまじさや、家族、友人、大切な人へ

の子どもからのまなざしなど、自分たちの想像力が欠如していた部分があったのではないかと顧みるよい機会となった。さまざまな切り口の番組で震災について触れる機会を増やすことは重要だと感じた。救助された経験から消防を目指す人や、地域に恩返しをしたいと何人もが言っていたのが印象的で、被災の事実は変わらない中で、前を向いて歩く姿も含めて、ありのままが描かれていた。また、津田アナウンサーの、１１年見つめ続けてきたからこそ出てくることばの数々に視野が広がった。震災を体験した東北だからこそ、全国に発信していけることがあると感じた。

○　震災の番組の多くが、東北の人向けに放送されてきたと感じており、震災の教訓、風化を防ぐ意味からも、全国放送される意義は大きい。被災時に子どもだった若者が震災について心の内を明かす機会はなかなかない。同年代と話すことで、自分と同じような考え方だと知って安心したという参加者の感想には、番組以外の場でもこうした機会を広げる必要性を感じた。被災体験を生かすことができないという葛藤を抱えた女性や、マイナスな部分のコメントを求められている気がしたという男性のことばが印象的だった。大人は子どもに対し、かわいそうだとか、くじけずに頑張ってほしいとか、一方通行な思いを押しつけ、偏った見方をしていたのではないかと感じた。津田アナウンサーの「一番つらいのは、誰も気づいてくれないこと」ということばに、出演依頼を断った方など、被災体験を消化し切れない人も多いと感じ、どう向き合うべきか重い課題を突きつけられた。

○　被災者の今の姿を紹介した番組はいくつかあるが、同年代の若者を座談会的に取り上げたのは新鮮だった。今回出演された若者は、比較的前向きに捉えている方が多い印象で、震災直後のさまざまな思いはあるが楽しいこともあり、人生は震災だけでないといった受け止め方が示されていた。実感としてもこうした若者は多く違和感はなかった。番組の中で紹介されていた福島出身の女性が、神奈川に避難していた際、「放射能をどのくらい浴びたの？」「がんになるんでしょ」と言われた話は印象的で、もっと知りたいと思った。岩手の方が、民謡外山節を歌っており、民謡や郷土芸能に親しむ若者が多いという岩手の地域性に触れていたのもよかった。

○　震災を経験したかつての子どもたちが、一つの経験と捉えている前向きな姿にとても心を打たれた。「震災で家族と一緒に過ごせる時間が増えて楽しかった」など、子どもたちは状況に応じて、楽しみや新しい発見をしていたことが印象的だった。子どもだった当時は、取材者から悲しみに寄せたコメントを求められていると敏感に感じ取り、本音が言えず、大人が欲しいことばに寄せがちだったのではと感じ、今回の取材はとても意義があると思った。また、「復興とは震災を語れるようになること」という津田アナウンサーのことばはとても腑に落ちた。ゲストの２人のコメントがすば

らしく、話を分かりやすく伝えており人選がよかった。番組に出た若者たちの５年後、１０年後もどうなっているのか知りたいと思った。

○　震災を経験した子どもたちが成長して、当時を振り返ることができるようになった現在だからこそ、本音や葛藤を引き出せたよい企画だった。子どもは賢く、気を遣われているのは実は大人であったという事実は、大人と子どもの立場の逆転という震災特有の側面もあると感じた。若者たちには、被災の経験を経て努力をし、前向きに生きようとしている優しさや強さを感じた。一方で出演を断った方がいたことには、つらい記憶を引きずる若者も多く、多様な今があるのだと感じた。津田アナウンサーの「誰も気づいてくれないことこそがつらい状況であり、見守ることというのは極めて大切なこと」という話に共感した。記憶の風化は、見守ることへの意識の希薄化でもある。社会が優しく見守り続け、子どもたちの背中を押し続けることが、復興の前提なのだと改めて感じた。ゲストの小山慶一郎さんの「自分ができる“伝える”を」というメッセージ、秋吉久美子さんの「輝いて、生きて」というエールからも、率直な思いが伝わってきた。

（ＮＨＫ側）

被災地の問題に日常的に関わり続けることは大切だ。震災が３月の節目だけの報道になりつつあることには、危機感を感じており、この時期に全国放送できた意味は大きかった。仙台局にも、震災時に子どもだったという若い職員や、東北にゆかりのない人もいて、どう震災の取材に関わっていけばいいか悩み、第一歩を踏み出しづらいという声もある。「被災地からの声」の番組フォーマットを守っていくことは、彼らが震災に触れるきっかけにもなっているので、継続していきたいと思う。今回の５人は、必ずしも前向きな人たちだけではなかったが、同世代と話したいというモチベーションを持つ人たちに参加してもらった。印象的だったのは、山元町の女性が、みんなが震災をきっかけに踏み出していくのに、自分はそれを見つけられていなくて、だから自分には被災体験が足りないのかなと言っていて、そうした捉え方もあるのだと考えさせられた。

○　大人の取材者に対してではなく、同年代どうしの方が本音を話しやすいのではないかという企画意図がすばらしかった。それぞれの抱えている葛藤が見て取れ共感した。当時、大人は自粛モードだと感じていたが、子どもは被災した状況の中でも楽しい時間を見つけている姿があり、異なる捉え方が興味深かった。また、震災がすべて

じゃないという、自分の気持ちに焦りを感じている若者のことばには、こう考える人も少なくないと感じ、被災体験は自分を構成する要素の一つかもしれないと思った。スタジオの小山さんが、子どもの「迷惑をかけちゃいけない」という思いを優しさに置き換えていたことには少し違和感があった。迷惑をかける、ということも必要だし、災害がなくても守ってくれる、頼れる他人の存在も必要だと思う。

○　番組の冒頭で、震災から間もない時期の映像を流した構成は引きつけられた。また、震災の経験の受け止め方はさまざまだと感じた。印象的だったのは、子どもは意外と楽しんでいたという話で、少しほっとした気持ちになるとともに、親や周囲の人が愛情をかけてあげたのだと思った。きっと、大人たちも子どもの笑顔で癒やされたのだろうとも感じた。避難中に嫌な経験があっても、震災にあったことが私の人生のすべてではないということばには、人生を歩む力強さを感じた。また、取材の終わりに「楽しかった」と言っていた方もいて、同じ経験をした同年代の方と思いを伝え合えたことは、本人にも視聴者にも貴重な時間になったのだと思った。スタジオのゲストも、東北出身の秋吉さんと若い小山さんで、バランスがよかった。

○　冒頭の被災直後の声でぐっと引き込まれた。大人はさまざまなレッテルを貼りたがるが、子どもはあっけらかんと日常を過ごしていたことが興味深かった。座談会の会場となった荒浜小学校は、亡くなった方がいない場所だったので、話をしやすいと思った。５人の人選については、男女比はもちろん、岩手、宮城、福島という地域や年代のバランスもとれていた。出演を断った方がいることには、今どういう思いでいるのか、生活や気持ちの面での話も聞いてみたいと思った。座談会での発言時、左下に過去の写真が出るのは分かりやすかったが、他の場面でも左下に会場の様子が出ており混乱しやすいと感じた。また、登場人物が多く、過去の話もあり、見ていて誰が誰だか分からなくなる人も少なくないと思ったので、もう少し工夫がほしかった。

○　学校の作文で被災者としてのコメントを求められていると感じたエピソードが印象的だった。メディア関係者はこの葛藤を常に抱えていると思うが、子どもは大人が考えているよりずっと賢い。被災地の子どもたちに向き合うとき、私たちは無意識に何かを期待したり、背負わせようとしたりしているのではないか。当時の子どもたちの貴重な本音をかいま見ることができ、貴重な反省の機会を得られた。秋吉久美子さんの感じた、震災直後の子どもたちを前にした葛藤や逡巡に、大切なことを思い出させてもらえた。もっと、当時の子どもたちに話してもらい、真摯に耳を傾ける時間が必要だと感じた。

（ＮＨＫ側）

「被災地からの声」は、バトンをつなぎながら、長く続けている番組だが、今回過去の映像を見直して、はっとさせられることが沢山あった。また、彼ら自身も自分や同世代の過去の映像を見て気付くところがあり、アーカイブは本当に大事だと改めて感じた。子どもたちを取材する中で見えてきたのは、大人が悲劇として捉える場所や震災を、彼らが捉え直そうとしていることだ。被災した小学校は、悲劇の現場として語られるが、彼らにとっては楽しい思い出があった場所でもあるように、震災の意味づけを転換しようとしている。また、大人が被災をめぐり分断していても、子どもたちならではのしなやかさで、苦悶しながらでも乗り越えようとする姿が見え始めている時期だと感じる。震災から１２年に向けて、こうした目線の取材をこれからも続けていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　ＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」へのＢＰＯ放送倫理検証委員会の意見・指摘については、重く受け止め、今後の改善につなげることを強く求める。ＮＨＫへの信頼が揺らぐことは、この国の民主主義の基盤に大きな傷がつくということでもある。なぜ過ちが起き、防げなかったのか、自らが関わる番組でも似た事例はなかったか。十分な時間をとり各部局でじっくりと考え、タブーなく話し合いを積み重ねてほしい。同時に、今後の取材や番組制作において、萎縮し、「危なそうなテーマは避ける」ことがあってはならない。権力の暴走を監視し、民主主義の基盤を守るのがジャーナリズムの役割であり、ＮＨＫはその模範となる存在でなければならない。ＮＨＫがあって良かった、この国の社会は良くなった、と私たち一人ひとりが実感できる番組作りを強く期待している。

○　８月２６日(金)の東北ココから「スマホ日記 誰かに聞いてほしい 今日の“もやもや”」を見た。「母親が帰ってくる時間が近づくにつれて息苦しくなる」というリアルな声をよく集められたと思った。ふだんは人に明かせない気持ちをスマホ日記という形で記録するのは、実験的試みだと感じた。若い世代の生きづらさは日本の大きな課題の一つで、今後もこうした番組を望む。ただ、「スマホ日記」というタイトルでは、内容が分かりにくく視聴したいとあまり思えない。もう少しダイレクトに、「生きたい」や「生きづらさ」、「若い世代」などを前面に出したタイトルの方が効果的だった

と思う。

○　８月２６日(金)の東北ココからを見た。４人の若者の夏のスマホ日記で心の微妙な揺れを描いているが、出演者と視聴者の年代が離れていると、理解しきれずシンパシーを抱きにくい内容だと感じた。彼女たちの悩みの大部分を、家族関係が占めていることは少し意外だった。若者は気持ちの揺れもあり、自身を把握することが難しかったり、内面を言語化する作業に慣れていなかったりして、話の内容が深まっていきづらい部分もあると感じた。

○　８月２６日(金)のきんよる秋田「３年ぶりの竿燈まつり　密着半年！“子どもを育てれ”」を見た。竿燈、秋田の文化を守りたいという思いや、何年もかけ竹を乾かし竿燈を造ること、町内会単位で思いや伝統が受け継がれていることなどを取り上げていて、喜ばしい気持ちになった。サブタイトルが“子どもを育てれ”で、次世代というキーワードでまとめていたのも好印象だった。こうしたローカルな番組をＮＨＫプラスでも広く見られるようになったことが本当にうれしく、今後も期待している。

○　９月２日(金)の東北ココから「限界集落住んでみた　宮城編」をみた。地元の漁師さんの、「海がある限り、限界はない」という、出島のアイデンティティーともいえることばが印象的だった。若いディレクターの気づきである「お裾分けがうれしい島」も重要なキーワードだと感じた。海で暮らす人たちは、恵みをもらいつつ、いつ命を失うかも分からない。その中で助け合って生きていくことが現在も地域で残っており、豊かな営みだと思った。都会暮らしの長かった若いディレクターの新鮮な発見や驚きが、非常にリアルに伝わってきて、限界とは何だという番組のテーマが、徐々に見る側に伝わったと感じた。

○　９月２日(金)の東北ココからを見た。ディレクターとタレントのりんごちゃんのかけ合いも含め、全体的に優しい雰囲気で安心して視聴できた。出島の風景がとてもきれいで、行きたいという気持ちになった。漁師さんの「住んでいる人たちがすべてではない」ということばに、そのとおりだと思う反面、番組内で若い人がほとんど出てこなくて、現実的にどう生活を維持していくのかが気になった。お裾分け文化や「もらうだけでなく、人に何かすることがうれしい」という住民のことばなど、消費し消費される関係性とは別のつながりがあることを改めて認識させられるとともに、そこにある強さも感じる番組だった。

○　９月２日(金)の東北ココからを見た。限界集落シリーズは一つのパターンが決まりつつあり、安定感があった。今回担当した内藤ディレクターは高校女子サッカーで準

優勝という経歴や、番組でホヤの丸食いをする様子が印象的で、会ったことはないが彼女の人となりがよく伝わった。最後に集落をドローンで撮影してみんなで見るというパターンが出来上がっておりおもしろく、安心して見ていられる番組だと感じた。

○　９月９日(金)の東北ココから「もういちど、クジラと一緒に」を見た。震災で、町の様相、捕鯨をめぐる状況が大きく変わる中で、変わらないもの、残していかなければいけないものの一つが、鮎川七福神舞であり、かつてのにぎわいを伝える写真なのかなと思った。町の財産としてどう残していくかということや、後継者はどうなるのかということについても知りたかった。ナレーションは鮎川浜出身の本間秋彦さんで適任だったが、冒頭で少し下を向いて原稿を読んでいた様子が気になった。原稿があっても、自分のことばでカメラに向かって語ってほしい。ＮＨＫの豊富なアーカイブスから、全盛期の鯨まつりの過去の映像を番組で出さなかったのは、何か理由があるのか、少し気になった。

○　９月９日(金)の東北ココからを見た。７月３日（日）のＮＨＫスペシャル「鯨獲（と）りの海」では、再開された迫力ある捕鯨の映像がよかったが、「東北ココから」では、捕鯨を見守ってきた浜の方々の日常の姿を描いており、対照的で興味深かった。鯨文化を知らない人にも浸透しやすいと感じ、二つの番組をセットで放送すれば鯨文化への理解が進むと思った。また、昭和２０年代から続く地元のお母さんたちによる鮎川七福神舞という踊りが素朴でかわいらしく、一般的な郷土芸能とも違うリズムがラップ調だったのが印象に残った。お盆にやってきた孫やひ孫たちが、おいしい、おいしいと言って鯨肉を食べていて、その様子を見たおばあさんがとても幸せそうで、鯨文化を通じて世代がつながる様子がよかった。ＮＨＫが撮影した昔の鮎川や鯨漁の映像も見てみたかった。ナレーションが地元出身の本間さんで、なまりも自然で、地元の方を起用するのはよいと思ったが、もう少しくだけた口調でもよかったと感じた。

○　９月９日(金)の東北ココからを見た。ナレーションでところどころに出るなまりがとてもよかった。写真や動画などの貴重な資料だけでなく、地元の方の生の声や民俗学者の解説もあり、まちと鯨がどれほど密接な関係かよく分かった。リンゴなども同じだが、いつか生産量が少なくなったり、栽培ができなくなったりしたときに、どのように地域の記憶として残していくかは共通の課題だと感じ、住民の皆さんの姿には元気づけられた。また、その象徴として、伝えていくためのツールとしての祭りの重要性を改めて感じた。

○　９月９日(金) の東北ココからを見た。ナレーションを担当した本間さんはふだん民放で見ることが多かったので、ＮＨＫへの出演が珍しいと感じた。

○　９月９日(金)の東北ココからを見た。ナレーションに地元出身の本間さんを起用し、方言と地元トークをまじえた番組進行は、チャレンジングだと感じた。捕鯨という、グローバルな文脈からも考えられるテーマについて、ローカルな視点に徹する意図は成功し、地域にクジラがどれほど強く根付いているかを、見事に描き出せていた。しかし、ローカル感を出しすぎると、視聴者は疎外感を持つこともあるとも感じた。視聴者がどれだけこの番組を「自分」によせて見ることができたのかには疑問が残った。

○　８月２２日(月)の「第１０４回全国高校野球選手権大会　決勝」（総合 後 1:50～5:20）を見た。東北に初の優勝旗ということで、ふだんスポーツを見ない人でも涙なくしては見られなかったのではないか。選手たちの活躍はもちろん、須江航監督のコメントが、自分主体の表現ではなく印象的だった。「青春ってすごく密だが、コロナ禍で苦しい学生生活を送ってきた選手たちの我慢や努力、同じような思いをしてきた全国の高校生に向けて拍手を送りたい」というコメントにぐっときた。

○　８月２４日(水)のドキュメンタリー　夏「ふたりのラッセラー～青森ねぶた祭～」を見た。勇壮なねぶたから優美なねぶたへ、新しい感性を生かし二人が作り上げていく挑戦の過程がよく描かれていて、ねぶた師の北村春一さんが「ねぶたは環境やライフスタイルにより変化するものだ」と言っていたのが腑に落ちた。３年ぶりに開催されたねぶた祭りだが、ねぶた師は現在どうやって生計を立て、制作のユニットを維持するのかにも興味を持った。また、祭りが終わった後には、ねぶたを何の躊躇も呵責もなく壊すことはすごいと思い、もったいないが、これが青森の夏の伝統なのだと感じた。

○　８月２９日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「東京　破壊と創造　関東大震災と東京大空襲」を見た。建築家のアントニン・レーモンドという只見川ダムを造るのに深く関係した方が、日本から見るとアメリカの戦争協力者の一人でもあった。この番組を見ると、新しい発見をすることが多くよく見ている。

○　８月３１日(水)の笑わない数学「カオス理論」を見た。数学と縁遠そうなお笑い芸人のパンサー尾形さんが、大真面目に難解な数学理論を解明していくおもしろい企画で引き込まれた。扱うテーマは極めて難解で、難しい用語が次々に出てくるが、尾形さんのハイテンションな進行で分かった気にさせられた。難しい内容だが、笑えるエンターテインメント性のある番組になっていると感じた。キャスティングが絶妙で、ナレーションも分かりやすく、肩が凝らずに見られる構成になっていた。

（ＮＨＫ側）

「笑わない数学」は、パンサー尾形さんを起用したことが、功を奏していると思う。決して笑わせようとはしていないが、彼が汗だくになり必死に取り組む姿をおもしろく感じる人も少なくないだろう。こうした手法はＮＨＫの得意なところだと感じている。

○　９月５日(月)のクローズアップ現代「“宗教２世” 旧統一教会・信者の子どもたち 知られざる現実」を見た。安倍元首相銃撃事件でクローズアップされた旧統一教会の宗教２世を取り上げていて、とても見応えがあったが、放送日が気になった。視聴者の中には、何で今頃このテーマを放送したのかと感じた人もいたのではないか。この問題は、事件以降早い段階から指摘されていて、ほかのメディアもさまざまな形で取り上げていた。アナウンサーが「銃撃事件前からこの問題を取材していた」と言っていたが、なぜもっと早く放送しなかったのか、放送できない事情があるのかと見る側は思ってしまう。正しく伝えることは大前提だが、なるべく早く伝えることもメディアの責務だと思う。内容がすばらしかっただけに残念だった。

○　９月６日(火)のいいいじゅー！！「宮城・気仙沼市」を見た。この番組がお昼の時間帯に放送されるのはとてもうれしい。マグロを釣る廃棄漁網をリサイクルして商品化する話で、地元の救世主になり得るよいアイデアだった。気仙沼の人たちの厳しくも愛のあるアドバイスや、声をかける場面が絶妙で、こういう所に移住したいと思った。移住のすばらしさだけではなく、移住先で何をしたいか、何が目的かを明確に伝えていて見ごたえがあった。１年後などに、その後を追った「いいいじゅー！！スペシャル あの人は今」などとして見られたら楽しいと思った。

○　９月１２日(月)のクローズアップ現代「エリザベス女王 世界が愛した存在」を見た。よい話ばかりではなく、苦悩の時期も描いており深みがあった。笑顔にとても引きつけられ、もっと見ていたいと感じ、今後もエリザベス女王の特集を期待したいと思った。

○　９月１２日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「９．１１ 同時多発テロへの点と線」を、タイトルにひかれて見た。貴重な映像とともに描かれる真実に見応えがあり、４５分でも長く感じなかった。テロを首謀したオサマ・ビンラディン氏と、ワールドトレードセンターを建築したアメリカの巨大財閥ロックフェラー家に因縁があったことなど、知られざる衝撃の事実を分かりやすく描いていた。世界各国から集

められた貴重な映像が残されており、よりリアルに長い歴史の連鎖が事件を引き起こしたのだと、改めて考えさせられた。

○　８月１９日(金)のニュー試「４年で世界７都市を旅する大学　入試は？」（Ｅテレ 後10:00～10:30）を見た。ミネルバ大学は半年ごとに違う世界の拠点に滞在して、その土地が抱える特有の課題に関与し解決する力を養う実践的な教育をしており、同時に世界各地でのネットワークも広げている。こうした、すばらしいビジネスモデルを知ることができたのはよかった。日本の教育改革に参考になる内容になっているとともに、日本の教育への課題提起も感じた。２回で終わる単発番組のようだが、世界の先進事例をＮＨＫのネットワークを駆使して取材してもらい、新たな企画を期待したい。

○　８月２８日(日)のこころの時代～宗教・人生～「生きる根をみつめて」を見た。秋田出身の小松由佳さんの幼少期や、Ｋ２登頂後フォトグラファーに転身し難民を撮り続ける生き様を、本人の語りでルーツから知ることができ、引き込まれる番組構成だった。生きる、生かされるとは何なのか、考える機会をもらったすばらしい番組だった。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２２年７月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ仙台放送局（ウェブ開催）において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、東北ココから「えふえむ旅～福島で福が福さがし！～」を含め、放送番組一般について活発に 意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告、視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）

委　員　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）

佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）

佐藤　多恵（シンガーソングライター）

武田　靖子（株式会社ジョイン　専務取締役）

永井　温子（株式会社Ridun　代表取締役）

前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）

松沢　卓生（株式会社浄法寺漆産業　代表取締役）

宮川　宏　（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜東北ココから「えふえむ旅～福島で福が福さがし！～」

(総合　６月２４日(金)放送)について＞

○　コミュニティＦＭと連携する形が新しく興味深かった。出演していた俳優の鈴木福さんも「地元の人に教えてもらえると深く知ることができる」と話していたように、地域密着型のラジオパーソナリティとの旅を通じて地域の魅力を紹介しており、観光スポットを巡るような番組とは一線を画した旅に触れられた。番組の中心となっていた地域の作り手である住民の方たちの、つくり出すことを楽しんでいるメンタリティが印象的だった。地域の魅力の本質は、何かを一緒につくっていくような生産者と消費者のあり方だと感じることができた。今後は、より時間をかけて地域の住民と一緒に何かをつくってみるなどのスタイルも見てみたい。地域のディープな魅力を伝える

この番組を東北の各県で作ってほしい。

○　ラジオのリスナーからの情報を集めて、実際に訪ねるという手法が目新しく、魅力的な場所を知ることが出来た。鈴木福さんの優しいキャラクターは地域に溶け込みやすく、柔らかい雰囲気の番組にあっていた。一方で、番組の構成にはもう少し工夫があってもよかった。「ＦＭいわき」についてのストーリーや地域に根差しているという背景は、冒頭で紹介してほしかった。また、鈴木福さんが出てきて少し唐突感があったので、なぜ出演することになったのか、説明があった方がよいのではと感じた。鈴木福さんがラジオでいわきの方に呼びかけて、パーソナリティと一緒に現地に行ってみるという流れのほうが理解しやすかったかもしれない。福島県以外の地域が舞台のものも見てみたいので、ぜひシリーズ化してほしい。

○　地域に深く入り込んでいるコミュニティＦＭとコラボしたことで、いわきの魅力を再発見できた。番組を通じたテーマとして、輪を広げ伝ぱさせていく、ということがあると感じた。旅人は、福島にゆかりのある方がよいという感想もあると思うが、輪を広げていくという点で、今後、その人にとってゆかりのある場所になるということでもよいと感じた。ほかにも、東北各地には魅力的なＦＭが多くあるのでぜひコラボしてほしい。

○　全体的に焦点が定まらず、何の番組か分かりづらく、少し落ち着かなかった。グルメや旅、まちのヒーロー紹介、原発の話と情報が多く詰め込まれ過ぎていて、鈴木福さんの魅力で何とかまとめ上げていた印象だった。コミュニティＦＭを軸にするのであれば、番組を通してパーソナリティの２人が鈴木福さんを案内するほうが見やすかったと思う。シリーズ化を見据えた試行錯誤のチャレンジとしては楽しく見られたので、今後に期待したい。

○　ラジオとテレビの魅力が一体となっていたのに加え、ラジオ的な語りのテンポが心地よく感じられた。地元の人がお勧めする場所はとても魅力的で、コミュニティＦＭだからこそのディープな情報が集まっていた。テレビで紹介することで、ラジオ離れしている世代にもコミュニティＦＭのよさが伝わるのではないか。ただ、番組はコミュニティＦＭのよさと、地元のよさのどちらに重きを置いて伝えたいのか分かりづらかった。淡々としている鈴木福さんとテンションの高いコミュニティＦＭのパーソナリティ飛田国洋さんの温度差がおもしろいと感じた。

○　メディアは国境を越えた電子的な広がりもつくることができるが、発信範囲が狭いからこそ、地域に溶け込みディープなファンを抱えたり、おらがまちのメディアとし

ての共有感を持ったりといった、すばらしい特性があると思った。また、埋もれている地域のよさを発信し、地域の人々と一緒に見つめ直すことで、地域に住む人々のつながりを媒介する、ラジオの可能性・存在価値も改めて感じた。タイトルの「えふえむ」が英語ではなく平仮名だったのが、ラジオの軟らかさ、親しみやすさを表現したものだと感じた。ラジオの存在意義を名物ＤＪのコンビと鈴木福さんという癒し系タレントのうまい組み合わせで表現していた。

○　地元の人以外にあまり知られていない情報を紹介するだけではなく、東日本大震災や、原発事故などをめぐる福島の地元の人が抱えている思いも描いたことで、番組の独自性を出すことができていた。鈴木福さんは、誰からも愛されるキャラクターで番組をうまくまとめていた。一方、ラジオのパーソナリティ２人の魅力をテレビでは生かし切れていなかったと感じた。ＮＨＫとコミュニティＦＭとのコラボは、コミュニティＦＭの地域密着の情報を番組作りに生かしたり、防災や災害時の対応についての連携づくりにつなげたりできると思う。互いにメリットのある関係づくりを進めてほしい。

○　番組の冒頭で突然、「とびベティ」「ヨーソロー」「アタック～！」という掛け声が飛び交い不思議に思ったが、地元の方には、このＦＭで行われている掛け声は誰もが知る番組の象徴なのだと思った。鈴木福さんのキャラクターは、老若男女問わない人気ぶりで、行く先々の人の表情を明るくしていた。また、お勧めのディープスポットの紹介、震災の話と、さまざまな要素を詰め込んでいたが、旅番組として見ると、いわき市民のご近所旅行視点でまちの魅力を発見していて、地元のお店で地域の人とつながったり、駅の周りを大事に守る人たちの思いに触れたりと、マイクロツーリズムの良さも提示していた。ほかの地域でのこうした番組も見てみたいと思った。

○　コミュニティＦＭの運営の大変さや震災直後から防災の役割を担ってきた部分など、番組で描く際に力が入り過ぎることを心配していたが、見やすくてよい番組だった。コミュニティＦＭのニッチでディープな情報を期待していたところ、番組の冒頭が、スパリゾートハワイアンズという定番の場所の紹介だったので少し戸惑った。その後は、コミュニティＦＭならではのスポットの紹介が続いたので安心した。「ＦＭいわき」の２人のパーソナリティを紹介するときに、何を言っていたかが、何度録画再生しても聞き取れなかった。ほかにも、インタビューで主語がない部分が紹介されていて理解するのに時間がかかった箇所もあったので、もう少しテロップで補うなどの工夫がほしかった。

(なお、欠席の委員より、文書で次の意見が寄せられた)

○　福島を応援したくなる素敵な番組だった。鈴木福さんの姿を見ると、どの方も優しい目になり喜んでいて、子役からずっとテレビで活躍してきた鈴木福さんの影響力を感じた。いろいろ苦しい思いをしてきた福島県民の支えになっているラジオパーソナリティの方やいわき市民だけでなく、福島、東北のみんなが癒やされる「福さがし」だった。これからも鈴木福さんには福島を支えて応援する役を担ってもらいたいと感じた。

（ＮＨＫ側）

去年、連続テレビ小説「おかえりモネ」のロケ地の登米と気仙沼を旅する番組の中で、コミュニティＦＭが地元の情報を多く持っていて、色々と協力をしてもらったことが、この番組を制作するきっかけだった。調べてみると、東北にある４４局のコミュニティＦＭは、どの局も個性があり、ローカルの情報に詳しく、地域とのつながりが濃いことが分かり、マスメディアのＮＨＫとピンポイントで深く地域にコミットしているＦＭがコラボすることで、地域の新しい魅力を伝えられるのではないかと考えた。「ＦＭいわき」を選んだ理由は、個性的なパーソナリティがいるということと、エリアを越境して放送する珍しい局だったため。震災、原発事故が生んだ越境放送だが、それも含め伝えたいと考えた。また、鈴木福さんに出演をお願いした理由は、もともとラジオ好きでラジオ番組を持っているということ、成人年齢が１８歳になり最近メディアに頻出していること、幅広い年代に親しまれる存在であるということなど。東北になじみがないという点については、かえっておもしろいのではないかと考えた。放送後の反省点としては、紀行番組なのか、コミュニティＦＭを通じて地域が見えてくる情報バラエティ番組なのか、中途半端になってしまったかもしれないということで、方向性については、今後制作していくうえでより大事にしたいと感じた。番組の翌週に、「ＦＭいわき」で鈴木福さんの出演した回が放送され、とても反響が大きく地域の密着感が伝わってきた。また、「ＦＭいわき」のリスナーから紹介されたキ

ッチンカーをロケした際、偶然にその投稿をした人と出会った。こうしたリスナーとのつながりをどう番組に生かしていけるのかが今後の大切な検討課題だと感じている。

＜放送番組一般について＞

○　７月１日(金)の東北ココから「限界集落住んでみた　秋田編」を見た。日本の原風景やそこに残る魅力、とりわけ人のことばの重みを感じ、改めて温かい番組だなと思い、放送する意味が伝わってきた。集落をドローンで撮影した映像のプレゼントは、「こんなにきれいだと思わねがったな」という集落を初めてふかんした住民の方々の視点とともに心に残った。活性化と同時に村納めに向かう議論にも目を背けられない現実がある。いまこの瞬間の限界集落を記録する取り組みを続けてもらいたい。

○　７月１日(金)の東北ココからを見た。秋田県の田代地区を取り上げ、自然に恵まれたすばらしい環境、助け合う人のぬくもり、自給自足の生活など、都会で失われつつあるものが残っていることを伝えていた。番組の最後の限界って何だ、ということばは、本当の豊かさって何だろうという問いかけでもあると感じた。ただ、今回は集落で唯一の子どもの存在や、ドローンで地区の全景を撮影するなどの工夫はあったものの、前回との違いがあまり感じられなかった。とてもよい番組なので、試行錯誤を重ねながらぜひ続けてほしい。

○　７月１日(金)の東北ココからを楽しく見た。お笑い芸人のバービーさんとディレクターの藤田さんが映像を見ながら振り返る演出がよかった。ディレクターが地区になじんでいく様子がほほ笑ましく、住民の皆さんが心を開いて接しているのも感じ取れた。「山は宝だ」ということばが印象的で、ドローンで撮った映像を、住民の方が涙ぐみながら見る姿に共感した。住民の方が「よいところだ」と言うのには、どんなに不便な場所で何もなくても、生まれ育った場所が一番という思いのすべてを物語っていた。また、「なくなることは次の世代の栄養」ということばが胸にぐっと来た。前回よりも、深い話で心温まりとてもよかった。限界集落シリーズが好きで、同じような構成ではあるが、それがまたよいと感じる。演出が根づいてくれば、取り上げる地域が違うだけでも楽しいと思えるので、次回作も楽しみにしている。

○　７月１日(金)の東北ココからを見た。今回の舞台も、前回取り上げた宮城県の集落と状況が似ており、同じような課題を抱えているのだろうなと思った。東京の青山の

美容院に通っているようなディレクターが４週間も限界集落に住んで取材をしたということだったが、取材者にもっとフォーカスすると、よりおもしろかったのではないかと感じた。

○　７月１５日(金)東北ココから「異国ＭＩＹＡＧＩで何食べる？」を見て、宮城県の100人に１人は外国人ということを知り驚いた。案内人のロック・バンド　ＭＯＮＫＥＹ ＭＡＪＩＫの２人のキャラクターも相まって、軽快なテンポで楽しめた。また、多様な方々がさまざまな思いを持って暮らしていることへの理解も深まる、バランスのよい番組だった。こうした新たな気づきやきっかけをもらえる番組を今後も期待したい。

○　７月１５日(金)東北ココからを見て、どの料理もとてもおいしそうでぜひ食べてみたいと思った。料理をする人たちの人柄が伝わってきて、実際に会ったわけではないのにとても親しみを覚えた。また、互いの異なる文化をおもしろがったり、感動しあったりしているシーンがあり、そのような関係はとてもすてきだと感じた。番組を見ているうちに、自分の中にも過ごしてきた土地ごとに異なる文化が根付いていることを発見でき、異国である日本に来た海外出身の方々と共通点があるという気づきをもらった番組だった。

○　７月１５日(金)のいわチャン「神楽舞う里で生きる　２１歳“生さん”の選択」を見た。山の中の暗いところで踊る様子がとても神秘的な一方、スマホで自分の踊る様子を確認しながら練習している対比がおもしろかった。ナレーションもすばらしく、岩手出身の声優の桑島法子さんを起用していて、番組の大きな特徴になっていた。神楽を披露する場面では、地元の方が生さんをねぎらう様子も丁寧に映し出されていて気持ちが温かくなった。ほとんどの伝統芸能、伝統工芸は、若い人が少ない現実もあり重い課題を抱えているが、郷土芸能が岩手という地域に息づいているということを改めて教えてくれる番組だった。岩手だけの放送ではもったいないので、ぜひ東北や全国の方にも見てもらいたい。

○　７月１６日(土)の被災地からの声　つぎの一歩「福島県川内村」を見た。津田アナウンサーの誠実な表情を見るとほっとして、時に厳粛な気持ちになる。光と影のバランスをしっかり取っていて、本当にすばらしい番組だなと感じている。ただ、被災地の子供たちへのインタビューは、知らず知らずに復興を背負わせてしまっていたり、求められていると思った答えをしていたりするのではないかと感じることもあり、聞いていて悩ましい。こういった番組を東北だけでなく、全国、海外へも届けていってほしい。福島の現在の状況も知ってもらいたい。原発事故直後のイメージのままで固

定されてしまうのが最も危惧するところなので、ＮＨＫプラスなども活用して、発信をしていってほしい。

○　６月１６日(木)コズミック　フロント「カーボンプラネット　炭素と地球　知られざる物語」を見た。若者の理系離れが指摘される中で、科学への興味を増進するような良質な番組は重要な役割を担っている。ビジュアルで分かりやすく見せて、世界の権威の方々のコメントも紹介しながら、素人にも理解しやすいよう深く掘り下げて解説していた。暗記偏重ではなくて、未知への好奇心や、手探りで考えるおもしろさをインスパイアする教養番組をこれからも企画してほしい。

○　６月１８日(土)のＮＨＫスペシャル「なぜ一線を越えるのか　無差別巻き込み事件の深層」を見た。容疑者の心の闇に迫る労力を重ねた番組だった。深刻だと思ったのは、加害者について、人ごととは思えない、気持ちは分かる、という人が少なからずいるということで、格差や孤独、分断など社会のひずみが表れていると感じた。ただ、若者たちの居場所づくりに励むＮＰＯの存在に、社会とつながる接点を見いだした人もいた。人との関係で傷ついた心を癒すのは、やはり人とのつながりでしかない。社会はどうあるべきかというヒントを示しており、最後に少し救われた気がした。

○　安倍元首相が銃撃された痛ましい事件では、その後のＮＨＫの報道に違和感があった。宗教団体と政治の関係についての扱いが、他局より、特にニュース番組で手薄だという印象を受けた。７月１１日（月）クローズアップ現代「安倍元首相銃撃　事件の“背景”に何が」では、そうした部分にも踏み込んでいたが、他局や新聞、海外のメディア等でも報じられていることをＮＨＫで取り上げていないことに歯がゆさを感じた。ＮＨＫのジャーナリズムが問われていると思う。一方で、慎重に調査報道をしていくのもＮＨＫらしさなので、長くきちんと検証していくという姿勢に期待している。国民にとって必要な情報は、タブーを考えずに発信していってほしい。

○　７月１２日(火)のクローズアップ現代「日本政治はどこへ　独自分析　参院選」を見た。自民党、日本維新の会が議席を伸ばす一方で、選挙を支えていた労働組合が揺れている現状と、無党派層の意識がかなり変化をしていることに焦点を当てて分析しており、見応えがあった。東北は自民一強で、小さい野党が取り巻いていく状況がしばらく続くという指摘が印象的だった。

○　７月１８日(月)のＤｅａｒにっぽん「祈りのチェロ 支える人々 ～ウクライナの母と娘～」を見た。避難先の日本でも音楽活動が続けられるように支える日本人の存在があり、自分ができる支援活動をしていることが印象的だった。美しいチェロの音色

とともにありのままの姿が描かれていた。こうした番組を親子で時事問題について考えるきっかけにしたいと感じた。ＮＨＫプラスで、番組を放送後に共有できることもよかった。

○　６月１２日(日)のランスマ倶楽部「福士加代子に学ぶ“楽しくラクに走るには？”」を見た。青森県板柳町出身の福士加代子さんが出演していて、「楽しくラクに走る」というテーマが印象的で、目の付けどころがよいと感じた。

○　７月１９日(火)のヒューマニエンス　４０億年のたくらみ「“言葉”それがヒトの思考を生んだ」を見た。ことばがヒトの進化を生み文明を築いてきたことを考古学者、言語学者、動物行動学者というアカデミックな視点のかけ合わせから解明しており興味深かった。意見の異なる研究者がスタジオで議論する様子も印象に残った。ただ、展開が早すぎて、少し難しく感じる部分もあった。研究の資料をそのまま映像で見せていたが、図やイラストに加工して分かりやすく説明するなどの工夫があってもよかった。織田裕二さんが司会ということもあって、生真面目過ぎる教育番組ではなく、エンターテイメントの側面もあり、バランスよく感じた。

○　出水期になってきたため、水害報道が増えてきたが、その関連で一つ気になったことがあった。現場への取材は急なことも多いと思うが、取材者の着ているレインジャケットのブランドロゴが目に付くことがあり、違和感がある。災害報道で時間の余裕がないことも分かるが、もう少し工夫できたのではないか。また、沖縄復帰５０年に関しては、さまざまな番組が作られていて見応えがあったが、日本共産党結党 100 年に関連した番組が放送されなかったのは残念だ。既存政党の歴史を振り返ることは難しいと思うが、新聞ではさまざまな報道がなされていた。現在制作中で、これから放送が予定されているのかもしれないが、もしそうなら、世間の関心が高いタイミングで放送してほしかった。

(なお、欠席の委員より、文書で次の意見が寄せられた)

○　７月１日(金)の東北ココから「限界集落住んでみた　秋田編」を見た。すでに定番番組と思えるような「限界集落シリーズ」の、さらにおもしろく、見やすくした「進化系」であったと感じた。以前だと、ただ風景を流していた場面に、バービーさんのツッコミが絶妙なタイミングで入り、楽しく見ることができた。番組ラストの、ドローンで空から撮影した田代地区を見ている住民の方の表情や声が、まるで子どものように晴れやかで、「これからも頑張らなきゃ」と言っていた声が印象に残った。

○　７月９日(土)伝説のコンサート「中森明菜スペシャル・ライブ１９８９　リマスター版」（総合 後 4:30～6:00）を見た。日本を代表するアーティストによる伝説を語るにふさわしいコンサート映像を最新技術の高画質映像で放送していたため、とても見応えがあった。明菜さんの若い綺麗な歌声とともに、時折映る観客の姿から懐かしい時代を思い出すひと時にもなった。歌番組はいろいろな形で放送されているが、この「伝説のコンサート」が最もおもしろい。これからも伝説と言われるのにふさわしいコンサートを放送してほしい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２２年６月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２３日(木)、ＮＨＫ仙台放送局（ウェブ開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、東北ココから「消滅集落に暮らす」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告、視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長　南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）
松沢　卓生（株式会社浄法寺漆産業　代表取締役）
宮川　宏　（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜東北ココから「消滅集落に暮らす」　(総合　６月３日(金)放送)について＞

○　物が増え情報が氾濫する中で暮らすということが本当の幸せなのか、何か大切なものを見失っているのではないかと、秋田県八峰町に移住した木村さんとその家族の生き方を通して考えさせられた。長期の密着取材だったが、スタッフの問いかけに対する家族の反応や表情がとても自然で、信頼関係が築かれていたと感じた。一方で、消滅集落に流れる時間の豊かさがもう少し伝わればよかった。時間の流れる感覚は、テレビの前で見ている私たちとはきっと違うと思う。何げない会話や風景、ゆったりと流れる時間の豊かさをより感じたかった。

○　春夏秋冬の景色が美しく、北東北ならではの森や木の雰囲気、白神山地の里山のすばらしさを堪能した。木村さんの農作業や食卓の様子から、ご家族の素朴な感じが伝わってきた。ただ、地域の方があまり番組に出てこなかった印象があり、移住当初は１人だった木村さんの、月日とともに周りとの付き合いが生まれていく過程や、家族

ができていった変遷、外部とのつながりなども見てみたかった。また、画面右上のテロップの「消滅集落に暮らす」という文字の、「消」という字のさんずいの点と「ら」の字のデザインが３０秒ごとに変わる部分は、細かいところに工夫と遊び心があっていいなと思った。

○　ナレーションが少なく自然の音や生活音がメインで素朴な作りがよく、四季折々の景色もすばらしかった。特に、たくさんの蛍が飛んでいるシーンが印象的で、それだけでも十分に価値がある映像だった。番組の中で、木村さんが「お金がない」と不安を語っていたのを見て、自給自足ができる暮らしが本当の幸せなのかを考えさせられた。現代の暮らしと少しかけ離れているため、映像自体にインパクトがあり、最後まで興味を持って飽きずに見ることができたが、番組の終わり方があっさりしていたので、物足りなさも感じた。

○　お子さんの日々貴さんが、オタマジャクシやホタルをとったり、雪かき、稲刈りなど、最近では危ないと遠ざけられがちな刃物や、高いところでの作業などを大人と一緒にやっている暮らしがある一方で、学校という外の世界に日常的に接している。そうした中での親御さんの葛藤も丁寧に描かれていてすばらしい番組だった。残念だったのは、ナレーションで日々貴さんのことを「日々貴くん」と「くん」づけで呼んでいた部分。最近では、性別によって呼称を変えることは差別的であるからと、小学校でも「くん」と「さん」を呼び分けることは、ほぼなくなってきていることもあり、呼び分けることに意味があるのかを改めて考えてほしいと思った。実際、この呼び分けがつらくて学校に行けなかったという声を聞くこともある。意図しない差別で視聴者を傷つけて、すばらしい番組が損なわれてしまってはならないと思う。

○　映像の美しさにとても驚き、また大雪のシーンでは、自然の力強さを改めて感じた。番組導入の「確かなもの」というワードにとても興味が湧いたが、この家族の強みや目指すもの、確かなもののために変化し続け模索していることが伝わってきた。お金の悩みをそのまま伝えている点もリアルで身近に感じることができた。

○　音が印象的で、木村さんの朴とつとした語りとピアニカの音とが相まって、ありのままの空気感が伝わってきた。また、自給自足のすばらしさだけではなく、お金のこと、子どもの将来のことなど悩みや葛藤をリアルに伝えていたのがよかった。また、家族以外の関係性も大事にしている姿も見たいと感じた。消滅集落や限界集落についての番組を東北から伝えることは意義深いと思うが、田舎暮らしを丁寧に伝えるものになりがちで、視聴者は自分たちからは遠いものだと感じてしまう。現実には、古きよき田舎像にプラスアルファの工夫をして生活している人たちがいて、課題はあって

も、足元の豊かさも味わって変化する環境を楽しんでいる。こうした暮らし方を伝えて、これなら限界集落暮らしや、東北に帰ることもよいかもしれないと、次世代の希望になる番組を作ってほしい。

○　少子高齢化により消滅集落が増えると予測されている日本で、消滅集落の課題を知ることができ、かつ考えることにつながる番組だった。季節の移り変わりの映像がとてもきれいで時間が短く感じた。子どもの表情の変化で成長を感じられたことから、長期の継続取材だったことが伝わってきた。２人の子どもが映っていて、未来へつながるような温かいイメージが残った。この子どもたちは、どのような強みを持って生きていくのか、テレビを見たことがない場合、何か苦労することはないのかといったことが気になった。このテレビがきっかけで移住を考える人が増えると思うし、こういう人たちに寄り添う仕事を探す人も出てくるかもしれないという意味では、画期的な番組だったと思う。この生活を選んだ家族の、子どもの成長を含めた数年後を見てみたいし、彼らの感想なども聞いてみたい。

○　朽ちた家屋や美しく咲く桜、自然の映像など、本当に風の音が聞こえるようで、時間を丁寧に追いかけていると感じ、冒頭から引き込まれた。一方、木村さんが、特別な人という感じが強く出過ぎてしまっていて、少し共感できなかった部分もあり残念だった。木村さんのこだわりを見せつつ、心を寄せられる一面も出せればよかったのではないか。ところどころに素敵なことばがあふれていて、特にお子さんがご飯のお焦げの匂いをかいで「茶色の匂い」と表現していたが、都市部に暮らしている子どもたちからは出てこないことばだなと思った。

○　家族への取材を通じて、自分探しの旅と選択の自由を満喫する幸せの一方で、拭い去れない将来への不安や葛藤もさりげなく夫婦に語らせており、見応えのある構成だった。自給自足といっても、外部の社会と遮断することはできず、子どもの学校や生活物資の購入など経済的なゆとりは必要で、お金と自活のはざまで悩む姿から、時代や環境の制約の中で選択の自由をどう折り合わせるかということでもあると思った。番組最後の「春の訪れとともに、手探りで暮らす一年が始まる」というナレーションにより、自分探しとは手探りの繰り返しだということが伝わってきたが、都会で暮らす私たちも手探りで暮らしているので、どこに住もうが本企画の底流にある自分探しの旅は同じだと感じた。

○　「確かなものを求めて」ということばが印象的で、木村さんの生き方から感じたものはこのひと言に尽きた。都会で新しいものを追い求め消費する毎日より、田舎で丁寧に暮らす日々のほうがクリエイティブだと思った。子どもたちが自然の中でのびの

びと育つ姿から、生きる力やたくましさも感じた。金銭面での不安があり、現実的な問題をどう解決していくかを含め、この家族のこれからも観てみたいと思った。風景だけでなく、家族の表情などすてきな映像で、ＢＧＭも美しく効果的だった。ＳＤＧｓや多様な生き方を尊重する時代の流れや、子どもの教育なども含めさまざまな視点で観ることができ「消滅集落に暮らす」というタイトルからくるネガティブな印象とは全く違うものになっていた。

（ＮＨＫ側）

この企画の撮影を始めたのは去年の５月頃で、夕方のニュース番組の企画として立ち上げた。震災やコロナ、ウクライナの戦争など、当たり前の日常が簡単にひっくり返ってしまう中で、確かな暮らし、豊かさとは何かを、いま一度考えてもらえる番組を作れたらと制作にあたった。少子高齢化に悩む地域にとって、お子さんを含めた木村さん一家の暮らしを見ることが、ある種の希望の光にもなると思った。お金のことも含めリアリティにこだわり、また、インタビューを大切に、できる限りナレーションを減らして、淡々と一家の暮らしを描いた。時間の豊かさがもっと伝わるとよいという指摘については、できる限りの工夫をしたつもりだが、今後は、時間の流れの描き方をより大事にしていきたい。また、地域の方や外部の方々とのつながりの部分は、地域のニュースで放送したときには紹介していたが、詰め込み過ぎないことを大切にしていたので、この家族の物語をミニマムに描き切るというところにこだわり、今回は落とさざるを得なかった。今後の番組展開ではきちんと描くことで、よりリアルな姿を出したいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　５月２１日(土)に再放送された東北ココから「春ル物ノ語リ　仙台・リサイクルプラザ」を見た。リサイクルは単なる物の循環ではなく、使った人の思いも受け継がれるということが伝わってくる、ほのぼのとした味わいのある番組だった。「東北ココから」は、硬軟問わず自由に番組作りに挑戦できる枠だと感じた。ただ、タイトルで「春」の後に「ル」を入れたのはなぜか分からず少し違和感を覚えた。タイトルは非常に重要なので、読ませたいのならばルビを振ってほしいと思った。作り手の思いが伝わらず残念に感じた。

○　６月１７日(金)の東北ココから「“見えない”被災　～震度６強地震から３か月～」を見た。記憶が風化してしまいがちな災害を忘れないという意味でも非常に貴重な番組だった。粘り強く、被災の後も状況を伝え続ける姿勢は大切だと思う。災害ケースマネジメントについて詳しく取り上げていたが、情報量が多かったため、視聴者に伝わったのか、少し不安になった。福島県の浜通りや宮城の県南などの災害が多い地域は、防災の先進地でもあるので、これからもさまざまな知見を東北から全国に発信してもらいたい。

○　６月１７日(金)の東北ココからを見た。多重被災の課題を取り上げた番組で、取材にあたった津田喜章アナウンサーの被災地のリアルな現状を伝えたいという強い思いが感じられた。あまり表立って報道されていない深刻な課題を伝えており、着眼点がすばらしい。被害の実態を全国の皆さんに知ってほしいという力強いコメントがとても印象的だった。相馬市で旅館業をしている男性が多重被災を絶望的だといっていたが、諦めずに再起を目指している姿がとても輝いて見えた。

○　６月１７日(金)の東北ココからを見た。震度６強で、場所によっては東日本大震災の時よりも揺れた地震だったが、その被害の大きさが伝わっていないというギャップを感じながら見た。旅館や企業が被災したケース、また、自宅が被災にあった場合の問題点がよく分かった。国の助成制度が拡充されたことについての情報がもっとあるとよかった。

○　６月１７日(金)の東北ココからを見た。東日本大震災以降、自然災害が相次ぎ、地震被害の大きさの想像がつく視聴者にとっても、今回の企画は、表面に現れない震災被害の仕組みとして被災者支援の盲点に気づかされた。「“見えない”被災」というネーミングは秀逸であり、番組内容を的確に表現していた。支援から漏れた人は世間一般から見えず、置き去りにされ、心まで萎えてしまうため、その実態を変えるには、社会から見えていないものを見えるように仕向けていくことが救済への道を開くことになると思う。スタジオの東北大学災害科学国際研究所の定池祐季さんによる被災対策の現状や課題、解決の方法に関する示唆は、実体験に裏づけられており論理的で説得力があった。最後のシーンでは、相次ぐ被災に打ちのめされてもたくましく生きようとする被災者の姿に感銘を受けた。見えない社会課題を見える化し、広く知らしめる、公共メディアであるＮＨＫの報道において、大切な論点だと思った。

○　６月１７日(金) のきんよる秋田「あきた鉄道出会い旅 奥羽本線“南側”編」を見た。松井大アナウンサーとディレクターの若手コンビに好感が持て、軽快なテンポで旅をする中での偶然の出会いを楽しむスタイルで、楽しく視聴しながら新しい秋田を

知ることができた。

○　６月１７日(金)の発見！あおもり深世界「出張！ナノコエ～あなたの小さな疑問に答えます～　＃０５」を見た。学生の悩みを地域ぐるみで解決していく番組だったが、住んでいる地域以外の大学のことを知る機会が少ないためとても新鮮に感じた。学生の悩みを地域で解決する形は、新しい視点から地域と大学をつなぐ試みのようにも見えて、とてもよかった。ただ、番組の最後で温泉のつかり方を３つのポイントで紹介する部分があったが、もう少し情報量がほしかった。

○　６月７日(火)のいいいじゅー！！「静岡・静岡市」を見た。ワサビ農家になるために埼玉から移住した人の考え方がとてもすてきだった。閉鎖的な地域になじむため積極的に交流をはかる姿はポジティブで、番組を見ているだけで元気になった。農業には定年がなく、技術や知識を重ね自分を磨き続けることができる職業だと言っており、こういう考え方をする人が増えると、これからの農業の在り方も変わると思う。農業に希望を感じた。

○　６月１０日(金)のドキュメント７２時間「絵本専門店 わたしの物語」を見た。時間をかけて丁寧にカメラを回すからこそ見える、本質的な魅力が伝わってくる番組だった。さまざまな人の視点から絵本の魅力や奥深さを掘り下げており、絵本は、人生に彩りを与えたり、世界を広げたり、時には人生のお守りになるものだと、改めて実感した。また、番組を見てこの絵本を知りたい、購入してみたいという人も多かったようで、一つの番組が多くの人の人生に影響を与えているということに、番組作りの力を感じた。

○　６月１０日(金)のドキュメント７２時間を見た。この番組は、毎回どのような人が映し出されるのかを楽しみにしている。今回は、自分が子どものころに読んだ思い出の絵本や、子どもが生まれてから読ませたいとセレクトした絵本などが登場し、どのような人がどういう思いでこのお店を訪れているのか気になった。読み聞かせのシーンで「わたしはあかねこ」という絵本を選んだ男性から「自分も存在していいんだ」とのコメントがあり、その瞬間、カメラが引き、体全体が映されると、車イスに乗っている姿が目に飛び込んできてドキッとした。ほかにもさまざまな背景のストーリーが展開されるが、７２時間という限定された中でこれだけ凝縮した内容を短い取材で表現できることに改めて感心した。

○　６月２０日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「砂漠の英雄と百年の悲劇」は、アラビアのロレンスから始まる歴史の連鎖を取り上げていた。砂漠の英雄というイ

メージと、実際には裏切り者として後悔し続け生涯を終えたロレンスの苦悩とのギャップに驚かされた。この番組では、悲劇の連鎖、事件や犯罪の連鎖などが紹介されていて、一連の流れの中で見ることができ、近現代史の世界史を楽しみながら学び直すのによい番組だと感じた。また、加古隆さんのテーマ曲も、歴史の波に翻弄される人間たちの姿を音楽で表わしているようで、聴くたびに胸に迫るものがある。

○　６月２１日(火)のクローズアップ現代「いま音楽ができること桑田佳祐６６歳“同級生”と平和を歌う」を見て、「一人ではできないけれども、みんなであればできる」という歌手の桑田佳祐さんのことばが印象的だった。曲が完成するまでの背景を丁寧に紹介しており、とてもよい内容だった。ライブなどはコロナ禍で不要不急とされていたが、今回の番組で、音楽は必要だということを再確認することができた。

○　６月１７日(金)のあしたも晴れ！人生レシピ「喫茶店の魅力　再発見！」を見た。東日本大震災で亡くなった店主の代わりに縁もゆかりもない人が店を引き継ぐなど、喫茶店とはいえそこにはたくさんの歴史があり、多くのドラマが生まれていた。前店主のこだわりをきちんと守りつつ新しいことも取り入れていくエピソードにとても感動した。交流を持てることも喫茶店のよさなので、コロナが終息し喫茶店でまた誰かと気兼ねなくお茶をすることができる世の中に戻ってほしいと思った。

○　６月２０日(月)の第６４回ＮＨＫ杯東北高校サッカー選手権男子決勝「青森山田」対「花巻東」（Ｅﾃﾚ 後 1:05～2:50）を見た。実況のアナウンサーが「この子は生徒会長なんですよね」などと紹介しており、ほほえましく、もっとそういう話をしてほしいと思った。ＮＨＫ杯は人気競技の中継が多い気がするが、マイナー競技に取り組む生徒もこのような東北ブロックの大会が最後の大会になることもあるので、メジャーな競技だけではなく、短い時間でもいいのでほかの競技も放送してほしい。東北大会に出場してテレビに映ることが、その生徒の人生を左右する出来事になる可能性もあるので、東北の放送枠を使って、“ＮＨＫが頑張る高校生を応援する”という試みもあるとよいと思った。

○　６月１０日(金)の新本風土記「気仙沼」は、気仙沼ならではの、海を切り口にした番組だった。女性漁師や外国人の船員、豊漁を願う女性神主、そして漁で昔にぎわった飲食店街など、地元のつながりや雰囲気を感じることができておもしろかった。

○　４月から始まったラジオ番組のＮａｎｄａｒｙを聴いた。「ろっけんさん」のコーナーでは、東北の多様な方々の存在や活動に触れることができて刺激をもらっている。パーソナリティの千葉美乃梨アナウンサーの声も聞きやすくて心地よい。今後も、番

組タイトルの元となった、なんでもかんでものことばどおり、多様な分野の方の出演を期待している。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２２年５月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ仙台放送局（ウェブ開催）において、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、東北ココから「「＃ともに生きる、ともに助かる。～誰もが助かる地域をめざして～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、「２０２１年度東北地方向け放送番組の種別ごとの放送時間」についての報告、放送番組モニター報告、視聴者意向報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長　南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
永井　温子（株式会社Ridun　代表取締役）
武田　靖子（株式会社ジョイン　専務取締役）
前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）
松沢　卓生（株式会社浄法寺漆産業　代表取締役）
宮川　宏　（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜放送番組一般について＞

○　タイトルに、みんなで助け合う社会や地域へという思いが表れていた。実際に届いた視聴者の声や意見を元に番組を制作しており、あまねく伝えたいという気概が伝わってきた。各地の具体的な事例や個別避難計画の実態などを幅広く取り上げており、障害を持つ人にとっての防災にはどのような課題があるかを問題提起するという意味で意義のある番組だった。一概に東北と言っても、郡部や都市部、規模も課題も全く異なるが、日頃から助け合える近所の仲間、信頼できる地域コミュニティを築いていくことは災害に限らず有用だと感じた。ともに生きるというテーマと向き合う番組作りを今後も継続してほしい。

○　障害のある息子さんを目の前で亡くされたお母さんの話が印象的で、障害のある方やその家族が支援を受けることをためらったり、遠慮していたりする現状を非常に重く受け止めた。個別避難計画は、一度作成したら終わりではなくアップデートし続けなければならないと思うが、その難しさや問題点にも少しふれてほしかった。山形県山辺町の、水害を受けて個別避難計画をチームで作成し、一人の支援者を決めるのではなく地域で携わるというのは、理想的な姿だと思った。ただ、水害などと地震では、実際の運用に違いが出るかもしれないので、地震とそれ以外の災害で分けて考えるべきではないかとも感じた。専門家の方が、地域の人がどんな支援を必要としているのか把握して、まずは挨拶する関係を築くことが大切だと言っていたが、あれだけの震災を経験し１１年たっても現状はまだその程度の段階でしかない、備えは依然として不十分で、やはり時間と意識の改革が必要だと感じ、こうした形の報道を続けてほしいと思った。

○　スタジオでの解説にテロップがなかったことや、講師の視線やことばに抑揚がないこともあり、内容があまり頭に入ってこなかった。講師にはもう少し自分のことばに感情を込めてほしかった。岩手県久慈市の個別避難計画で、住民のニーズを一軒ずつ聞き取り把握することはとてもよい計画だと思ったが、労力や人員不足の問題もあると感じ、関わる人が増えることや周囲の理解が進まないと難しい部分も多いと思った。一方、山形県山辺町の個別避難計画は役所とも連携し綿密に計画が練られており、番組を通して地域による違いについて理解が深まった。地域との関わりの大切さを実感するとともに、障害者が遠慮せず周りに助けを求められる世の中にするためにはどうしたらよいか、一人の視聴者として考えさせられた。自治体にとってはヒントになるような番組だったのではないかと思う。

○　解説をしていた講師の話が頭に入らず、理解することが大変だった。個別避難計画ということばを初めて聞いたが、とても興味深く、自分の避難のことや近所で介助が必要になる人はいるのかなど考えるきっかけになった。障害のある人の、助けを求めることが難しい、周りに迷惑をかけたくないという声などは防災というテーマだけにとどまらず、教育やコミュニケーションなどの課題が複雑に絡み合ったとても難しい問題だと感じた。個別避難計画の策定に地域差があるということだったが、どのような違いによるものなのか知りたかった。

○　障害のある人の日常がいかに困難かということなど日頃触れることのない情報があふれておりとても勉強になった。障害者や支える家族の、迷惑だからと助けを呼べない現状などを知り、難しい問題だと思った。個別避難計画は、マンパワーや時間も

かかり複雑な事情も絡むが、市町村が主導となる取り組みに、できる・できないの不平等があってはいけないと思う。スタジオの場面では、講師の解説が分かりにくい部分があり、多くの視聴者にとって分かりやすい番組だったのか少し心配になった。いろいろなアニメーションやイラストをうまく使う工夫があったので、そこをもう一歩力を入れるとより分かりやすくなったのではと感じた。

○　あらゆる差別や人権の問題は、突き詰めれば命の問題だと改めて感じる、とても大切なテーマを扱った番組だった。番組の中だけではなく、どの時間帯で放送するか、あるいはテレビだけではなく動画サイトも使うなどたくさんの人に見てもらう工夫をし、社会の欠点をどれだけの人に気づかせることができたかが大切なため、この番組がどれほどの人に見られたか気になった。私たちに思慮が足りなかったことやしっかりとした対策を行っていなかったことで、東日本大震災によって多くの障害者が亡くなったという事実をもっと伝えてもよかったと思いつつ、そうすることで視聴者が嫌がる可能性もあるため、そのさじ加減が難しかったと感じた。また、必ずしも当事者が番組を制作すればよいという問題ではないが、制作過程でどのように当事者が関わっていたかも大切だと思った。

○　岩手･宮城･福島の３県で障害のある方が１，７３２人亡くなられたということは、今まであまり聞いたことがなく、衝撃的な数字だと感じた。弱い立場にある方をどう救えばよいのか、特に「津波てんでんこ」という考え方が難しい場合はどうすればよいのかということを考えさせられた。例えば、助けてもらう方も負い目や引け目を感じることがあるだろうし、助けに行く方も自らも被災者で自宅や家族のことが気になるなど課題がある。また、日中に地域にいる民生委員や住民の方は高齢者が多く負担も大きいと感じた。災害時には自助・共助・公助で連携することで被害を抑えていくが、地域の方々による共助がうまく働かないときは行政による公助しかない。しかし、公務員不足や業務の過多が深刻な中、緊急時に公助が十分に機能するのかも心配だ。誰も取り残さないという考えは、ＳＤＧｓでも課題となっているが、防災には二重三重のバックアップが必要で、ハンディキャップのある方を優先的に救う、プライオリティを高めるような考えが取れればよいと感じた。さらに、東北以外の地域や海外、北欧など福祉が充実しているところの対策も見てみたい、より詳しく専門家の話も聞いてみたいテーマだった。

○　障害者は避難行動そのものも心配だが、避難後の共同生活での周りとの不調和など、健常者から見ると思いもつかないことを心配事として持っている。番組で紹介された障害者や親のコメントはとても現実的で、貴重な声を集めて広く知らしめていた。また、オーダーメイドのきめ細かな対応は自治体がどんなに頑張っても限界がある。自

助・共助でも届かない部分がある。誰が助けるということではなくて、どうすれば助けられるかという視点で環境作りをするということ、その入り口として、近隣同士が顔見知りで挨拶、会話ができる関係になることは防災活動であり、助け合いの原点として大切なことだと思う。今回は社会的弱者の避難問題が主たるテーマだったが、“弱者”の目線から見つめることで、障害者の個別ニーズの多様性、支援者側の高齢化、自治体の支援能力の限界、コミュニティの復活の重要性など日本社会の抱える構造的な課題も併せて指摘していて、幅広い問題提起につながる本当に秀逸な番組だったと思う。

○　障害のある方やその家族が「足手まといになるからＳＯＳが出せない」という現状や、国が避難計画の策定を自治体に求めただけではまだ課題が残っているということが非常によく分かった。避難所に行く選択肢が最初からないという方がいることにも驚いたが、講師の解説で「まずは現状を知り挨拶を交わすだけでもいい」という言葉が印象的だった。多くの視聴者が、自分にも出来ることを感じることができたのではないかと思った。継続取材をして、対応が進んでいるのかどうかを知りたいし、当事者ではなくても、今から準備できることも知っていきたいと感じた。一方、スタジオの説明が分かりにくい部分もあったので、フリップなどを使うなど映像的な工夫もあればよかった。

○　番組の冒頭で、自分で避難できずに亡くなられた障害のある方が１，７３２人もいたと知り衝撃だったが、障害者の置かれた状況がよく伝わってきた。また、番組内でイラストを使って避難する様子を伝えたことも分かりやすくてよかった。自助・共助・公助の観点から見ると、久慈市の個別避難計画は公助の色が少し強過ぎると感じたが、山辺町のほうは公助と共助がうまく働いていた。さらに、当事者とご家族もガソリン１０リットルの携行缶を買い停電に備えるなど自助の部分もしっかりしていた。やはり、公助・自助・共助のハイブリッドが大切なのだと改めて思った。ただ、障害のある方の中には、簡単に顔を合わせて挨拶をする関係を持つこと自体も難しい方もいるかもしれない。そう考えたときに、助けたいと手を差し伸べればいつでも握り返してくれるわけでもない、簡単な話ではないのだなと思った。このような問題にどのように向き合っていくべきか、考える機会を作ってもらった。

（ＮＨＫ側）

番組を制作したきっかけは、寄せられた視聴者の意見で、災害時の避難について福祉施設も危機感を持っているという声があったことだ。当時避難をした人の証言を集めてみると、いまだに支援をしてくれる人が見つからない、支援を頼みづらい状

況は変わっていないという不安を訴える声が多かった。災害時に障害者も健常者も、ともに助かるためには何をしていくべきか、今回の番組が少しでもそのヒントになり、社会全体で関心を持つきっかけになってほしかった。スタジオの場面に関する指摘があったが、講師が緊張してしまったというよりは、私たちがオーダーをしたことで、先生にご苦労をかけてしまい、今回の指摘につながっていると反省をしている。複雑な話の場合は、補助的にテロップをいれたり、モニターを使用し仕組みを説明する演出を行うことで、理解を促進する工夫をしてもよかったと思った。当事者でない私たちが制作する難しさは感じており、何が正解か分からないが、いろいろな立場で意見をぶつけ合いながら制作した。目の前に津波が迫ったとき、ともに避難することができるのかは分からないが、日頃から関係を作り、いざというときに一人でも多くの命を救うことにつなげていくことが大切だと思っている。公共放送として、こういうテーマをきちんと定期的に伝えていくことが大切だと改めて勉強させていただいた。

＜放送番組一般について＞

○　４月１６日(土)、５月１４日(土)の「Ｉｗａｔｅｅｎ」を見た。岩手の１０代に届ける番組ということで、若者でも１０代に絞っているのが特徴的だ。「いわてミライビト」というコーナーでは、社会に出て間もない若者たちが、悩みを抱えつつも周りのサポートを受けて自分の仕事に自信を持ち日々成長している様子を、ほっこりとした気持ちで見ることができて応援したくなった。１０分程度の短い時間で地方の等身大の若者の姿を飾らずありのまま見せる手法は、若い視聴者には受け入れられやすく、悩んでいるのは自分だけではないとか、こんな仕事があるんだ、などの気づきを得られるのではないかと思う。今後も岩手ならではの思い切った切り口で取材をして、岩手で頑張っている若者の姿をもっと紹介してほしい。１０代向けらしく独創的な番組作りをしてほしいと思う。

○　４月２２日(金)の東北ココから「あなたの町の映像アルバム～秋田・山形編～」を見た。それぞれの思い出を懐かしく語り合う映像つきの座談会のような形で、人の記憶や感性に訴える映像の力を改めて実感した。映像は珍しいものではなく、町がにぎやかだった頃から現在に至る生活の断片を拾い集めたものだが、住民の皆さんと見る

ことで、日常に刻み込まれた記憶が自然に言葉となって会話が積み重なることで、変遷するまちの姿や、人々の生活ぶりの輪郭が見えてくる、大変うまい構成だった。懐かしそうに楽しく語り合う姿を見てほほ笑ましく感じ、自分に重ね合わせて故郷を思い出す機会になると思った。ＮＨＫに蓄積されてきた多種多様な映像は、いろいろな種類の番組を作り得ると感じた。

○　４月２２日(金)の東北ココからを見た。阿仁鉱山が栄えていた様子や、マタギが熊を狩る映像などは今はなかなか見ることができないし、鼠ヶ関に水族館があったことも知らなかった。昔の映像を見た人に、当時の人や場所の記憶を瞬時に思い起こさせる映像の持つ力にいつも驚いている。ただ、年配の方に懐かしく思い出を語ってもらうだけではなく、様々な年代の人が見て語り合うなど、当時を知らない人が見て地域のことを再発見するなどの手法があってもよいのかなとも思う。ＮＨＫの所有するアーカイブスの活用方法にはまだまだ可能性があると感じた。

○　５月７日(土)のＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」を見て、日本の若者の精神的な幸福度が下から２番目という現実にとても驚いた。なぜ幸福度が低いのかと考えたときに、私自身も幸せなはずなのに、本当に幸せと思えないときもあり、自己肯定感が低いと感じている。共有体験や、プロセスが大切だとキーワードが何度も出ており、それに関しては大人も子ども同じだと思った。

○　５月８日(日)のＮＨＫスペシャル「ヤングケアラー　ＳＯＳなき若者の叫び」を見た。ヤングケアラーという社会の大きなテーマに寄り添うように描いていたすばらしい番組だった。よい意味とよくない意味で、ＮＨＫらしいと感じた点があった。よい点は、時間をかけて丁寧で多角的に取材し、「私たちの周りにも声を上げられないヤングケアラーがきっといる」というメッセージを、見ている側に強く印象づけることができていたこと。社会が見落としがちなことを、しっかり取り上げ問題提起するということは、ＮＨＫならではの強みでありよさだと思う。一方、「ＮＨＫスペシャル」に限らずＮＨＫの報道ドキュメンタリー番組全般において、国に甘過ぎると頻繁に感じる。ヤングケアラーの問題は、国、政府の失敗だと私は思う。国が、自助や共助を強調し過ぎた結果、家庭に依存した福祉のひずみがヤングケアラーという問題につながっており、中高生が未来を描けなくなっている。今回の番組も、国が失敗しているということを、識者のことばも使いながらしっかり伝えてもよかったと思う。ヤングケアラーの問題をとても丁寧に扱っていたので、今度はそれをどうローカライズしていくかということを、東北の各局に期待したい。

○　５月２日(月)のクローズアップ現代「アスリート“心のＳＯＳ”トップ選手に何が？」

を見た。アスリートには強じんな精神力を持って勝利をつかみ取るイメージがあるが、そのメンタルヘルスが世界的な危機となっている事実に驚いた。背景のひとつであるＳＮＳによる誹謗中傷では、東京オリンピックの分析調査が非常に興味深かった。誹謗中傷の６０％は、投稿者が「俺の中でこうあるべき」と悪意なく自分の価値観を押しつけ正義を振りかざす時に最も攻撃的になるという専門家の説明に、ネット社会の課題を改めて認識した。一般人の心の病でもおおよそ共通の内容なのだろうと興味深く見た。

○　５月３日(火)の病院ラジオ「神経病院編」を見た。初めて聞く病名の人が多く、お笑い芸人のサンドウィッチマンさんの病名を聞くたびにメモを取る姿にとても好感が持て、話しやすい雰囲気を作り上げている点はさすがだと感じた。一人一人の話を聞きながら、気持ちに寄り添うコメントをしつつ進行しており、それぞれの思いを引き出す力がうまいと感じた。また、５月６日(金)の「君の声が聴きたい」プロジェクトグランドオープニング「声、ひらく未来」（総合 7:30～8:00）を見た。アーティストの星野源さんが「生きているだけで僕たちは何かをつくっている」ということばに救われる気持ちになった。番組後半の、音楽ユニットＹＯＡＳＯＢＩさんと星野さんのスペシャルライブがとても凝っており引き込まれた。若者が、この企画に参加する番組に対して、関心を向けるきっかけになるオープニングだったと思う。

○　５月１０日(火)のクローズアップ現代「女らしく…って言わないで！声を上げ始めた若者たち」は、若者が何を求めているかを、とても分かりやすく伝えていた。タレントの ryuchell さんも自身の経験から、「結論として自分を強くもって生きたほうが楽だ」とコメントしていたが、苦しみながら生きている人たちがいることを、校則や教育から徐々に変えようという動きを分かりやすく取り上げていた。関心がある、なしの意識の二極化や、世代間のギャップを埋めるために、今後も若者目線の番組を作ってほしい。また、Ｅテレではなく総合テレビの「クローズアップ現代」で取り上げたところもよかった。

○　５月１１日(水)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「スヌーピー最後のメッセージ～連載５０年　作者の秘めた思い～」を見た。作者の負けず嫌いな性格や作品に込められた思いなどを知ることができた。グッズのキャラクターとしてのスヌーピーは知っていても、作品としてしっかり知っている人は多くないのではと思った。作品のよさも再認識できるすてきな番組だった。　番組最後のメッセージが、失敗しても諦めないという内容だったが、失敗や葛藤をどう乗り越えるかと諦めないことは、やや性質が違うと思い、若干違和感を覚えた。俳優の濱田岳さんのナレーションが番組の内容ととてもマッチしていたので、最初から最後までわくわくしながら見ること

ができた。

○　「阿佐ヶ谷アパートメント」を楽しんで見ている。全体を通して、お笑いコンビの阿佐ヶ谷姉妹が進行を務めるため、肩肘張らずに見ることができている。自然に多様性や価値観、個性に触れることができ、柔らかい雰囲気で多様性をシェアし合うような試みは、若い世代にも訴求する企画だと思う。一方で、若者が夜１１時台にテレビを見ているのか分からないので、こういうタイプの番組も広く見てもらうような工夫をさらにしていってもよいと思う。

○　５月２日(月)の「ふたりのウルトラマン　沖縄本土復帰５０年　ドキュメンタリードラマ」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:29）をウルトラマンをリアルタイムで見ていた世代として楽しんで見た。金城を演じたのが沖縄出身の俳優・満島真之介さんで、時代に翻弄され徐々に精神的に不安定になっていき陽から陰と移っていくさまを熱演していて適役だった。また、脇を固める実力のある俳優たちの魅力も光っており、ドラマとして非常に見応えがあった。番組のホームページも充実しており、当時のことを知ることが出来てよかった。彼が書いたウルトラマンシリーズが今なお再放送されたり、資料室となった沖縄の書斎を多くの人が訪れたりして、彼を通じて沖縄の問題に関心を持ったという方もいるのかなと思う。死後４６年たって、本土との架け橋となるという彼の志は実を結んだのではないかと感じた。

○　「ギョギョッとサカナ★スター」は楽しさと教養を併せ持つ番組で、家族も楽しんでいる。子どもも大人も楽しめるよう、細部まで意識し、丁寧に制作していると感じる。気づくと知識や愛着も増えているので、魚離れが続くと言われている今、多くの人にこの番組の魅力を知ってほしい。

○　４月２３日(土)のＢＳ１スペシャル「正義の行方～飯塚事件　３０年後の迷宮～」（ＢＳ１ 後 7:00～7:50、8:00～8:50、9:00～9:50）を見たが、とてもよい番組だった。この事件を取り上げたことに驚くと同時に、番組自体がもう少し話題になってもよいのではないかと思った。

○　４月２９日(金)の東北推し！「センバツ　夢の舞台で～只見高校と町民の４か月～」（ＢＳ１ 前 0:00～0:27）を見た。支えた町民との絆はすばらしく、負けているのに甲子園で１点取れて夢のようだと涙ぐむ応援団や、誇らしげに声援をおくる子どもたちの姿を見たときには、涙が出た。印象的だったのは、負けて帰ってきたキャプテンの顔が前よりもたくましくなっていたこと。人は経験で大きく成長できるということが分かる映像だった。子どもたちのスポーツ離れや、コロナ禍でやる気が出せない子ど

も、不登校の子どもも増えている。だからこそ、プロだけではなく子どもが身近に感じられるアマチュアの選手、高校生や地方で頑張る選手が輝く姿を取り上げる番組がもっとあればと思う。放送時間帯も夜中ではなく、子どもも見られる時間帯に放送してもらえたらと思った。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２２年４月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、前回の番組審議会での答申を受け「２０２２年度東北地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０２２年度東北地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。続いて、東北ココから「１１年ごしの　のど自慢」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長　南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）
松沢　卓生（株式会社浄法寺漆産業　代表取締役）
宮川　宏　（河北新報社　論説委員会委員長）

（主な発言）

＜放送番組一般について＞

○　１１年前と同じ日付、時間に始まったということで、とてもおもしろい手法だった。のど自慢に関わる方々の人間模様をオムニバス形式でうまく描き出していた。特に、１１年ごしの開催ということで、田村市の方たちにとっては悲願であり、記憶に残るイベントになったと思う。参加者の方などの、どのような思いをどのように表現するかは、企画構成の腕の見せどころだと思うが、とてもテンポよく構成され、凝縮された内容だった。練習してきたものと曲の長さが異なり何もできなかったダンスチームの悲劇、亡き夫を思いながら笑顔で未来へ向き合う女性の姿、定年を迎える市職員が裏方として場を盛り上げる郷土愛など、それぞれの思いや歩みをうまく描いていた。

特に、最後に出てきた青年のコメントが、今を前向きに生きることの大切さを伝えるメッセージだった。東日本大震災に関する鎮魂の話や、新型コロナウイルスによる自粛などは、心が沈みがちになってしまうが、そういうときこそ、祭りの要素、すなわち祝祭が必要だと思う。のど自慢も、単なる娯楽を越える祝祭性を持っており、それが長寿番組として支持される理由だと感じた。

○　田村市は、海に面しておらず津波の被害は受けていないが、都路と言われる地区は、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、全住民が避難を経験している地域であり、現在も市外や県外で暮らす人が大勢いる町だ。それと同時に、福島県の沿岸部から避難してきた人を受け入れており、複雑な状況にある。そういった背景を知っている人と、そうでない人の両方に伝える難しさがあったと思う。年々、東日本大震災の記憶の風化が急激なスピードで進んでおり、特徴をひと言で言うと、当時のことも現在のことも知らない人が増えている。制作に関わる人たちには、どうしたら多くの人に福島に関心を持ち続けてもらえるかを考えてもらい、これからもさまざまな形で伝えていってほしい。

○　取材された多くの人が強い思いを持っていることがまっすぐ伝わってくる構成で、さまざまな立場の人がいろいろなものを背負っていることを感じた。内容が充実しており、あっという間に感じる番組だった。一方、世代の偏りが少しあったように思う。１１年前のことをそこまで覚えていないような世代の子たちがどのように感じたのか、１１年ごしの開催という特別なイベントに対して、子どもと大人がコミュニケーションをとる場面もあったと思うので、そこから彼らがどんなことを感じたのかも知りたかった。

○　東日本大震災から１１年後の同じ日の同じ曜日に同じ会場で、一度は中止になったのど自慢が開催される、さらに、その会場が当時は避難所だったということで、番組の素材という観点だけから見ると、よい番組になる条件が揃っていると思った。のど自慢が長年愛されて、国民的な番組であり続けている理由の一つは、全国放送でテレビに出ることで人生で最大のスポットライトが当たる晴れの場であるということや、その人の人生と歌が深く結びついていることが、選曲や司会者とのやり取りを通じ、伝わってくることなどがあると思う。今回の場合、ふだんの放送では深く触れられることがない、予選会の出場者の人の思いをとても深く掘り下げており、歌の持つ力や歌と人の結びつきの強さが浮き彫りになった。歌は生きていくうえで、欠かせない存在で、時に人生を左右することもあるということが、今回の番組を通じてかいま見え、そういう意味も含めてとてもよかった。

○　舞台裏を含めてとても興味深く見た。応募はがきの紹介シーンで、地元の人がどういう思いで応募したかを聞くことができたが、もっと見たかった。のど自慢に出たいという思いを持っている人が多くおり、いろいろなエピソードがあることも伝わってきた。会場である体育館をめぐる思いも、それぞれの立場で紹介されており印象深かった。特に、避難所を運営されていた市職員の思いや、ボランティア活動をした青年の「ここは自分たちの成長できた場所である」ということばが印象に残った。「歌おう東北のど自慢」のエピソードで紹介されていたが、不便な生活をしている状況でも、誰かが歌い出すと楽しい場へと一変することがあり、それも歌や踊り、祭りの力によるものだと思った。

○　参加した１８０組のヒューマンドラマがあり、とりわけ今回は１１年前と同じ日付、曜日に、当時避難所だった体育館での開催ということで、多様性あふれる方々のストーリーや人生、選曲、仲間やコミュニティなど、その一部をかいま見させてもらった。東日本大震災やコロナ禍といった状況下で、一緒に挑戦することや、互いに助け合って尊敬し合う人と人との関係性、その思いやりのあり方がいかに大切かということが番組を通して伝わり、すばらしいと思った。一方で、番組を見た周囲の人たちから「やっぱり、のど自慢はいいよね」という感想を聞き、純粋にのど自慢として楽しんだ人も少なくないだろうと感じた。このような番組を作る際に、のど自慢と東日本大震災を、どのようなバランスにするかはとても難しいと思ったが、番組内で登場したチーフ・プロデューサーの思いをつづられているウェブ記事も見て、そういう発信のしかたもよいと思った。

○　田村市の皆さんの１１年前と同じ日、時間、場所で開催されるのど自慢にかける思いがひしひしと伝わってきた。当時のチーフ・プロデューサーが、１１年前を振り返るインタビューで涙を流していたのを見て、なみなみならぬ思いがあったということが伝わり、ぐっとくるものがあった。のど自慢に出場することが、自分以外の人を喜ばせたり、大切な友人と再会するきっかけになるなど、音楽がある場所には笑顔があると思った。画面からその人の人生や人柄を感じることができ、涙をこらえての２７分で、特別なのど自慢だったことが伝わってきた。尺の問題で多くの人をピックアップはできなかったと思うが、もう少しほかの人の話も聞きたかった。逆に、１１年前を思い出してしまうため、のど自慢自体、開催しないでほしいなど、反対意見の人もいたのではと思った。番組ではよい面しかくみ取ることができなかったので、本当の気持ちはどうなんだろうということも知りたかった。

○　誰もが知っているのど自慢の舞台裏ということで、おもしろそうだと思いながら見たが、思っていたよりも内容が濃く、すばらしい番組だった。もともとのど自慢は、

地域性を感じ、出る人も見る人も元気になるイメージだったが、この番組を見た後に、もっとのど自慢について知りたくなり調べると、第二次世界大戦の敗戦後、たった５か月で番組が始まっているという驚きの事実が分かり、今回も、戦後と状況は違うが、そのときと同じように、つらく苦しい思いをした人たちがチャレンジしてみようと笑顔で立ち上がったことや、それを支え応援する人の思いなどが、前向きなエネルギーとなって伝わってきた。のど自慢という番組の裏側も見ることができ、番組自体をとても身近に感じた。練習したことを本番で発揮できなかった出演者などを見て、毎回こういうドラマが起こっているということも知ることができた。

○　よい番組は、頭を空っぽにして見ても楽しめるもので、なおかつ田村市という性質などを考えてもまた深く楽しむことができた。さらにのど自慢というテーマは、ハードルが低く、多くの人に見てもらえるため、東北だけの放送ではもったいないと感じた。１８０組という予選の参加者それぞれに家族やコミュニティなどのバックグラウンドがあり、単に歌やダンスのうまい、下手ではなく、人生がかいま見られるというのは、まさに福島で開催されたからこそだと思った。また、改めて、のど自慢は地域の人たちにとって、一大イベントだということがよく理解できた。今回出場した方々にとって、被災地だからこその特別なモチベーションがあったと思うが、それがどういったものだったのか、もっと知りたいと思った。

(なお、欠席の委員より、文書で次の意見が寄せられた)

○　いろいろな個性を持った方々が歌を通して自分を表現し思いやメッセージを伝えることで生きざまが見え、短い出演時間の中に人間模様が味わえる番組だった。東日本大震災の直後で、開催できなかった田村市の皆さんにとっては、待ちに待った機会だったことは予想でき、東日本大震災を乗り越えて、この１１年の思いを発揮する場になったと思った。それぞれの境遇を追うことで、東日本大震災で何が起きたのかを改めて知るとともに、１１年という月日の長さを感じた。そして、予選に臨んだ人の姿から、本番への強い思いや緊張感が伝わり、私もドキドキしながら見た。偶然の結果だと思うが、さまざまな人がバランスよく番組に出演されていた。本番のステージに立てそうな人だけを選んでいたわけではないが、それでも１１年の思いを紡いだのど自慢だったことがよく分かった。このような形で東日本大震災を伝えることも大事だ。ピックアップされた出場者が、東日本大震災をきっかけに人間的にも大きく成長したと感じながら終わったのがよかった。

（ＮＨＫ側）

田村市という地域性と東日本大震災とのバランスについ

て、何も考えずに楽しめる番組にしたいという思いがあり、震災でどのような状況になったかなど、紹介はしていない。明るい前向きな気持ちの中にそれぞれ１１年という背景を抱えているということを込めたかった。予選会に参加したどの人もなみなみならぬ思いを持っており、できる限り多くの人に出てほしいと思った。参加者や関係者それぞれに、こののど自慢にかける思いがあり、その多様さは地域が持っている魅力だと思う。今後も、さまざまな個別のストーリーをすくい上げるような地域放送を出していきたいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　３月４日(金)の「あなたの“伴走曲”は何ですか？」(総合 後 7:30～8:30)を見た。伴走曲という切り口は着眼点が新鮮だった。「石巻復興節」の制作過程や、東日本大震災から１１年の今、歌う姿など、胸に迫るものがあり、曲の持つ力やそれぞれにまつわる物語に励まされ、涙し、命の尊さなどを感じさせる、すてきな番組だった。

○　３月５日(土)の被災地からの声　つぎの一歩「福島県大熊町」を見た。冒頭のアナウンサーのコメントがとても印象的で、覚悟というか強い気持ちが伝わってきた。町のほとんどが避難地域になっている福島県大熊町が舞台で、町で商売を始めた人や、町の外に住み続ける人、逆に町の外から新しく入ってきた人など、さまざまな人の視点から町の現状が伝えられた。９割の町民が帰還困難区域で、そういった中で町や故郷への愛着がどういう状況にあるのかを知りたいと思った。町へ帰りたいということだけが愛着を示す指標ではないと思うが、帰りたいと思う人の世代や傾向も気になった。

○　３月５日(土)印度カリー子の“みち”との遭遇「＃４　せり×スパイス」(総合 前 11:35～11:45)を見て、セリとスパイスを合わせたレシピが２つ紹介されたが、セリの香りを引き立てるものと、セリが苦手な人でも食べられるものと２種類あり、バランスがよかった。料理のレパートリーが少ないというのは、ふだん食べている青森の食材にも見られると思うので、身近なもので少し試してみようという気持ちになった。郷土料理のおいしさを伝えつつ新しいものを提案するという内容がとてもよかった。

○　３月１１日(金)の「あの日、何をしていましたか」(総合 後 2:05～2:32)を見た。一人一人のことばの重みを感じることができた。俳優の夏木マリさんや富田望生さんの

朗読を聞きながら、目を閉じてピアノの演奏と朗読だけに集中すると、ことば一つ一つが際立って聞こえた。朗読の間に、エピソードを寄せた本人が出演し、自分のことばで当時を語るなど、思い入れのある場所や当時のリアルな記憶を再現しており、過去と現在を結びつけているような構成がよかった。朗読のテンポがとても心地よく、私はあの日何をしていたかを一緒に振り返ることもできた。忘れてよいことも多くある中で、あの日を忘れないことで後世に伝えられることもあるのだなと感じた。悲しみがあふれる内容ではなく、今は幸せだよというような番組の終わり方で、悲しみだけを伝える形にならなくてよかった。２７分という放送時間でもとても重みがあった。

○　３月１１日(金)の東北ココから「「あの日」でつながる、子どもたち」(総合 後 8:00～8:42)を見た。東日本大震災の記憶を持ちながら大人の仲間入りを果たした年代の子どもたちに話を聞く、すばらしい視点の番組だった。身近にいる子どもたちと同年代の子どもたちが登場しており、ふだんは個人情報であるため、あまり根掘り葉掘り聞かない方がよいと思っていたが、どんなに若くてもさまざまな過去を背負っており、一部でもそれを知ることが、付き合っていくうえで大事になることもあると勉強になった。福島の故郷について、被災した人同士が初めて会って話をするというシーンで「私が復興に利用されているのでは」というようなセリフが出て、とても難しい問題だと思った。メディアの取り上げ方も考えないといけないと感じた。

○　４月１５日(金)の東北ココから「熱烈サポーター大集合！東北Ｊ２“ダービーマッチ”」を、サッカーにほとんど興味がない中で視聴してみた。よかったのは、最初にチームの紹介があった点で、Ｊ１から降格してきたチームやＪ２に昇格してきた岩手のチームなど、４つのチームがＪ２にいることが分かりやすく説明されていた。各県からの中継について、サポーターに付き添う各局のキャスターが目立ち過ぎると違和感が出るのではないかと思った。また、どれだけ個性的なサポーターに出演してもらえるかが番組を盛り上げるうえで大きなポイントになると感じた。

○　３月１１日(金)のＮＨＫスペシャル「被災の海　未来をどう築くか」(総合 後 10:00～10:59)は、水中映像や各研究者の調査内容を用いた解説が分かりやすく、海藻やアマモが津波を乗り越えて繁殖する方法などに驚き、東北の海で起きてきたことに関する理解が深まった。東日本大震災直後の２０１１年の水中映像も多く、経年で調査研究されていることを伝えて、その海を未来にどう残すかを考えるきっかけを提供するという、ＮＨＫだからこその役割を果たしている番組だった。私も秋田県の県魚でありながら未来に受け継ぐ課題を持っているハタハタに関する絵本を出版しているが、海の中で起きていることは、未知なることが多く、こうして番組にしてもらえると理解促進につながる。ＮＨＫは、ＳＤＧｓ関連番組を多く制作しているが、海の生態系

を含め、東北におけるさまざまなＳＤＧｓを次世代につなげていってほしい。

○　３月１２日(土)のＮＨＫスペシャル「あなたの家族は逃げられますか？～急増“津波浸水域”の高齢者施設～」(総合 後 9:00～9:54)を見て、昨年９月に東北地方向けに放送された東北ココから「浮かび上がる被災リスク　～高齢者施設 3800 の調査～」の全国版で、オープンデータを活用し、労力をかけて問題を掘り下げた優れた調査番組だと思った。東北ココからがきっかけで全国に調査対象を広げたのか、それとも全国で調査を進めていく中で、東北に焦点を当てることになり仙台放送局で東北ココからを制作したのか気になった。もし東北ココからが出発点になっていたとしたら、仙台放送局の深い問題意識が全国放送の番組に実を結んだという証だと思う。

○　３月１２日(土)のＮＨＫスペシャルを見て、高齢者の介護に生きがいを感じて働いている職員にとって、入所者を置いて逃げるという選択肢がないことや、施設経営の実情などがよく分かり、いろいろな苦悩があるということをうかがい知れる内容だった。また、番組で課題を浮き彫りにしただけではなく、既に課題解決のために動いている行政や地元住民の事例を紹介しており、これからの対策の参考になるよい番組だった。津波や地震のリスクとどう向き合っていくかは、優先順位として高いと思うが、日々の経済活動や暮らしに追われ、対応できていないこともあるので、このように課題の提示や解決策を紹介するような番組は今後も作り続けてほしい。

○　３月２日(水)の燃える闘魂　ラストスタンド～アントニオ猪木　病床からのメッセージ～(総合 後 7:30～8:15)を見て、とても衝撃を受けた。一つは、ＮＨＫがプロレスを取り上げたということ、もう一つは、番組プロデューサーが、アントニオ猪木さんの下で修業していた元プロレスラーだったということ。さらに、猪木さんがここ数年、病に侵されており一時は死のふちもさまよう状態だったことにも驚かされた。あえて病と闘い続けている姿を見せることで、見る人に何かを発信しているということがとてもよく伝わってきた。猪木さんのファンだけでない多くの人が、この番組から元気をもらったと思う。

○　３月６日(日)のサンドのお風呂いただきます「震災特番　岩手　三陸海岸ＳＰ」(総合 午後 4:45～5:58)を岩手県が舞台ということで、楽しみに見た。個人的にも思い入れのある、震災遺構として保存された、たろう観光ホテルが取り上げられた。たろう庵については展望風呂が紹介されており、とても見晴らしがよく、気持ちよさそうに感じた。一方で、海上保安庁の活動や、行方不明者の捜索活動などのリアルな話を聞くことができて、とても興味深かった。プロ野球選手の佐々木朗希選手が、キャンプ中の石垣島からリモートで出演されたのもよかった。岩手県から大投手が生まれて活

躍しているということ、地元民としても今後の活躍を期待したいし、佐々木選手の真面目で素朴な人柄も改めて感じることができた。番組を通して、若者にスポットを当てており、三陸出身の若者がそれぞれの立場で日々頑張っている様子が伝わってくるよい番組だった。

○　３月１２日(土)のありがとうを３．１１に伝えよう委員会(総合 5:10～5:59)を昨年に引き続き見た。昨年感謝状を受け取った人が、今年は自分が感謝状を送ろうということで、感謝の気持ちが広がっていく様子が伝わった。重い空気の番組が多い中で、肩肘張らずに見られる工夫が随所にあった見やすい内容だったが、昨年のほうが感動が多かった。また、東日本大震災に全く関係のない感謝状をやり取りするシーンがあったが、それは番組の趣旨から外れていると思った。

○　３月１５日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「ここが、私の居場所～社会起業家・川口加奈～」を見て、ホームレスの人にフォーカスを当てたり、ふだんなかなか見ることができない現場を取り上げたりすることが、ＮＨＫの存在意義の一つであると感じさせられた。番組では、川口さんが無条件で支えると話しており、それを体現する姿、生きざまとも言うべきあり方にとても感銘を受けた。何度も足を運び、安心感を持ってもらえるよう丁寧に取材し成り立った番組であろうことも随所に伝わってきた。「プロフェッショナル　仕事の流儀」は、レギュラー放送としては今回が最終回だったが、これからも、こうしたすばらしい活動を伝え続けてくれることを期待している。

○　４月１０日(日)の香川照之の昆虫すごいＺ！「エゾゼミ」を見た。放送時間が日曜日の午後６時５分からなので、家族そろって見やすい時間帯だった。放送回数を重ねるごとに、俳優の香川照之さんがふんするカマキリ先生の網や双眼鏡などの採集グッズが改良されており、番組スタッフとカマキリ先生の熱意が画面からひしひしと感じられた。番組で流れる音楽がとても印象的で毎回絶妙にテーマと情景にマッチしており、そちらも楽しみだ。香川さんの解説が絶妙で、話を聞いているだけでとても引き込まれた。

○　４月１５日(金)のセンバツ　夢の舞台で～只見高校と町民の４か月～(総合 後 7:30～7:57)を見た。只見高校は福島県立の高校で、２１世紀枠で今回選抜高校野球大会に初出場し町民はもちろん県民を強く勇気づけた。高校生たちのスポーツの力が伝わってきて、涙なしでは見られない大変よい番組だった。番組の尺が長ければ、より深掘りできたと感じる部分もあったが、町や県で語り継がれるような物語をじっくり見させてもらい感謝している。こうした過疎地は、ＮＨＫの放送局からも遠い場所にある

ため、ロケに行くだけでも大変だと思うが、引き続きこのような番組を作っていってほしい。

○　４月１５日(金)のドキュメント７２時間「宮城・生花店　あなたを思う春に」を見た。３月１０日から１２日までの３日間、花を買いに来る人たちの思いを聞いた番組で、花が画面を彩ってきれいなだけではなく、現在も心に深い傷を抱えている人や、行方不明の親を思う娘さんの話など、胸に迫るよい内容だった。中でも印象的だったのは、番組の後半に登場する教師のエピソードで、とても胸に響いた。花を選ぶということは、贈る相手や、しのぶ人のことを思い描くというとても大切な行為であるということを、この番組を通じて強く感じた。

○　４月１８日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「ベルリンの壁崩壊　宰相メルケルの誕生」は、期待どおりの内容でおもしろかった。パイロット版は、ベルリンの壁の崩壊が宇宙飛行士の山崎直子さんの宇宙旅行につながったという予想外の展開だったが、今回はテーマを一つ一つ丁寧に掘り下げていた。番組は音楽もキーコンテンツになっており、その音楽が流れる場面がとても印象的で胸に刺さった。

○　３月３日(木)のバリバラ水平社宣言１００年(１)「人間は尊敬すべきものだ」を見た。水平社宣言の価値や限界について言及していたが、水平社宣言という日本が誇るべき宣言を現在に生かそうという、思いに満ちたとても優れた番組構成で、さすが「バリバラ」だと感銘を受けた。この宣言の起草に関わった社会運動家の平野小剣は福島市の出身ということもあり、人権獲得運動の重要性というのは、東北でももっと知られてほしい。差別の問題をタブーにするのではなく、差別と闘い、社会を自分たちの力でよりよくしてきた先人たちから学ぶ番組こそ、いま求められていると感じた。

○　４月６日(水)の魔改造の夜技術者養成学校(１)「扇風機５０ｍ走から学ぶ」は、優勝チームのリーダーを通して、リーダーシップのコツを学ぶ教育編で、とても参考になった。番組の最後に「誇り高きマッドなエンジニア」ということばがあったが、日本の競争力再生には、狂気を帯びたエンジニアが必要だというＮＨＫからのメッセージではないかと思った。日本の現場リーダーのすばらしさを伝える良質の企画だったが、東北にも優秀な現場のリーダーがいるので、これからもそういう人に光を当ててほしい。

○　３月２日(土)のＢＳ１スペシャル「“高度理系人材”を獲得せよ～令和の金の卵　争奪戦～」を見て、私もデジタル人材の育成に関与しており、現状は認識しているつもりだが、この番組は日本が抱える課題をさまざまな切り口から的確にレポートしてい

た。最近では産学連携で新しい人材の育成の道をつくることや、文理融合といった教育の重要性が認識され、新たな取り組みがされているということで、再生の種まきになればと思いながら視聴した。高度理系人材の不足に関しては、日本の競争力に決定的に影響することなので、未来へ警鐘を鳴らすという意味でも、こういう番組を望んでいた。取材力のすばらしさにも感心し視座を得ることができたよい企画だった。東北もデジタル化が遅れているため、ＮＨＫの東北各局には、東北が一体どのような状況なのか、今後どのような仕組みをつくっていくべきなのかを、豊富な取材力で番組化してほしい。

(なお、欠席の委員より、文書で次の意見が寄せられた)

○　４月１８日(月)の映像の世紀バタフライエフェクトを見た。今年度の放送番組編集計画に、世界中の貴重な映像記録を活用したＮＨＫにしかできない番組づくりとあったが、まさしくそのとおりだった。たった４５分に、気づきと驚き、感動が詰まっていて、作曲家の加古隆さんの音楽と相まって感極まる番組だった。私もドイツの元首相であるメルケル氏のことばやメッセージに何度も感銘を受けており、彼女が１６年にわたる長期政権で数々の難題に立ち向かい決断できた信念がどこから来るものなのか、今回それが腑に落ちた。退任式で曲を聴きながら涙を流すメルケル氏の姿から一人の女性としての心情が伝わってきた。メルケル氏の民主主義に対するメッセージは、くしくも現在のウクライナと重なり、タイムリーに受け止めざるを得なかった。「民主主義はいつもそこにあるわけではない」ということばの意味が、今だからこそ視聴者の心に響いたのではないかと思った。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局